

第48図 SX26・74・75・86・121 実測図 (1/30)

石製品 (117) 黒曜石製の石鏃。分厚く雑な作りである。

2号石棺墓 (第46図)

調査区南西部に位置し、6・7号石蓋土坑墓を切る。石材は抜き取られているが、石材を設置した掘方痕跡から石棺と判断した。掘方の平面は不整な長方形で、長軸2.5m、短軸2.0m、深さ0.6mである。石材の掘方痕跡から小口は1石、側壁は4石程度と想定される。石棺の床面は長軸1.2m、短軸0.2～0.25mで、わずかに朱の痕跡が認められる。

⑤その他の弥生時代遺構

SX26 (第48図)

調査区中央に位置し、SX17に切られる。平面は不整な長方形で、長軸2.0m、短軸1.1m、深さ0.3m

である。床面は北側がテラスとなり、南側がピット状に深くなる。弥生土器の広口壺が出土した。

出土遺物（第 49 図、図版 83）

弥生土器（118） 広口壺で、口縁部は素口縁である。頸部内面から外面にかけて丹塗りである。口縁部は外湾して外に大きく開く。胴部上位に最大径がある肩の張る形態で、最大径の位置に 1 条の M 字突帯を貼り付ける。突帯の上位には、三角形状の線刻があり、頂点から放射状に浅い線刻を施す。現状では 2 か所が残存するが、両者の間隔から推定すると本来は 4 か所にあったと思われる。口縁部と突帯はヨコナデ。頸部は外面がタテ方向のミガキで、内面はヨコ方向のミガキ。胴部外面の突帯から上はヨコ方向のミガキで、突帯から下は磨滅で不明。胴部内面と底部内外面はナデ。

SX74（第 48 図、図版 83）

調査区南東部に位置し、SX75 と接する。平面は円形で、直径 1.3m である。床面は東側がテラス状となり、西側がピット状に深くなる。深さは 0.8m である。SX74・75 周辺で、弥生土器・甕棺片が出土した。

SX75（第 48 図）

調査区南東部に位置し、SX74 と接する。平面は楕円形で、長軸 1.7m、短軸 1.1m である。床面は北側・西側がテラス状となり、東側がピット状に深くなる。深さは 0.7m である。SX74・75 周辺で、弥生土器・甕棺片が出土しており、ここで報告する。

SX74・75 出土遺物（第 49 図）

弥生土器（119～124） 119 は鋤先状の口縁部片で、口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付ける。胴部内面がナデ、他はヨコナデ。120～124 は甕棺の破片である。120 は胴部に丸みをもつものと思われる。口縁部内外面はヨコナデ、胴部はナデ。121 は口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付ける。口縁部内側は外側に比べて薄く長く張り出す。口縁部内外面と突帯はヨコナデ、他はナデ。122・123 は口縁部片で、いずれも T 字状を呈す。122 は口縁部が外側へ強く張り出す。122・123 ともにヨコナデである。124 は甕の底部片で内外面ともにナデ。

土製品（125） 不明土製品で、軽石のように軽い。軽さの要因は胎土の空隙の多さにあると考えられるが、肉眼観察では全くわからない。

SX86（第 48 図）

調査区北側に位置し、SX87・88 に切られる。平面は円形で、直径 0.7m、深さ 0.5m である。近世墓の可能性もある。出土遺物はない。

SX121（第 48 図）

調査区中央東側に位置し、SX118 に切られる。平面は不整な楕円形で、長軸 0.8m、短軸 0.75m、深さ 0.45m である。出土遺物はない。

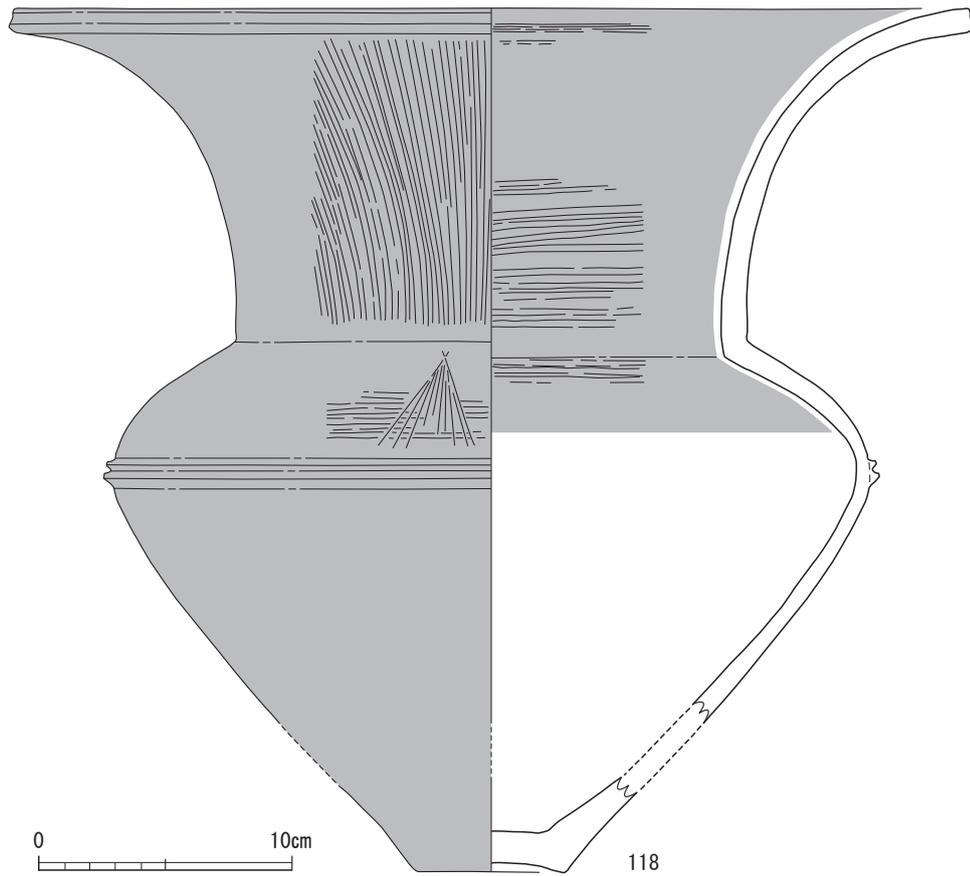
SX138（第 50 図）

調査区中央東側に位置する。平面は不整な円形で、直径 1.3m である。床面は周囲がテラス状となり、中央部がすり鉢状に深くなる。深さは 0.6m である。埋土中から弥生土器が出土した。

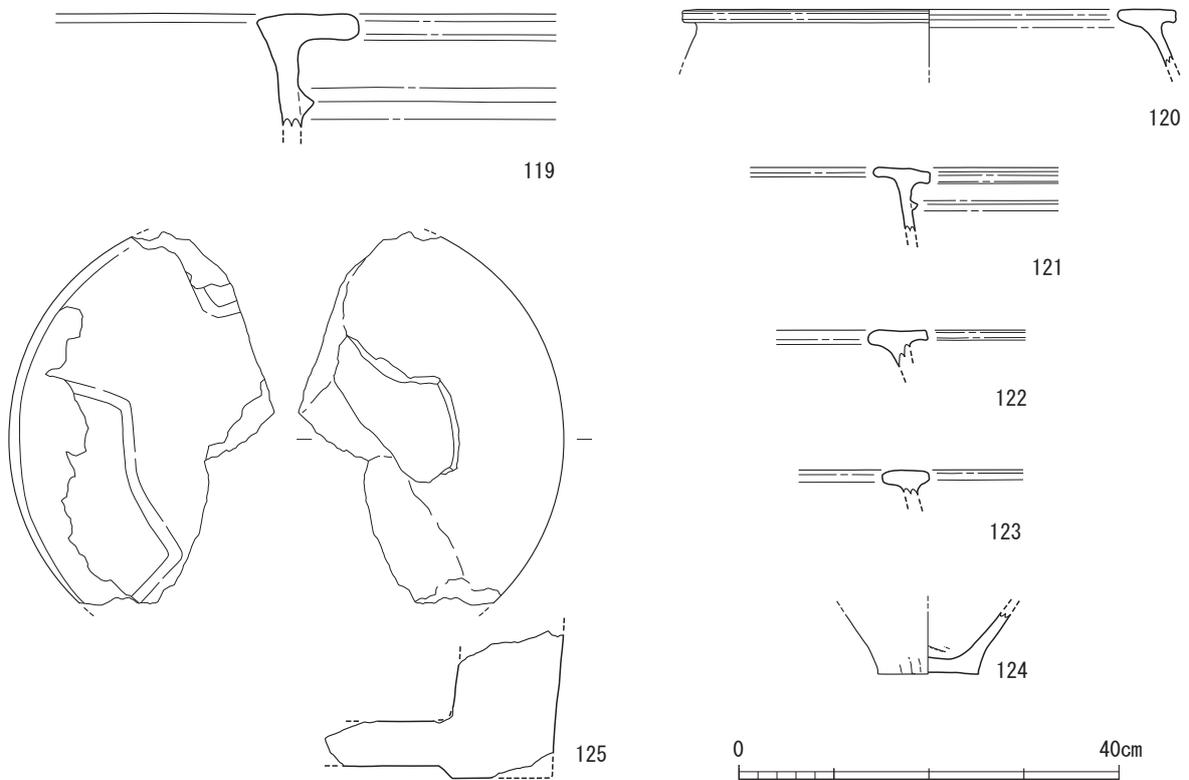
出土遺物（第 51 図、図版 83）

弥生土器（126） 広口壺の胴部片で、外面は丹塗りである。胴部最大径付近に 1 条の M 字突帯を貼

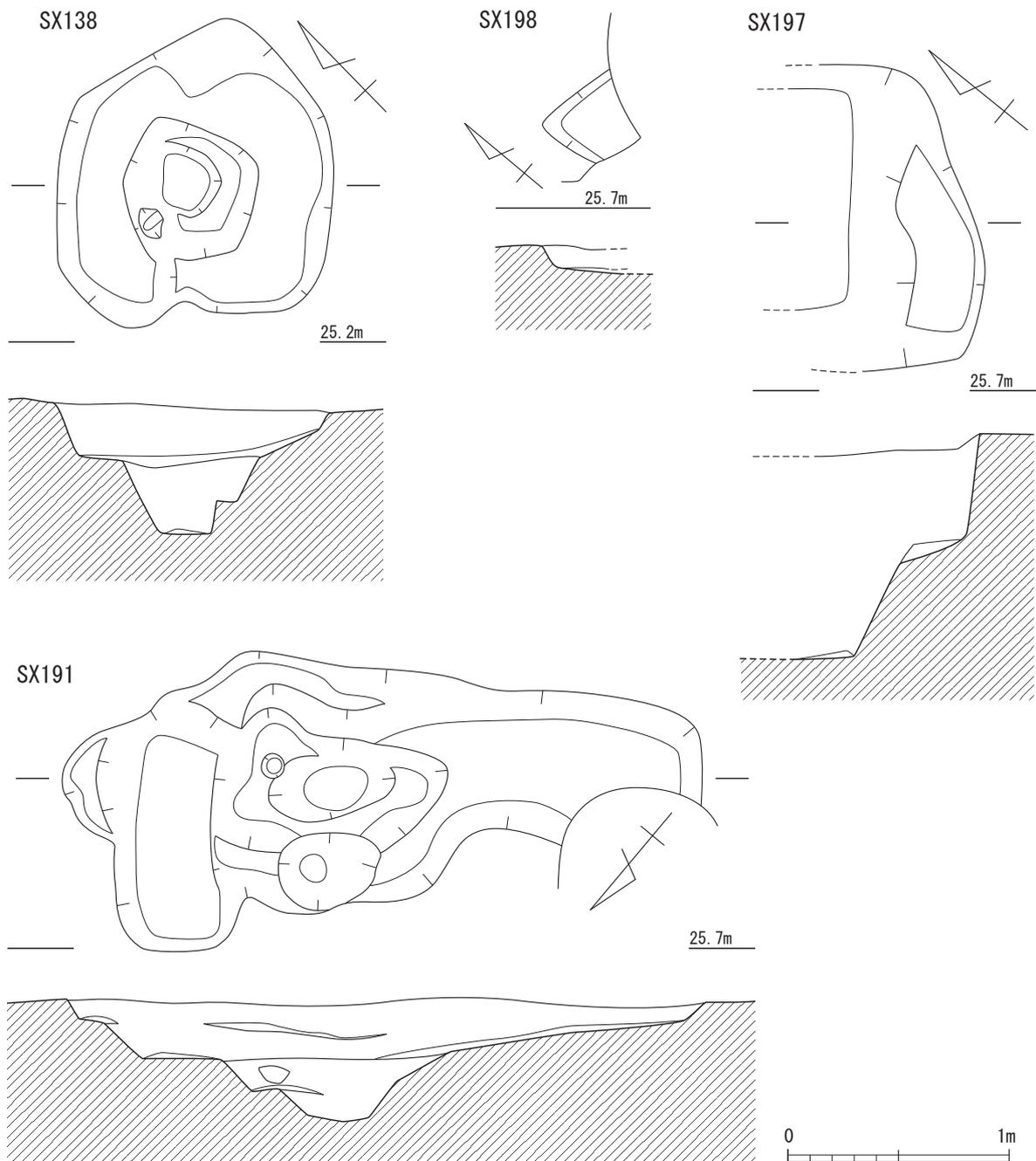
SX26



SX74・75



第49図 弥生時代遺構出土遺物実測図(2)
(120～124は1/8、他は1/3)



第50図 SX138・191・197・198 実測図 (1/30)

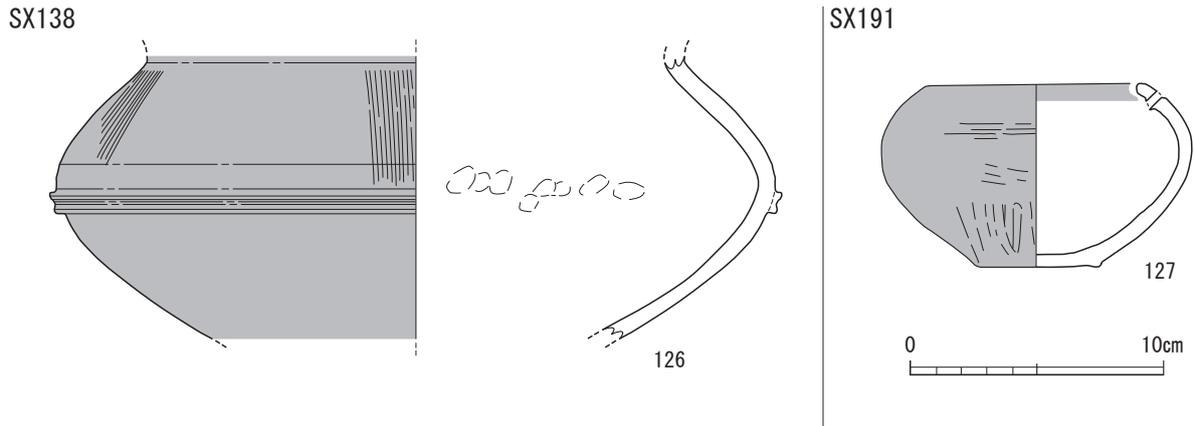
り付け、頸部と突帯の間には、タテ方向の暗文を4か所施す。突帯部はヨコナデ、他は内外面ともにナデ。

SX191 (第50図)

調査区中央東側に位置し、列状墓に平行する。平面は不整形で溝状を呈し、長軸2.9m、短軸0.7～1.1mである。東西にテラスがあり、中央部がすり鉢状に深くなる。最深部で0.5mである。埋土中で弥生土器無頸壺が出土した。

出土遺物 (第51図、図版83)

弥生土器 (127) 完形品の無頸壺。口縁部内面から外面は丹塗り。口縁端部下に1つつ2か所の



第 51 図 弥生時代遺構出土遺物実測図（3）（1/3）

穿孔がある。器面は摩耗するが、胴部外面下位はタテ方向、上位から中位はヨコ方向のミガキ調整。胴部内面と底部外面はナデ。

SX197（第 50 図）

調査区南西部に位置し、33号甕棺墓に切られる。平面は略方形を呈するものと考えられる。長軸 1.0m 以上、短軸 1.4m、深さ 1.0m で、南側にテラスがある。土坑墓の可能性もある。出土遺物はない。

SX198（第 50 図）

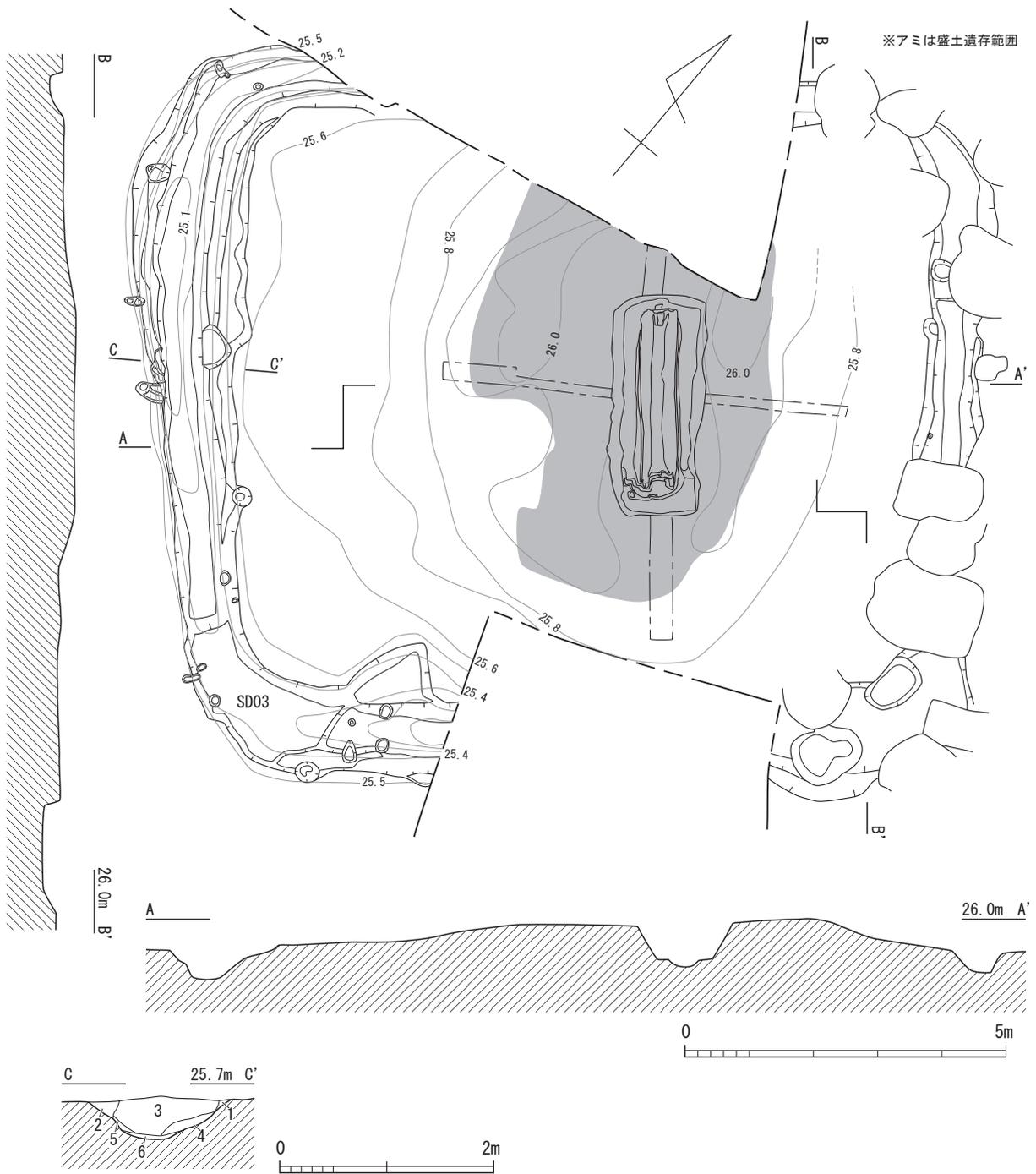
調査区南西端に位置し、45号甕棺墓に切られる。残存状況が悪いため、平面形や規模は不明であるが、弥生時代甕棺墓に切られることから、弥生時代の遺構である可能性が高い。出土遺物はない。

（2）古墳時代の遺構

1号墳（SD03）（第 52～54 図、図版 50～53）

調査区北部に位置し、西側に 2号墳、東側に 3号墳が隣接する。東西 10.5～11m、南北 8.5～9m の方墳で、四周に周溝が巡る。墳丘はほとんど遺存しないが、北側の一部に盛土が残る。墓坑南小口に接する墳丘盛土最下層（地山整形面直上）で袋状鉄斧が 2点出土した。周溝は幅 0.8～1.5m、深さ 0.3～0.4m、断面逆台形を呈する。周溝内からは土師器壺の他、多数の弥生土器片が出土した。

主体部は中央やや東よりに 1基ある。主軸を N-39°-W にとる割竹形木棺である。墓坑は平面長方形で二段掘状となり、上段は長さ 3.5m、幅 1.4～1.5m、深さ 0.3～0.35m、下段は長さ 2.95m、幅 0.5m、深さ 0.25m である。木棺を下段墓坑床面に設置した後、棺全体を粘土で被覆したものと考えられる。棺材は遺存せず、棺内には棺が腐朽した後に流入したと考えられる粘質土が堆積する。南北小口部は粘土の痕跡が「凹」字状となっており、棺小口部の痕跡と考えられる。木棺は推定で全長 2.3m、幅は 0.5m ほどとなる。床面は北側が広いことから、頭位方向は北側の可能性がある。なお、南側小口部の裏込め粘土下（墓坑下段床面直上）には朱の散布が認められ、棺設置前の儀礼の痕跡と考えられる。また、下段西側の床面付近では、壁面の立ち上がりに接する状態で鉄製刀子が出土した。



第52図 1号墳実測図(1/100)・周溝(SD03)土層図(1/60)

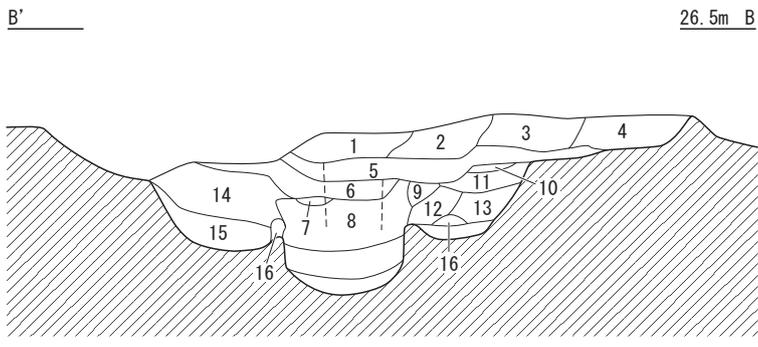
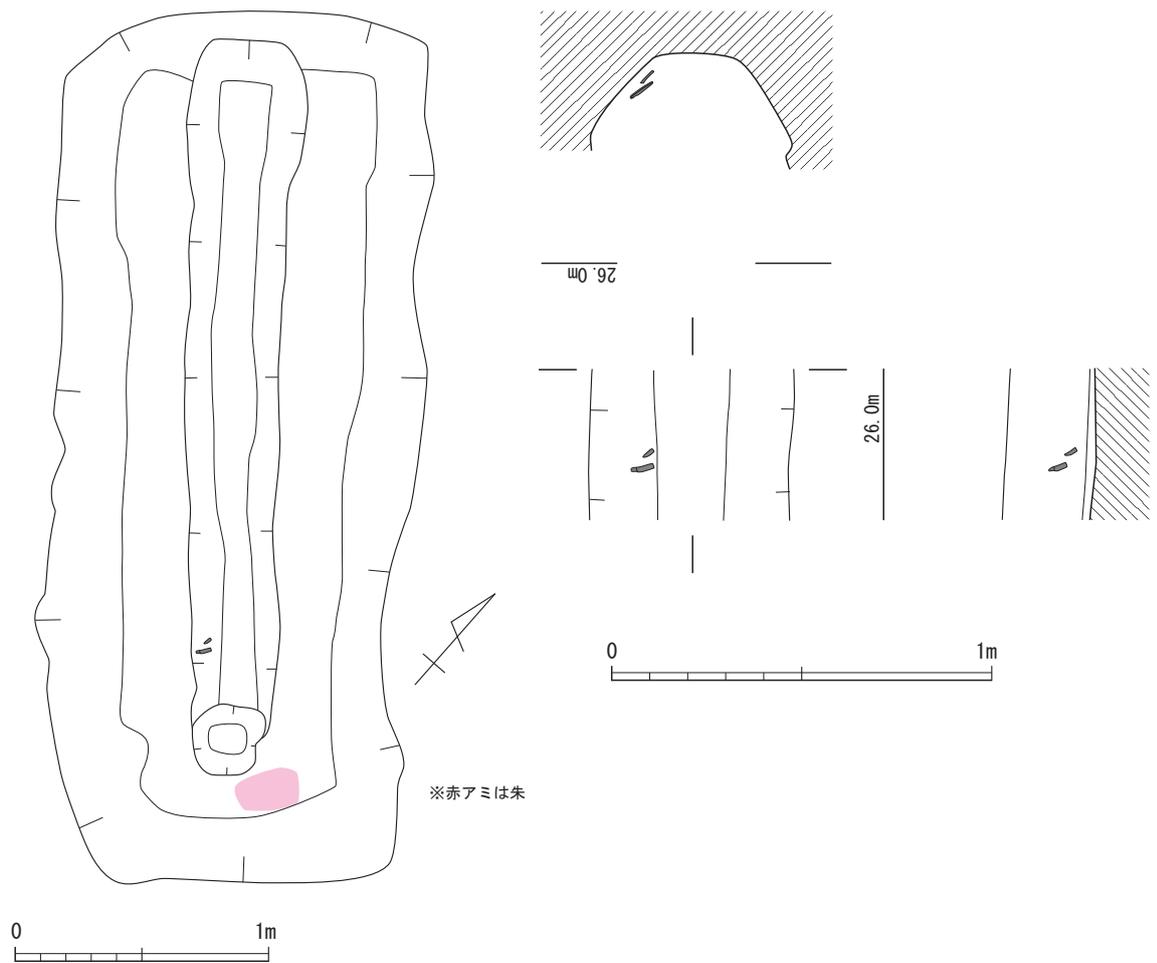
周溝出土遺物(第55図、図版83)

土師器(128) 小型丸底壺。胴部上位が膨らみ、底部は尖底気味となろうか。口縁部はわずかに内湾気味にのびる。内外面ともにヨコナデで外面は磨滅するが、一部にハケメが残り内面はナデ。

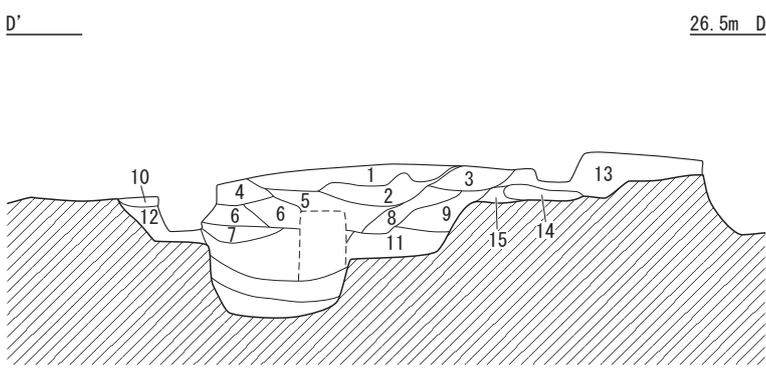
墳丘盛土出土遺物(第55図、図版84)

鉄製品(129・130) いずれも鍛造の袋状鉄斧。129は劣化が著しく詳細不明であるが、袋部の折り曲げは確認できない。130の袋部は折り曲げて作るが、劣化が著しく一方は破損する。

主体部出土遺物(第55図、図版84)

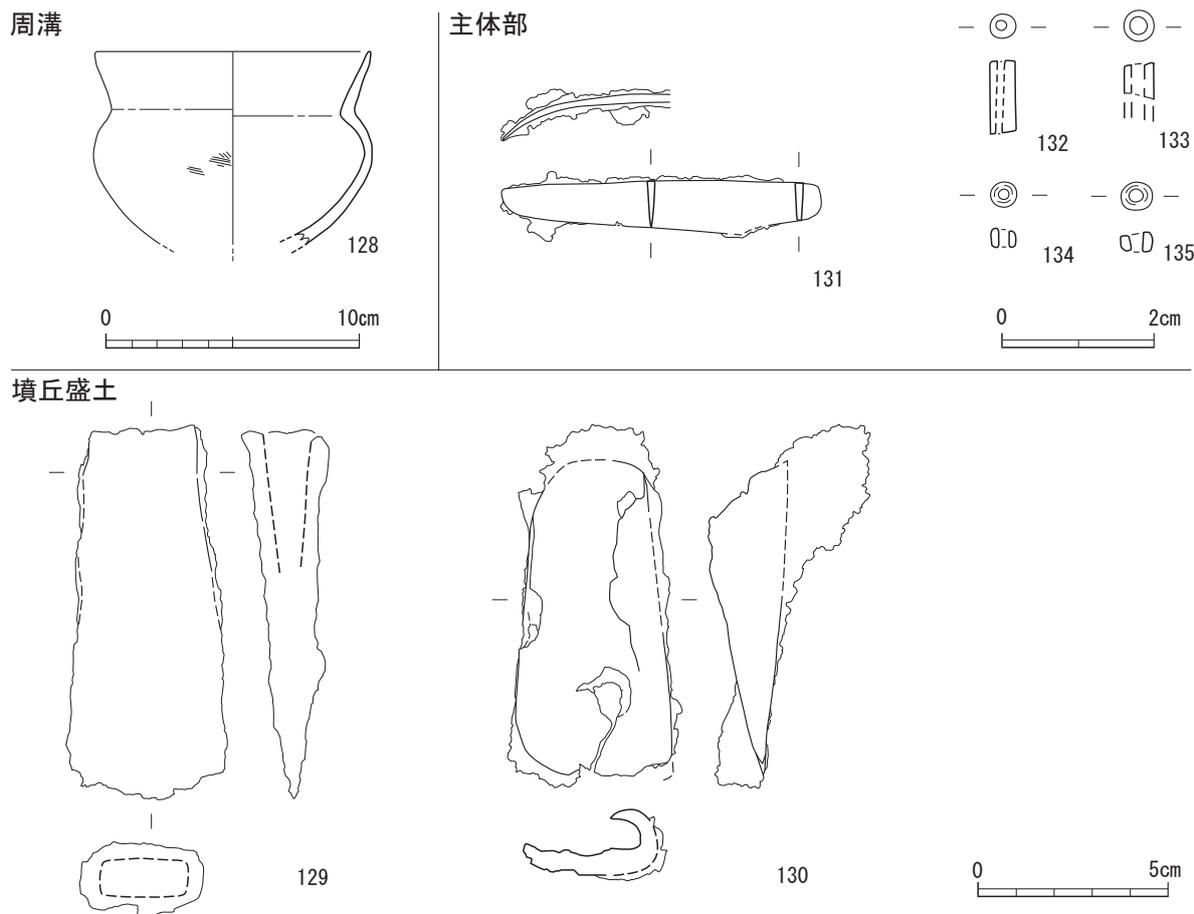


1. A-A' 2層
2. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 締まりあり φ2~10mmの明黄褐色粘質土 (10YR6/6, 6/4) を多く含む
3. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 締まりあり φ1mm前後の礫を少し含む
4. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 締まりあり 明黄褐色粘質土を少し含む
5. A-A' 3層
6. A-A' 8層
7. A-A' 5層
8. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 締まり弱い φ2~5mmの明黄褐色粘質土 (10YR6/6) 砂粒を多く含む
9. 明黄褐色粘質土、褐灰色粘質土混土 (10YR6/6, 10YR5/1) 締まり弱い
10. 明黄褐色粘質土、褐灰色粘質土混土 (10YR6/6, 10YR5/1) 締まり強い
11. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 締まりあり φ1mm以下の砂粒を少し含む
12. 明黄褐色粘質土、褐灰色粘質土混土 (10YR6/6, 10YR5/1) 締まり弱い 黒褐色粘質土 (10YR3/2) を少し含む
13. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 締まり強い 明黄褐色粘質土 (φ5~15mm) を多く含む
14. 13層と同じ
15. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 締まり強い φ1mm前後の砂粒を少し含む
16. ぶい黄橙色粘土 (10YR6/4) 締まり強い



1. A-A' 1層
2. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 締まり強い φ5mm前後の明黄褐色粘質土 (10YR6/6) を含む
3. 褐灰色粘質土 (10YR4/1) 締まり強い φ1mm前後の砂粒を多く含む
4. 3層と同じ 3層より砂粒少ない
5. a A-A' 4層
5. b A-A' 5層
6. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 締まり強い
7. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 締まりあり φ1mm前後の砂粒を少し含む
8. 褐灰色粘質土 (10YR4/1) 締まり強い φ2~5mmの明黄褐色粘質土 (10YR6/6) を多く含む
9. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 締まり強い φ2~5mmの明黄褐色粘質土 (10YR6/6) を多く含む
10. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 締まり強い
11. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 締まり強い φ1~3mmの砂粒を多く含む
12. 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 締まり強い φ1~3mmの砂粒を多く含む 明黄褐色粘質土を少し含む
13. 明黄褐色粘質土、褐灰色粘質土混土 (10YR6/6, 10YR5/1) 締まり強い
14. 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) 締まり強い 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) を少し含む
15. 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) 締まり強い 褐灰色土 (10YR5/1) を少し含む

第54図 1号墳主体部掘方実測図・土層図 (1/30)・鉄器出土状況実測図 (1/20)



第 55 図 1 号墳出土遺物実測図 (1)
(128 は 1/3、129 ~ 131 は 1/2、132 ~ 135 は原寸)

鉄製品 (131) 刀子。身の中程から鋒にかけて湾曲する。

石製品 (132・133) いずれも碧玉製管玉。片側穿孔である。

ガラス製品 (134・135) 134 は青色の小玉で、135 は青緑色の小玉。

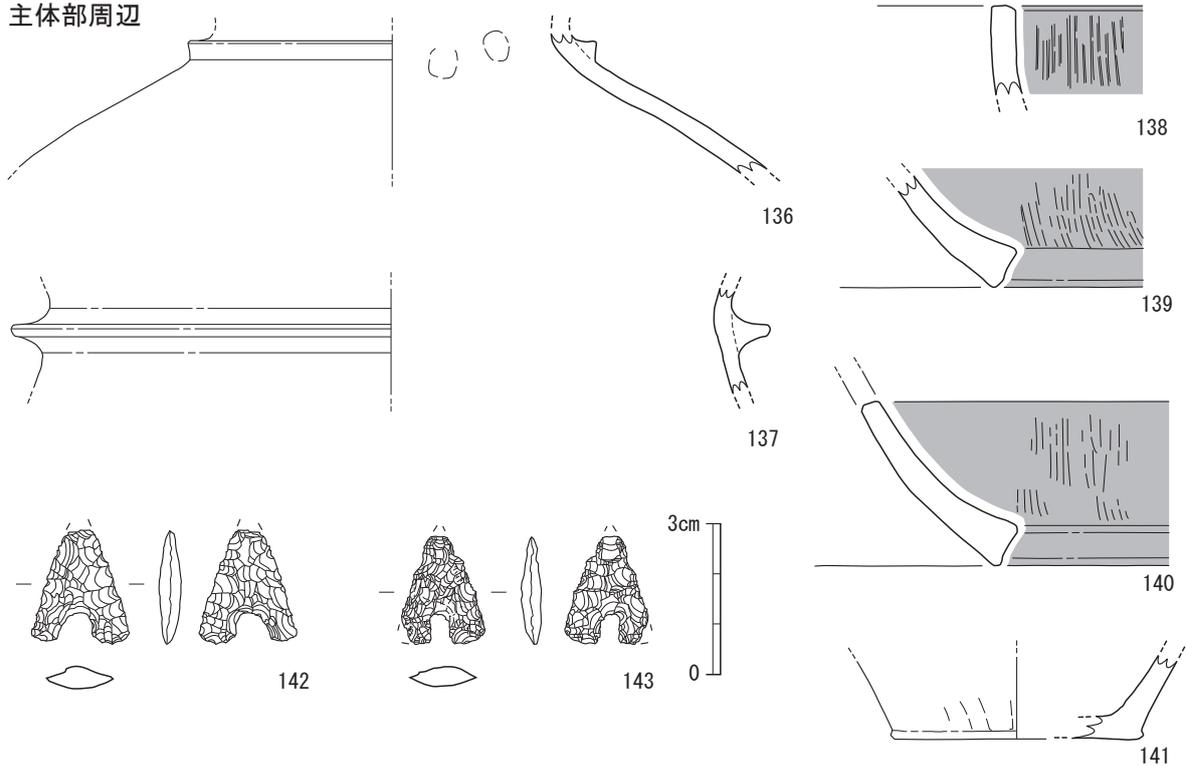
主体部周辺出土遺物 (第 56 図、図版 84)

弥生土器 (136 ~ 141) 136 は壺。頸部に 1 条の三角突帯を貼り付ける。突帯はヨコナデ、内外面ともにナデ。137 は瓢形土器の胴部上位の破片。端部に丸みがあるコの字状突帯を 1 条貼り付ける。外面ヨコナデ、内面ナデ。138 は筒形器台の口縁部と思われる。口縁端部から外面は丹塗り。口縁端部はヨコナデ、外面はタテ方向のミガキである。内面はナデで、下位はヨコナデ。139・140 は筒形器台の脚裾部片で同一個体と考えられる。いずれも外面は丹塗りで、外面はタテ方向のミガキ、裾端部から内面はヨコナデ。140 は透かしの下端が残存する。141 は甕の底部。内外面ともにナデで、外面の底部側面は工具ナデである。

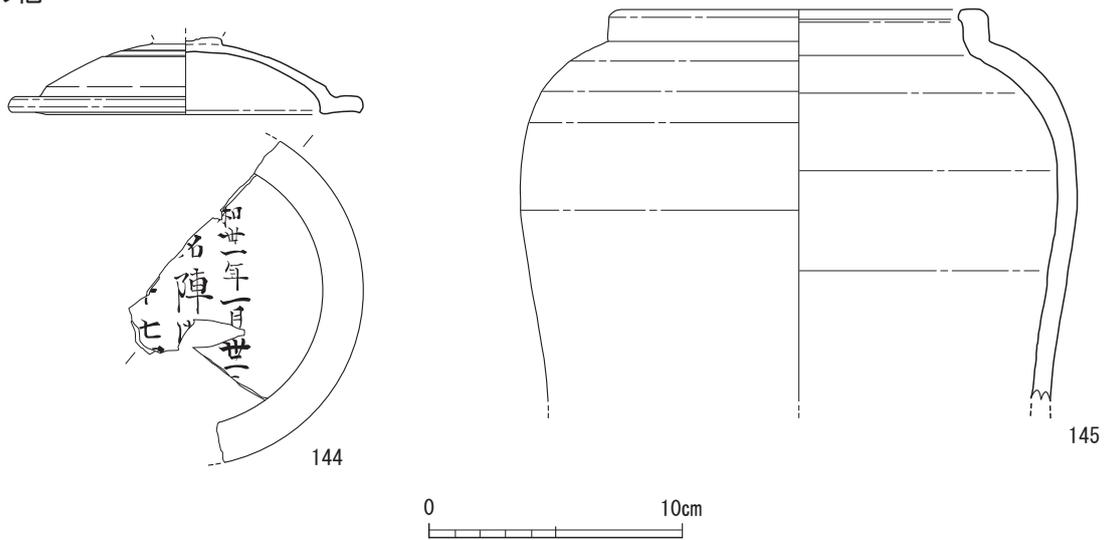
石製品 (142・143) 142 は黒曜石製の石鏃。鋒を欠失する。143 は黒曜石製の石鏃。鋒と片側の脚部をわずかに欠失する。

土師質土器 (144・145) 144 は 145 の蓋と考えられるが、144 は 145 よりも胎土中の雲母の量が多い。内面に「□和卅一年一月卅一日」「名陣内」「十七□」と墨書がある。摘みは欠損する。口縁部

主体部周辺



その他



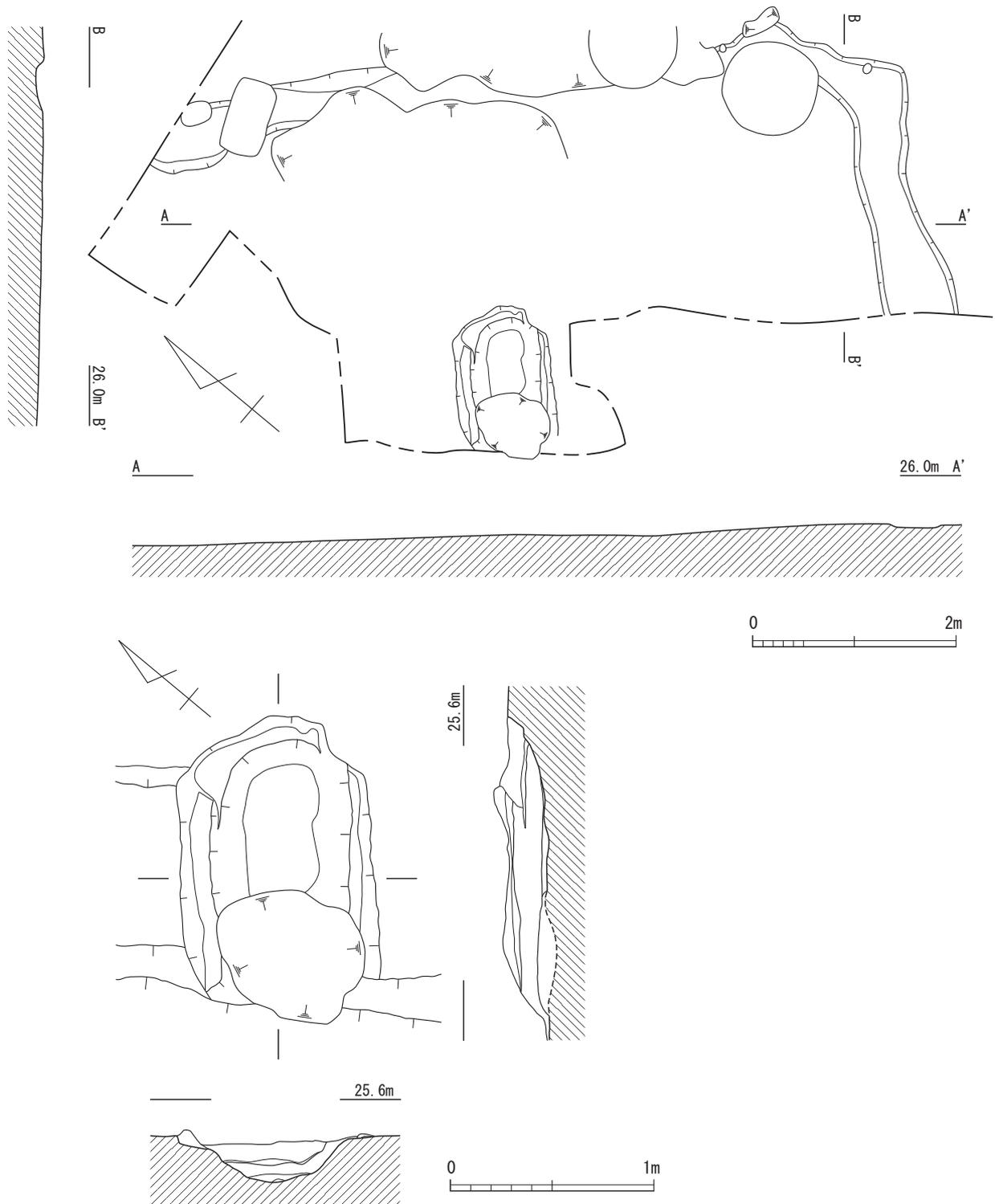
第56図 1号墳出土遺物実測図(2) (142・143は2/3、他は1/3)

内外面と体部内面は回転ナデ。口縁部と欠損する摘み以外の外面は回転ヘラケズリ。145は短頸の壺で、内外面ともに回転ナデ。

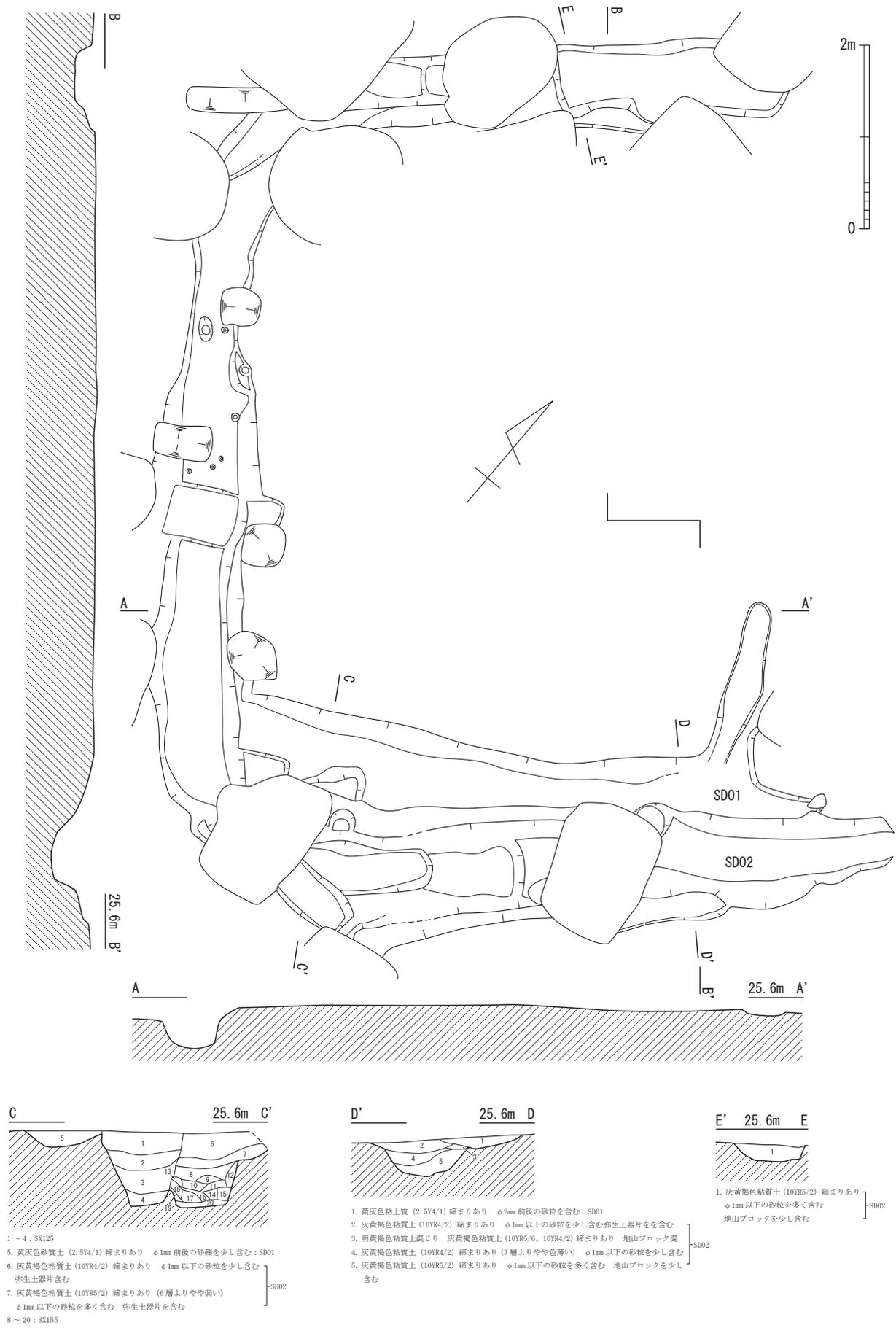
2号墳 (SD05) (第57図、図版54)

調査区北部に位置し、東側に1号墳が隣接する。東側・南側の周溝の一部が残るのみであるが、主体部の位置から東西7～8m、南北6m前後の方墳と考えられる。墳丘は遺存しない。周溝は幅0.5～0.7m、深さ0.1m、断面逆台形を呈する。

主体部は墳丘中央付近に1基ある。主軸をN-44°-Eにとる土坑墓と考えられる。墓坑は平面隅丸長方形で、長さ1.4m以上、幅1.0m(床面で0.4m)、深さ0.2mである。出土遺物はない。



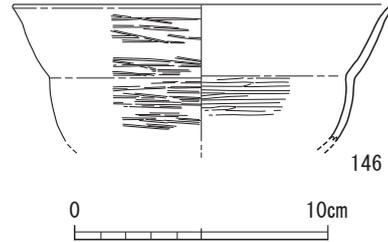
第57図 2号墳実測図 (1/60)・主体部実測図 (1/30)



第58図 3号墳実測図 (1/60)

3号墳 (SD02) (第58図、図版54)

調査区北部に位置し、西側に1号墳が隣接する。東側の周溝は削平されるが、東西7m以上、南北7.5m前後の方墳と考えられる。墳丘は遺存しない。周溝は幅0.7～1.1m、深さ0.4～0.8m、断面逆台形を呈する。周溝内より小型丸底壺が出土した。主体墓は削平を受けるため、詳細は不明である。



第59図 3号墳出土遺物実測図(1/3)

出土遺物 (第59図、図版84)

土師器 (146) 146は小型丸底壺。口縁部は内湾気味に大きく開き、端部はわずかに外反する。口縁部外面と胴部内外面は横方向の緻密なミガキで、口縁部内面は工具によるヨコナデ。

(3) 近世・近現代の遺構**① 甕棺墓****SX01 (第60図、図版55)**

調査区南側に位置する。墓坑は長軸0.9m、短軸0.8mの平面楕円形を呈し、深さは1.65mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部からは銭が出土した。

出土遺物 (第67図、図版99)

銅製品 (159) 6枚が錆のため重なって固着する銅銭である。銭文は不明。

SX04 (第60・62図、図版55)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸0.8m、短軸0.75mの平面楕円形を呈し、深さは1.8mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残り、銭・鉄釘が出土した。

147は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)である。口縁はやや外反し端部は内側に肥厚して玉縁状となる。中位に鈍い段がつく。胴部の張りは小さい。内外面を格子目叩きの後、ヨコナデ調整する。底部に歪みがあり、口縁部が傾いている。内外面に暗褐色の釉を施し、口縁部に目跡がつく。

出土遺物 (第67図、図版94・99)

鉄製品 (160) 角釘。頭部の形状は不明で、先端は欠損する。

銅製品 (161・162) 161は2枚が錆のため重なって固着する銅銭である。銭文は不明。162は2枚がずれて錆のため固着する銅銭。植物繊維と靨が付着する。銭文は不明。

SX05 (第60・62図、図版85)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸1.35m、短軸1.2mの平面楕円形を呈し、深さは1.85mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残り、鉄釘・煙管が出土した。

148は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部は外反気味で端部は内側に肥厚し、玉縁状となる。胴部中位に2条の沈線が巡る。胴部の張りはほとんど無い。口縁部と胴部の境は釉剥ぎし、胴部外面にタタキ痕はほとんど残っていないが、内面上位にわずかに格子目が残る。底部内面も格子目で螺旋状に叩いている。肩部に縦2cm程の「ヨ製」の刻印があり、口縁部に目跡がある。底部外面を除いて内外面に暗褐色の釉を施すが、内面下位はハケ塗りされている。

SX07 (第 60・62 図、図版 55・85)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 0.95m、短軸 0.95m の平面円形を呈し、深さは 1.95m である。墓坑内に甕棺を埋置し、人骨が残る。銭・金属片・木材が出土した。

149 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反気味で端部は内側に肥厚して玉縁状とし、中位に段がつく。内外面に格子目のタタキ痕が残り、底部内面にもわずかに格子目タタキが見える。底部外面を除いて内外面に明褐色の釉を施し、胴部上位に釉の上から「十」と指で描いた痕がある。口縁部には目跡が薄く残る。

SX10 (第 60・62 図、図版 55・56・85)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 0.85m、短軸 0.75m の平面円形を呈し、深さは 0.8m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部からは小玉・陶器片が出土した。改葬を受けているものと考えられ、毛髪が残る。

150 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は立ち上がり、端部は玉縁状である。胴部の張りは小さい。胴部上位に螺旋状に沈線を巡らせ、胴部内外面と、底部内面に格子目のタタキ痕が残る。釉は内外面に施して明褐色を呈す。口縁部は釉剥ぎし、目跡が残る。

SX12 (第 61・62 図、図版 86)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.2m、短軸 1.2m の平面円形を呈し、深さは 1.25m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部からは陶器片が出土した。

151 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は立ち上がり、端部は内側に折り曲げる。胴部の張りは無く、寸胴形となる。口縁部と胴部に 2 条から 3 条の沈線が巡り、底部外面を除き暗褐色の釉を全面に施すが、口縁部と胴部の境は釉剥ぎする。胴部にタタキ痕は観察されないが、底部内面は格子目で叩いている。口縁部には目跡が残る。

SX80 (第 61・62 図、図版 56・86)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 1.35m、短軸 1.1m の平面楕円形を呈し、深さは 1.5m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。陶器が出土した。

152 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、中位に鈍い段がある。口縁端部、口縁部と胴部の境は釉剥ぎし、胴部上位に 2 条、中位に 2 条、下位に 3 条の沈線が巡る。頸部から底部まで肉厚で、外面にわずかに格子目のタタキ痕が観察され、底部内面にも格子目のタタキ痕が残る。内外面に暗赤褐色の釉が施され、口縁部には目跡が残る。

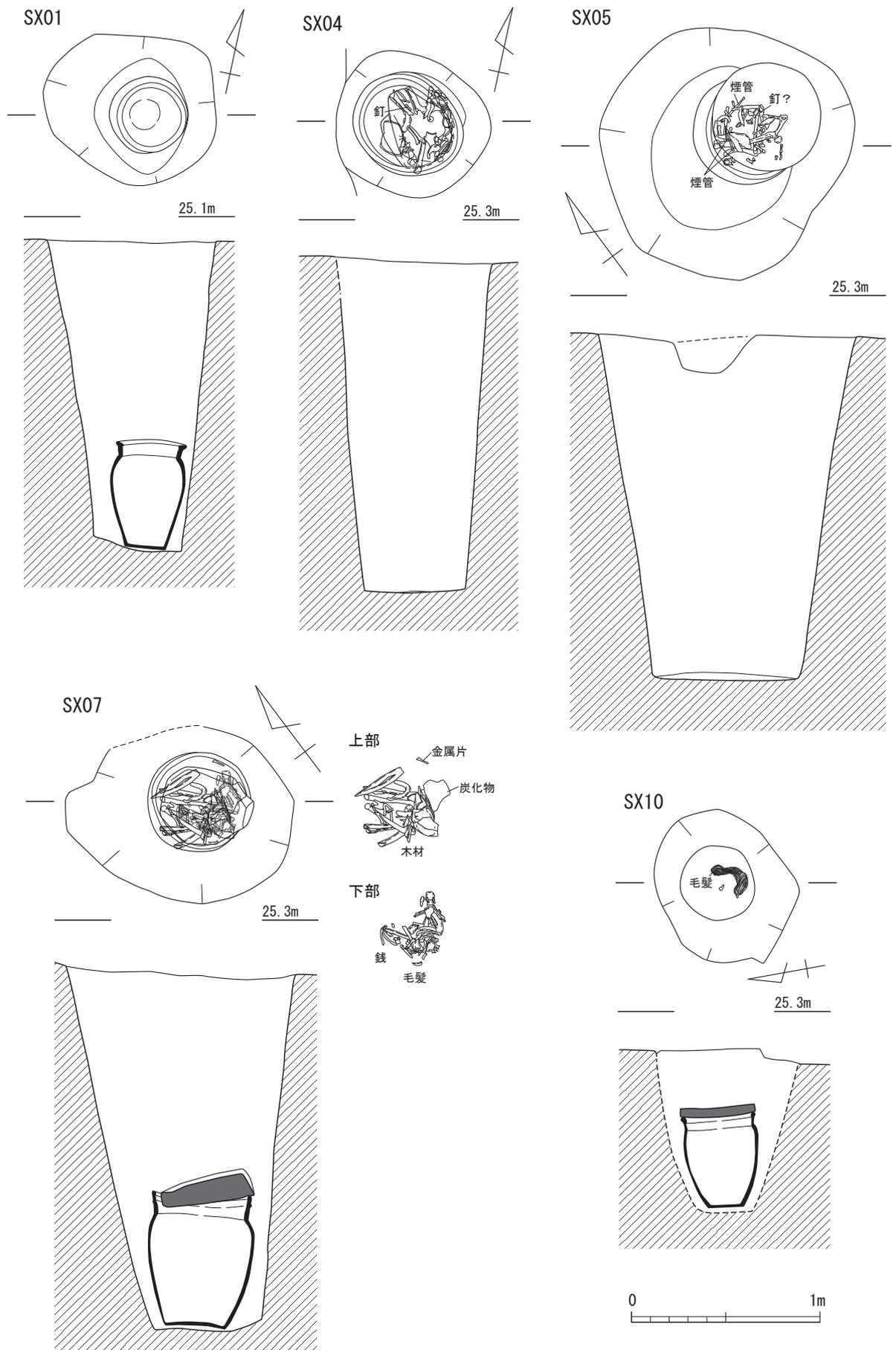
SX81 (第 61 図)

調査区東側に位置する。墓坑は長軸 0.45m、短軸 0.45m の平面円形を呈し、深さは 1.1m である。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

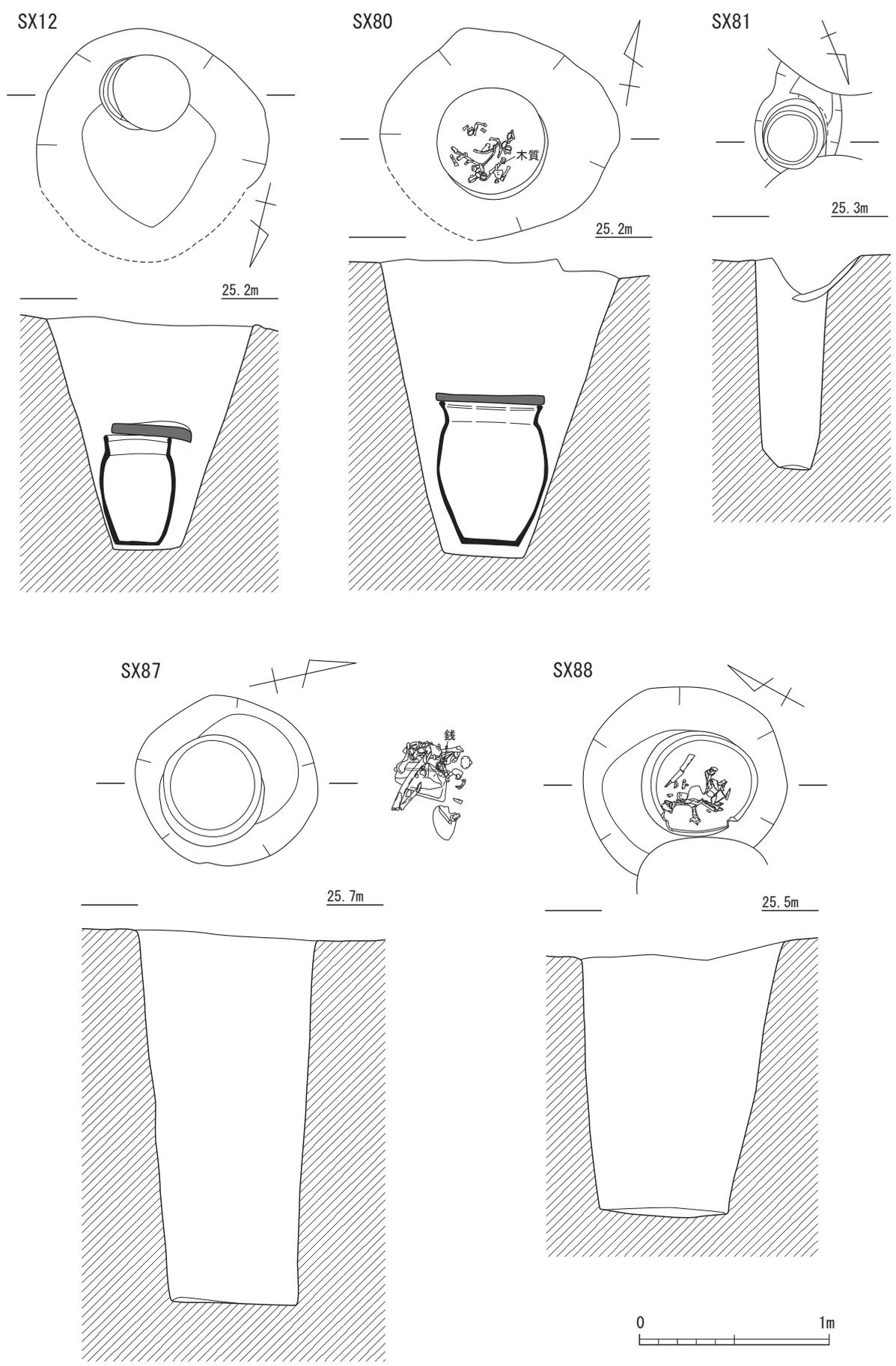
SX87 (第 61 図、図版 56)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.95m、短軸 0.9m の平面円形を呈し、深さは 2.0m である。墓坑内に甕棺を埋置し、人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭・磁器片・ガラス片が出土した。

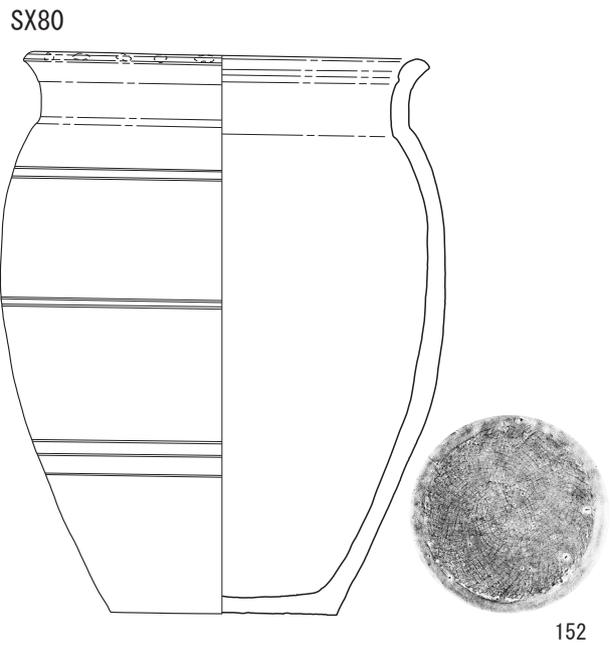
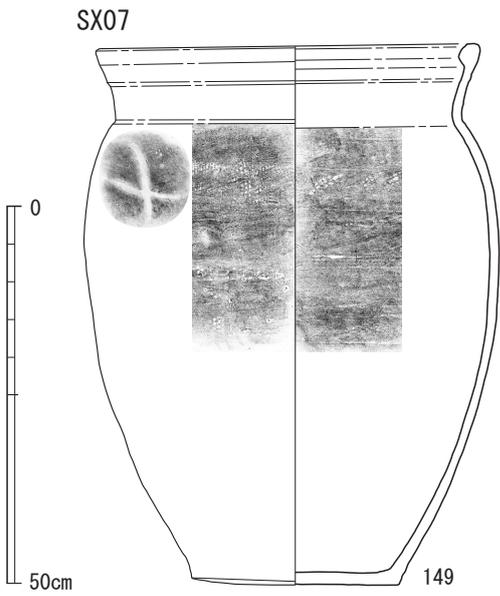
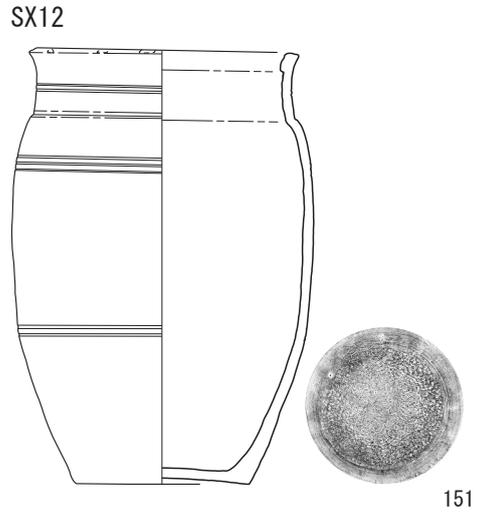
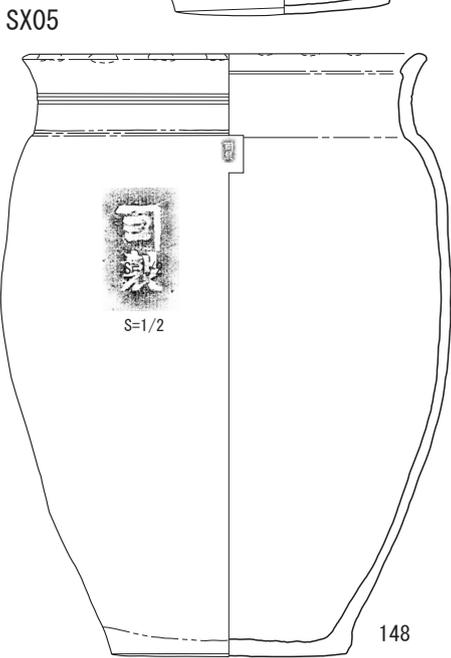
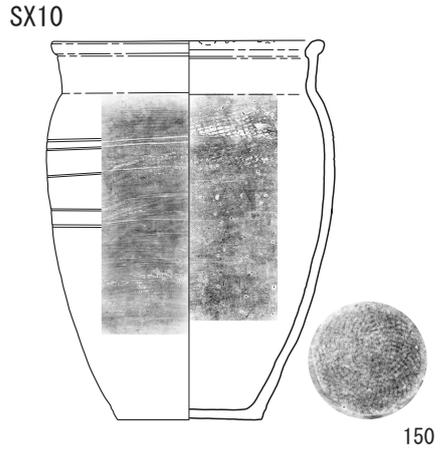
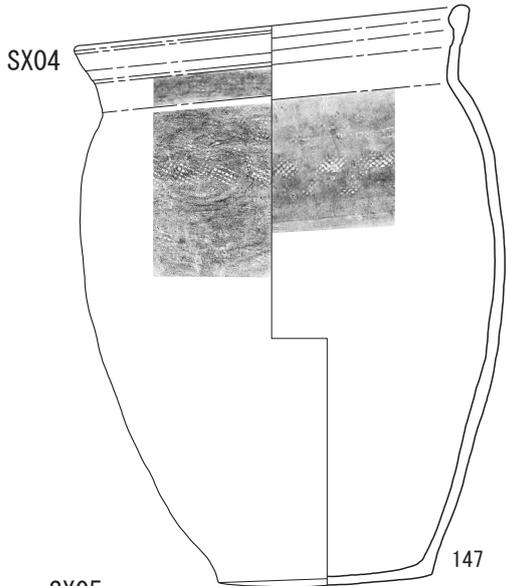
出土遺物 (第 67 図、図版 99)



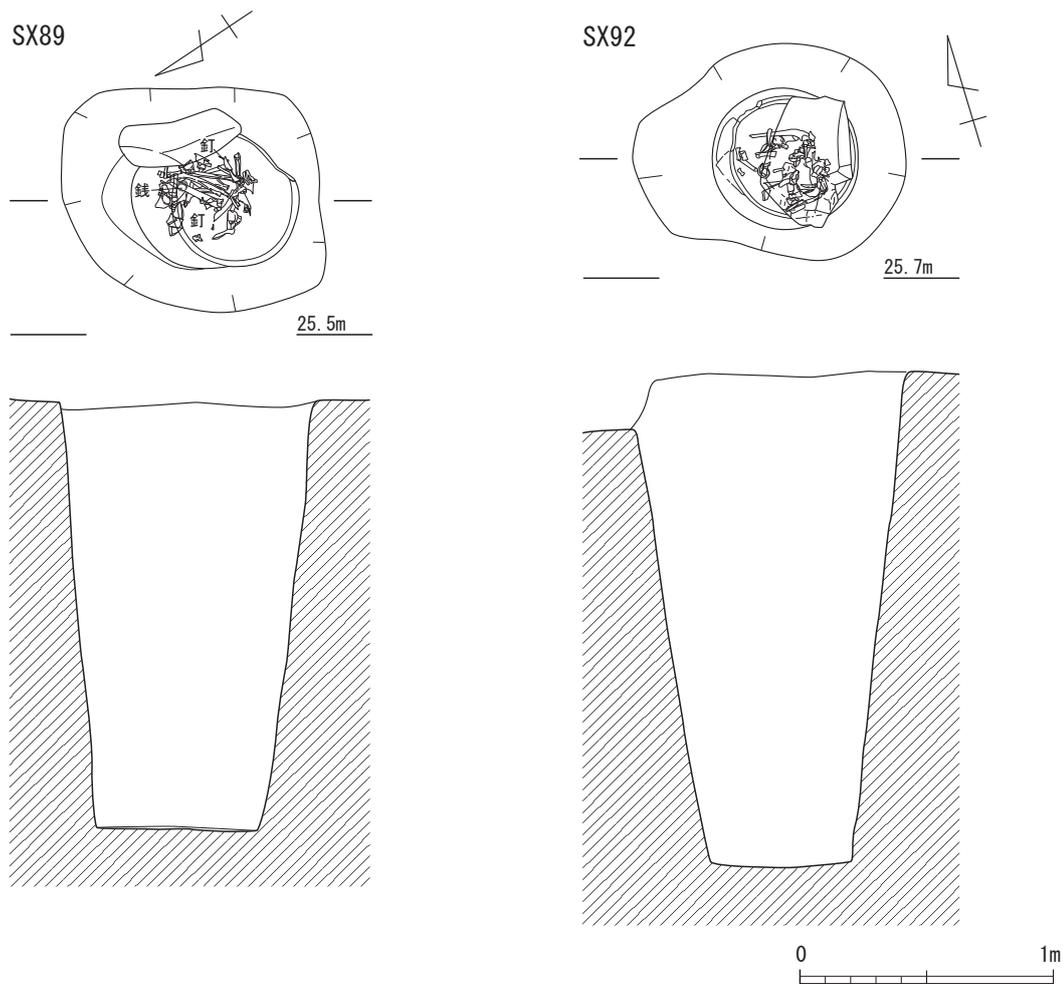
第60図 SX01・04・05・07・10実測図(1/30)



第61図 SX12・80・81・87・88実測図 (1/30)



第 62 図 SX04・05・07・10・12・80 甕棺実測図 (1/10)



第 63 図 SX89・92 実測図 (1/30)

銅製品 (163) 4枚が折り重なって錆のため固着する銅銭で銭文は不明。他に図化していないが鉄銭の破片が2個体分出土している。

SX88 (第 61・66 図、図版 56・86)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 1.1m の平面円形を呈し、深さは 1.5m である。墓坑内に甕棺を埋置し、人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭・磁器片・ガラス片が出土した。

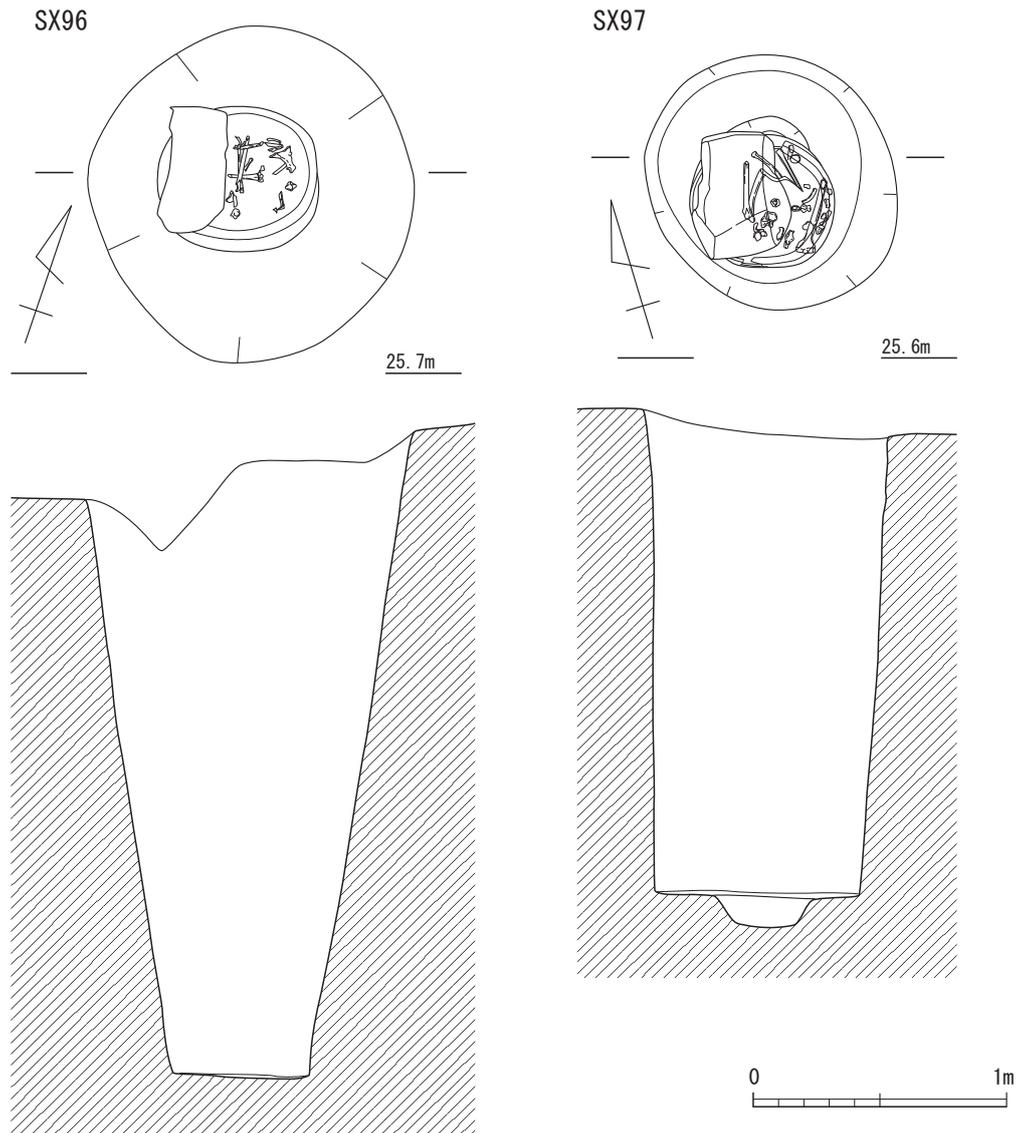
153 は肥前産陶器の大甕 (ハンズーガメ)。口縁部は立ち上がり、端部は内側に折り曲げて玉縁状とするが、コの字状に外方へ突出している。胴部には2条と3条の沈線が巡る。胴部内面に粘土の継ぎ目があり、工具でヨコナデ調整されて、格子目タタキ痕が外面にわずかに残る。底部外面を除いて、暗褐色の釉を内外面に施し、上から薄く黄灰色釉を流し掛けする。底部内面には銅銭2枚が付着した痕が観察される。

出土遺物 (第 67 図、図版 99)

銅製品 (164・165) いずれも銭文不明の銅銭で、165 は3枚が錆のため重なって固着する。

鉄製品 (166) 2枚が重なる固着する鉄銭で、実測図の上1枚はほとんど欠損する。

SX89 (第 63 図)



第 64 図 SX96・97 実測図 (1/30)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 0.9m の隅丸方形を呈し、深さは 1.7m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭・鉄釘が出土した。

出土遺物 (第 67 図、図版 99)

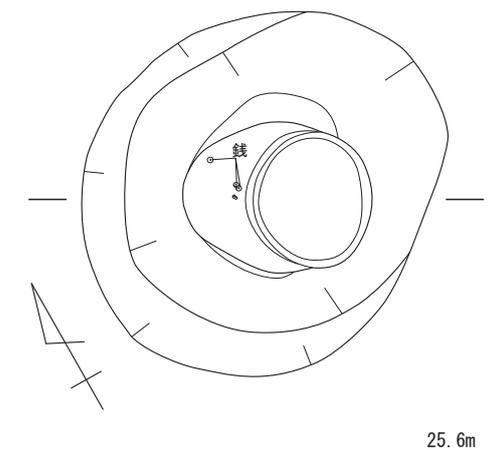
鉄製品 (167・168) 189・190 は銹のため重なって固着する鉄銭である。いずれも 3 枚と思われる。

SX92 (第 63・66 図、図版 56)

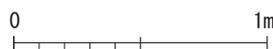
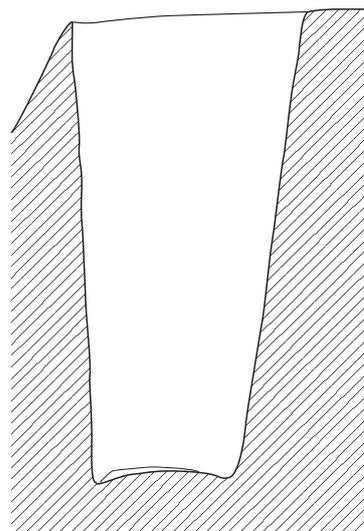
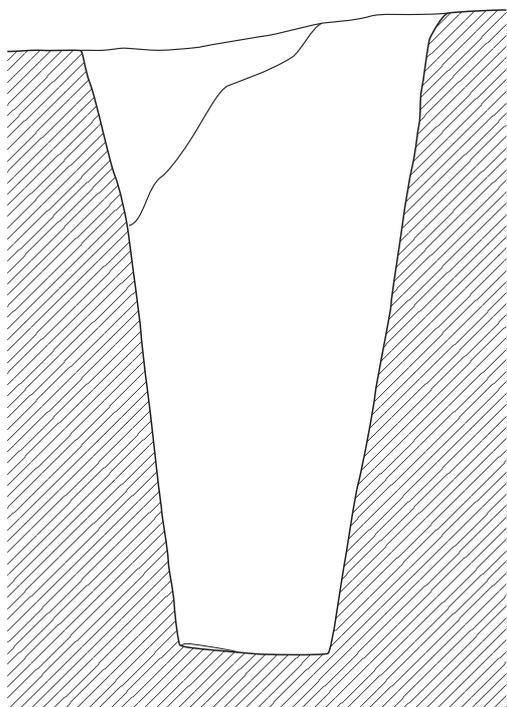
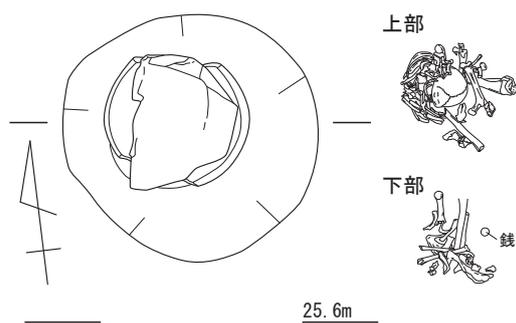
調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 0.9m の平面楕円形を呈し、深さは 1.95m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。副葬品はない。

154 は肥前産陶器の大甕 (ハンズーガメ)。口縁部は立ち上がり、端部は内側に肥厚させて玉縁状とする。中位に段がつく。胴部内外面を格子目で叩いて、内面は工具を使用してヨコナデ調整し

SX100



SX107



第 65 図 SX100・107 実測図 (1/30)

ている。内外面に暗褐色の釉を施し、その上から灰黄色の釉を流し掛けする。口縁部に明瞭な目跡は残っていない。

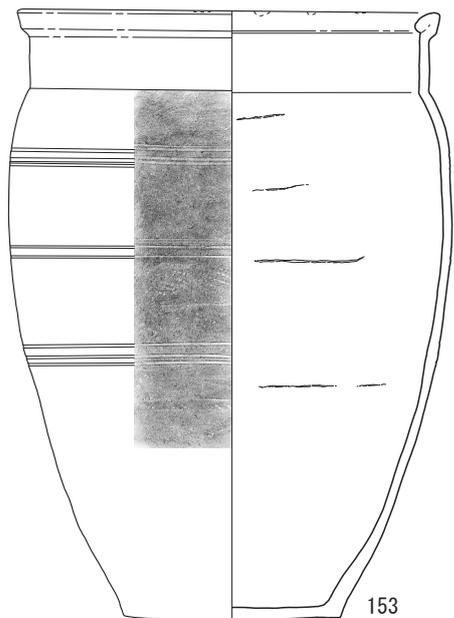
SX96 (第 64 図)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.35m、短軸 1.1m の平面楕円形を呈し、深さは 1.5m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。副葬品はない。

SX97 (第 64・66 図、図版 56・57・87)

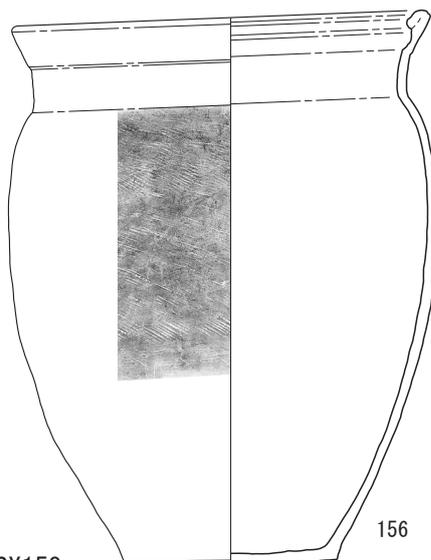
調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 1.0m の平面円形を呈し、深さは 1.9m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。埋土中から銭が出土した。

SX88



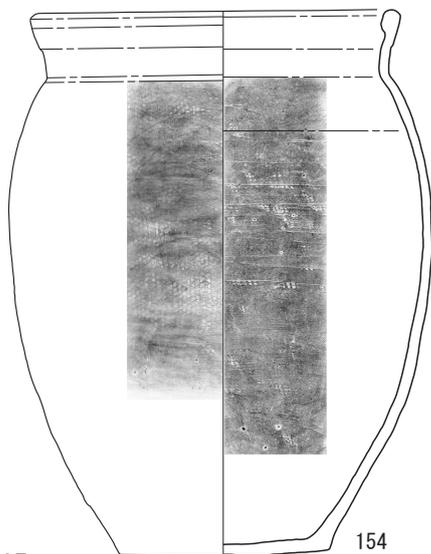
153

SX107



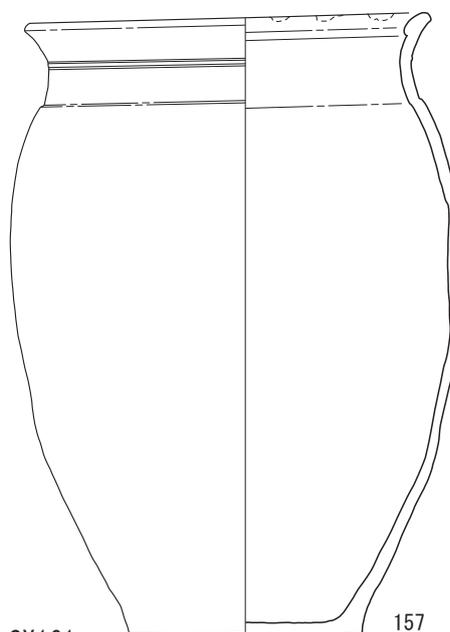
156

SX92



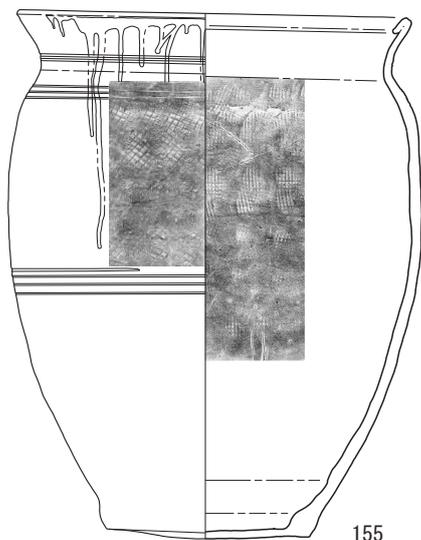
154

SX158



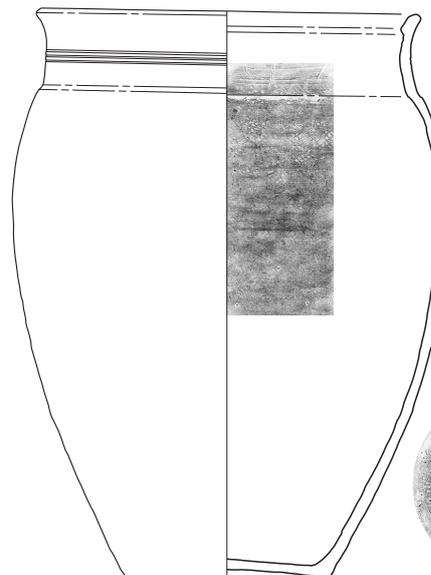
157

SX97

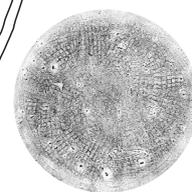


155

SX161



158



第66図 SX88・92・97・107・158・161 甕棺実測図 (1/10)

155 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、中位に2条の沈線が巡る。端部は内側に折り曲げ玉縁状にしている。胴部には内外面に明瞭な格子目のタタキ痕が残り、底部内面にもわずかに格子目が残る。外面上位と中位に3条の沈線が巡る。内外面に暗赤褐色の釉を施し、さらに口縁部から肩部にかけて黄褐色の釉を流し掛けする。内面はハケ塗りである。

出土遺物（第67図、図版99）

銅製品（169）6枚が錆のため固着する。5枚が重なり、その上に1枚が斜めに固着する。6枚のうち5枚は銅銭だが、実測図の下から2枚目は錆の色調から鉄銭の可能性はある。

SX100（第65図、図版57）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.6m、短軸1.2mの平面楕円形を呈し、深さは2.5mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部から銭が出土した。

SX107（第65・66図、図版87）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸1.0mの平面楕円形を呈し、深さは1.8mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭が出土した。

156 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、中位に段がつく。端部は内側に折り曲げ玉縁状とする。胴部の叩きは平行タタキに見えるが、一部格子目になっている。内外面に明褐色の釉を施した後、灰黄色の釉を流し掛けする。口縁端部は釉を剥ぎとっており、わずかに目跡が残る。底部外面は露胎。

出土遺物（第67図、図版99）

銅製品・鉄製品（170～172）170は銅銭の寛永通宝。171は銅銭3枚と鉄銭1枚がずれて錆のため重なって固着する。実測図の上から3枚目が鉄銭で他は銅銭である。実測図の上から2枚目の銅銭は1/2程欠失する。銭文は不明。172は鉄銭で銭文は不明。

SX158（第66・68図、図版57・87）

調査区北側に位置し、SX159を切る。墓坑は長軸1.0m、短軸1.0mの平面楕円形を呈し、深さは2.2mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭が出土した。

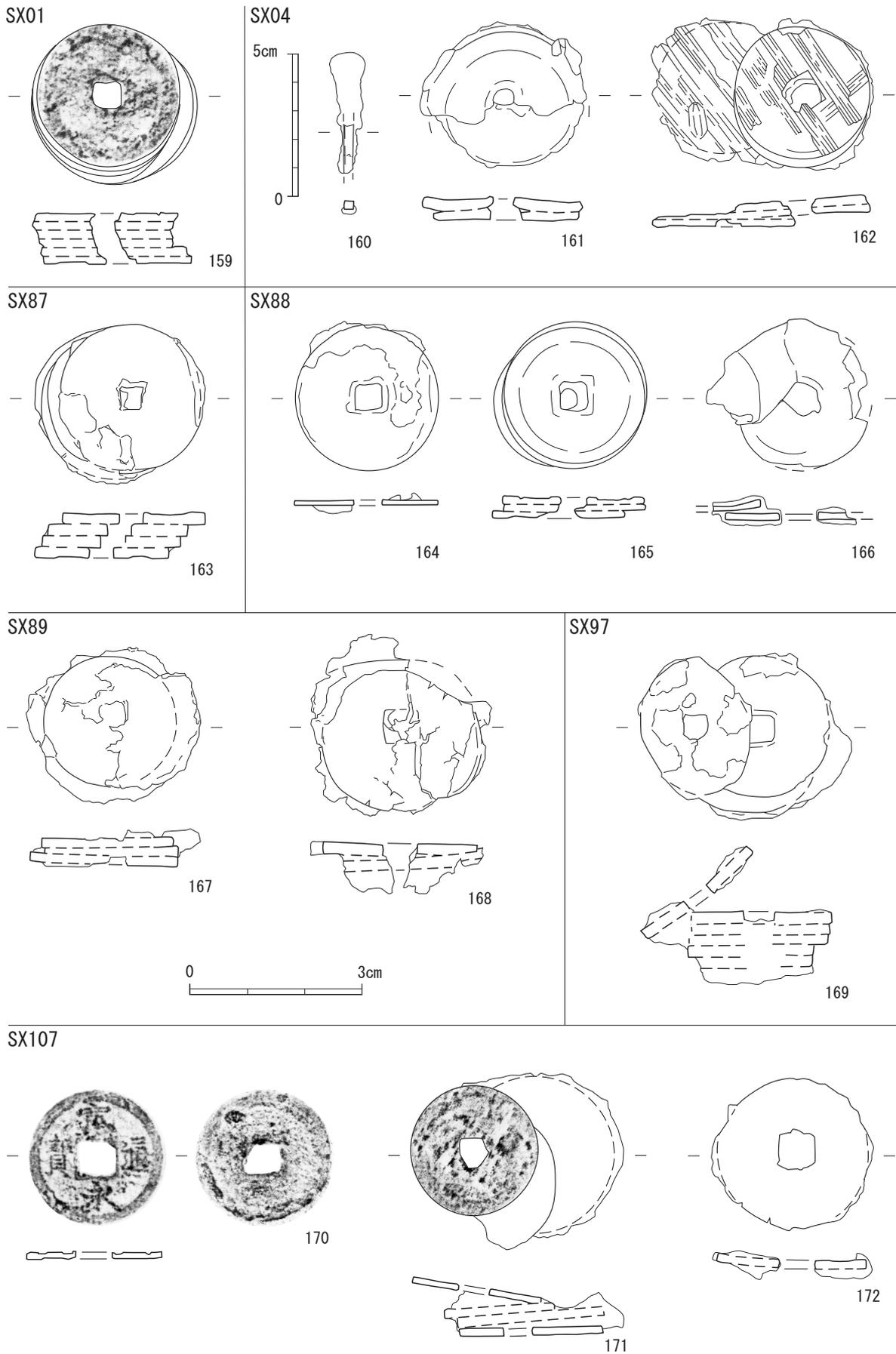
157 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、中位に沈線が巡る。端部は内側に折り曲げ玉縁状にして目跡がつく。胴部外面は工具を使ったヨコナデ調整をしている。内外面に褐色の釉を施すが、内面上位はハケ塗りし、外面はさらに灰黄色の釉を流し掛けする。口縁部と胴部の境は釉を剥ぎとり、底部外面は露胎である。

SX159（第68図、図版57）

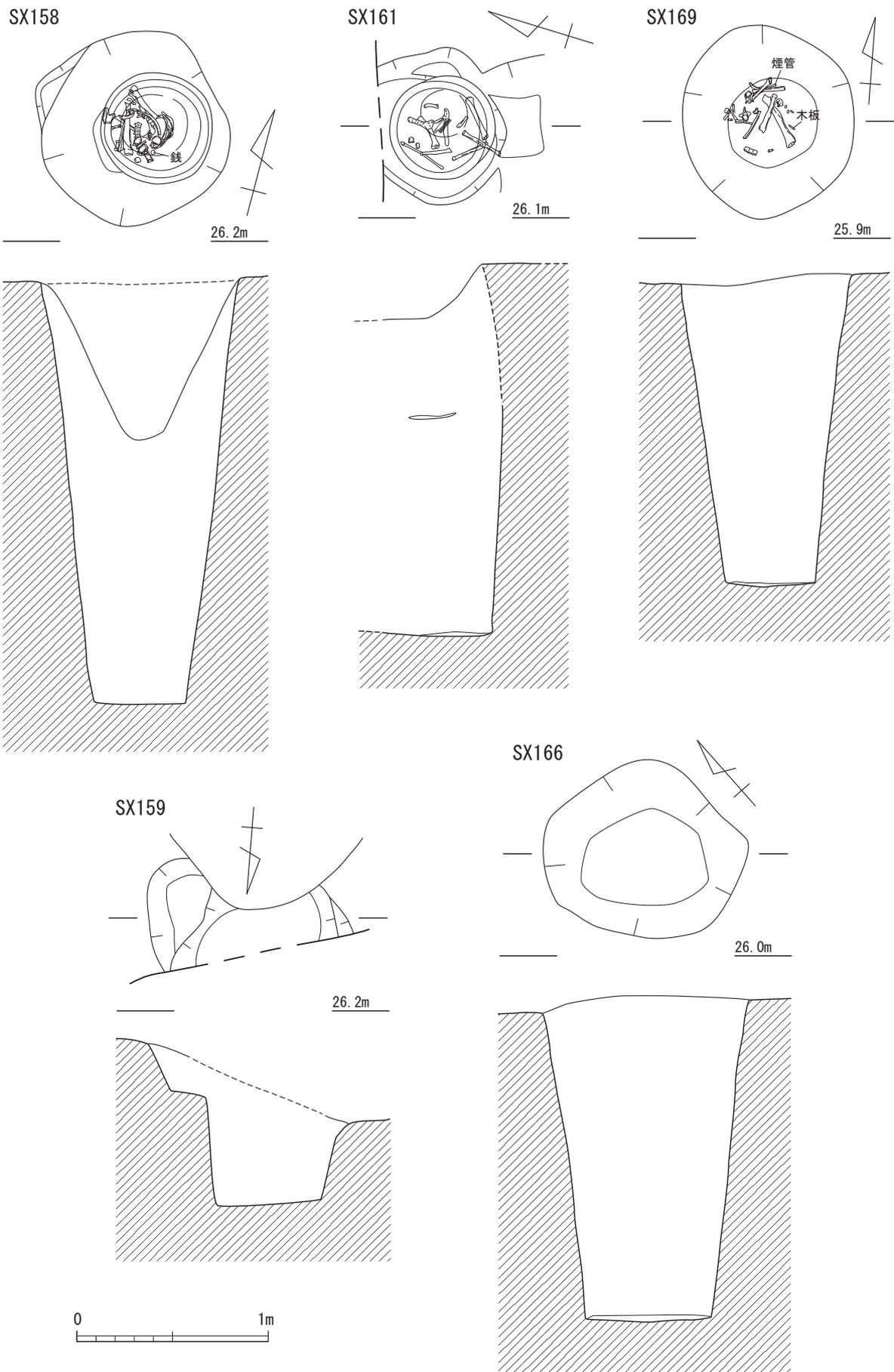
調査区北側に位置し、SX158に切られる。墓坑は直径1m前後の平面円形を呈するものと考えられる。深さは0.85mである。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

SX161（第66・68図、図版57・87）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸0.8m、短軸0.65m以上、平面円形を呈し、深さは1.95mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。櫛・数珠



第77図 SX01・04・87～89・97・107 出土遺物実測図
(160は1/2、他は原寸)



第 68 図 SX158・159・161・166・169 実測図 (1/30)

玉が出土した。

158は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部はやや外反して、中位に3条の沈線が巡る。端部は内側に肥厚し玉縁状になっている。胴部内面と、底部内面に格子目のタタキ痕が残っている。内外面に暗赤褐色の釉を施すが、口縁部と胴部の境は釉を剥ぎとり、内面はハケ塗りされる。

出土遺物（第71図、図版93・97）

木製品（179） 柁目材の櫛。

ガラス製品（180） 白色のガラスと赤褐色で半透明のガラスを組み合わせた瑪瑙のような玉である。数珠玉と思われるが他の数珠玉と比べ極端に大きく確実ではない。白色ガラスの表面部分に細かい亀裂が入る。孔には細い棒状の種類不明の金属が嵌る。

ガラス製品（181～186） 白色で半透明の数珠玉。透明度は高くない。気泡を多量に含む。多面体の玉で孔の部分2か所を除いて40面ある。

SX166（第68・70図、図版57・88）

調査区北西側に位置する。墓坑は長軸1.1m、短軸0.9mの平面不整な円形を呈し、深さは1.7mである。墓坑内に人骨が残るが、改葬を受ける。数珠玉が出土した。

173は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は強く外反し、中位に3条の沈線が巡る。端部は内側に肥厚し玉縁状で、目跡が残る。口縁部と胴部の境は釉を剥ぎとり、内面と底部内面に格子目のタタキ痕が残っている。外面は平行タタキに見えるが一部格子目になっている。全面に褐色の釉を施すが、上から灰黄色の釉を流し掛けしている。内面はハケ塗りで、底部外面は露胎である。

出土遺物（第71図、図版97）

ガラス製品（187・188） 白色の数珠玉の親玉。T字状の孔がある。

SX169（第68・70図、図版57・58・88）

調査区北西側に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸0.9mの平面円形を呈し、深さは1.7mである。墓坑内に人骨が残るが、改葬を受ける。銭・煙管・ボタン等が出土した。

174は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は上方で外反する。中位に3条の沈線を巡らせ、端部は内側に肥厚し玉縁状とする。胴部にタタキの痕は観察されず、内面を工具でヨコナデし、底部内面に格子目のタタキが残る。全面に明褐色の釉を施すが、上から黄褐色の釉を流し掛けしている。内面はハケ塗り。口縁部と胴部境は釉を剥ぎとり、底部外面は露胎である。口縁部に目跡が残る。

出土遺物（第71図、図版93）

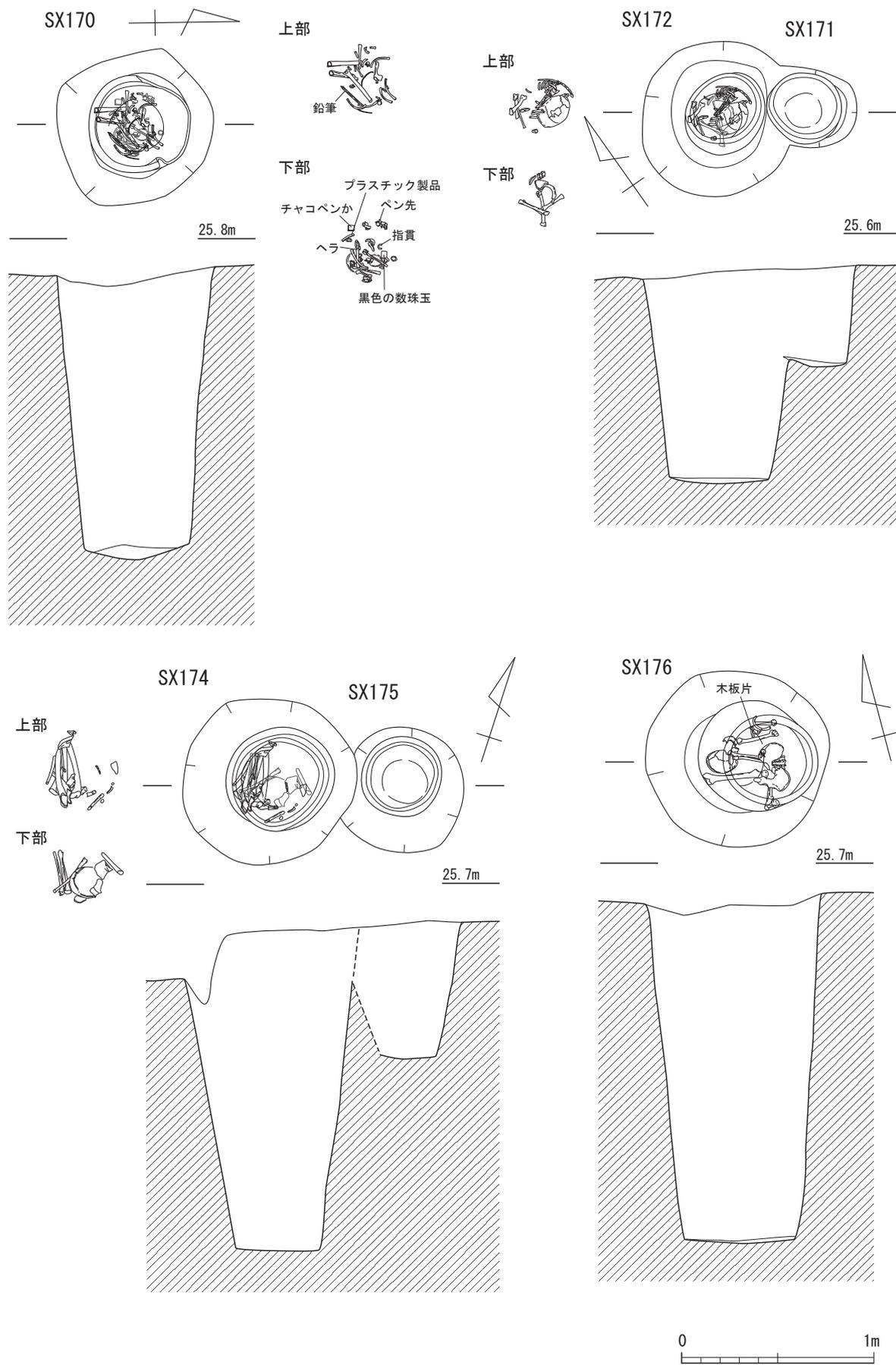
銅製品（189・190） 189は大正九年発行の桐模様の一銭銅貨。190は銅に銀鍍金か錫鍍金をした煙管で、羅字がない延煙管である。中央付近に円形で断面形が平たい台形の金具を嵌める。

SX170（第69図、図版58）

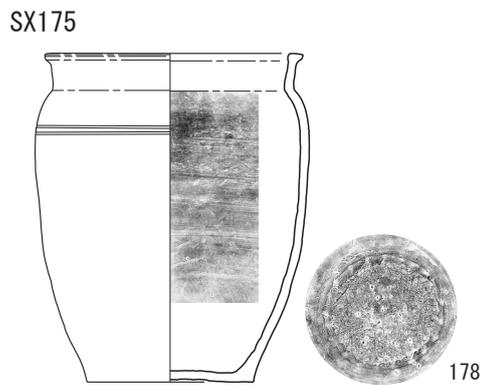
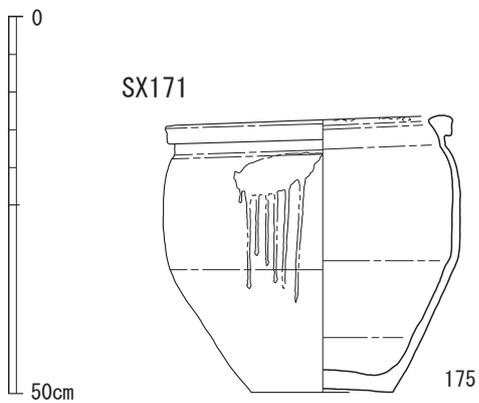
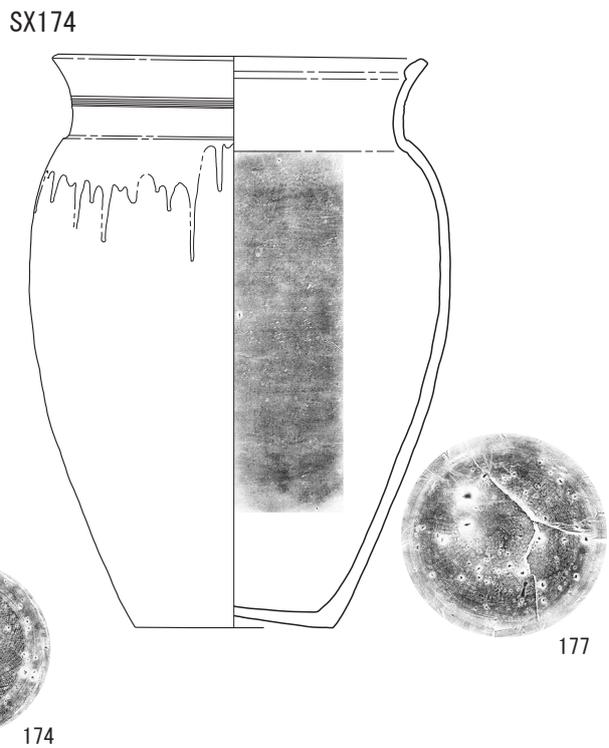
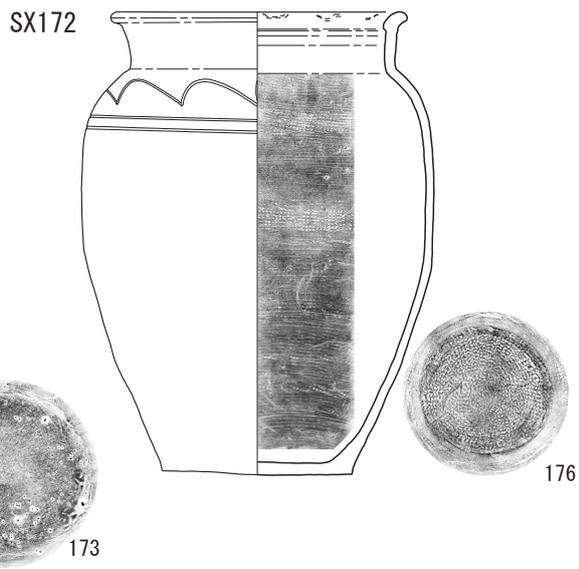
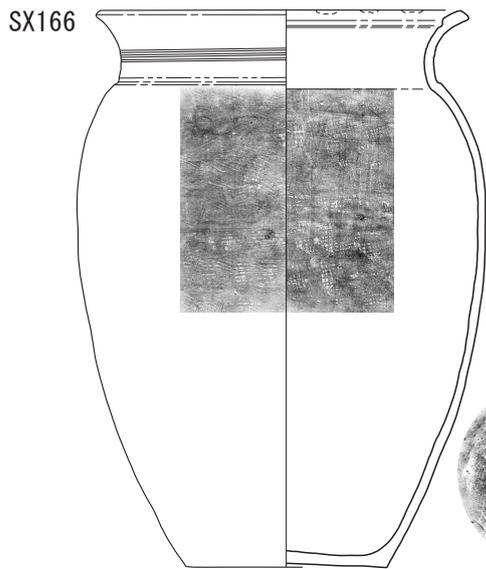
調査区北西部に位置し、SX171と重複する。墓坑は長軸0.8m、短軸0.8mの平面不整円形を呈し、深さは1.5mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。漆器・銭・指貫・へら・銭・プラスチック片が出土した。

出土遺物（第71図、図版94）

アルミ製品（191・192） 191は昭和十七年発行の十銭アルミ貨。拓本では鮮明に出ないが実測図左



第 69 図 SX170・171・172・174・175・176 実測図 (1/30)



第70図 SX166・169・171・172・174・175 甕棺実測図 (1/10)

側の模様は菊花である。192 は昭和十六年発行の一銭アルミ貨。実測図左側の模様は富士山の上に菊花である。

ガラス製品 (193 ~ 198) 赤橙色の数珠玉が 3 点と黒色の数珠玉が 52 点出土し、黒色の数珠玉は 3 点図化した。193 ~ 195 は赤橙色の数珠玉で白玉状である。196 ~ 198 は黒色の数珠玉。

革製品 (199) 指貫である。幅 1 cm の革に、縦横そろえて配列した点状の凹みを型押し、革の両端を紐綴りする。

骨製品 (200) 裁縫に使用するへら。材質は動物の骨と思われる。赤・緑・白の塗装が一部に残存する。

木製品 (201) 鉛筆である。断面六角形で 14cm ほど残存。外面は濃緑色の彩色が残り、端部に「NO」・「1988」の刻印が確認できる。

SX171 (第 69・70 図)

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸 0.4m の平面円形を呈し、深さは 0.5m で、墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

175 は小形の甕。口縁部は短く立ち上がり、端部を外側にコの字形に作る。端部の釉は剥ぎとり、目跡が残る。内外面に光沢のある明褐色の釉を施し、一部肩部から黒色の釉を流し掛けしている。見込みに重ね焼きの痕があり、底部外面は露胎である。

SX172 (第 69・70 図、図版 58・88)

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸 0.8m、短軸 0.8m の平面円形を呈し、深さは 1.1m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。木製品・布・むしろが出土した。

176 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は立ち上がり端部を玉縁状にする。端部の釉は剥ぎとり、わずかに目跡が残っている。肩部に波状沈線、その下に 2 条の沈線が巡る。胴部・底部内面に格子目のタタキ痕が残るが、内外面とも工具を使ったヨコナデ調整を行い、褐色の釉を全面に施す。底部外面は露胎で、目跡が残る。

SX174 (第 69・70 図、図版 58・89)

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.9m の平面円形を呈し、深さは 1.7m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭が出土した。

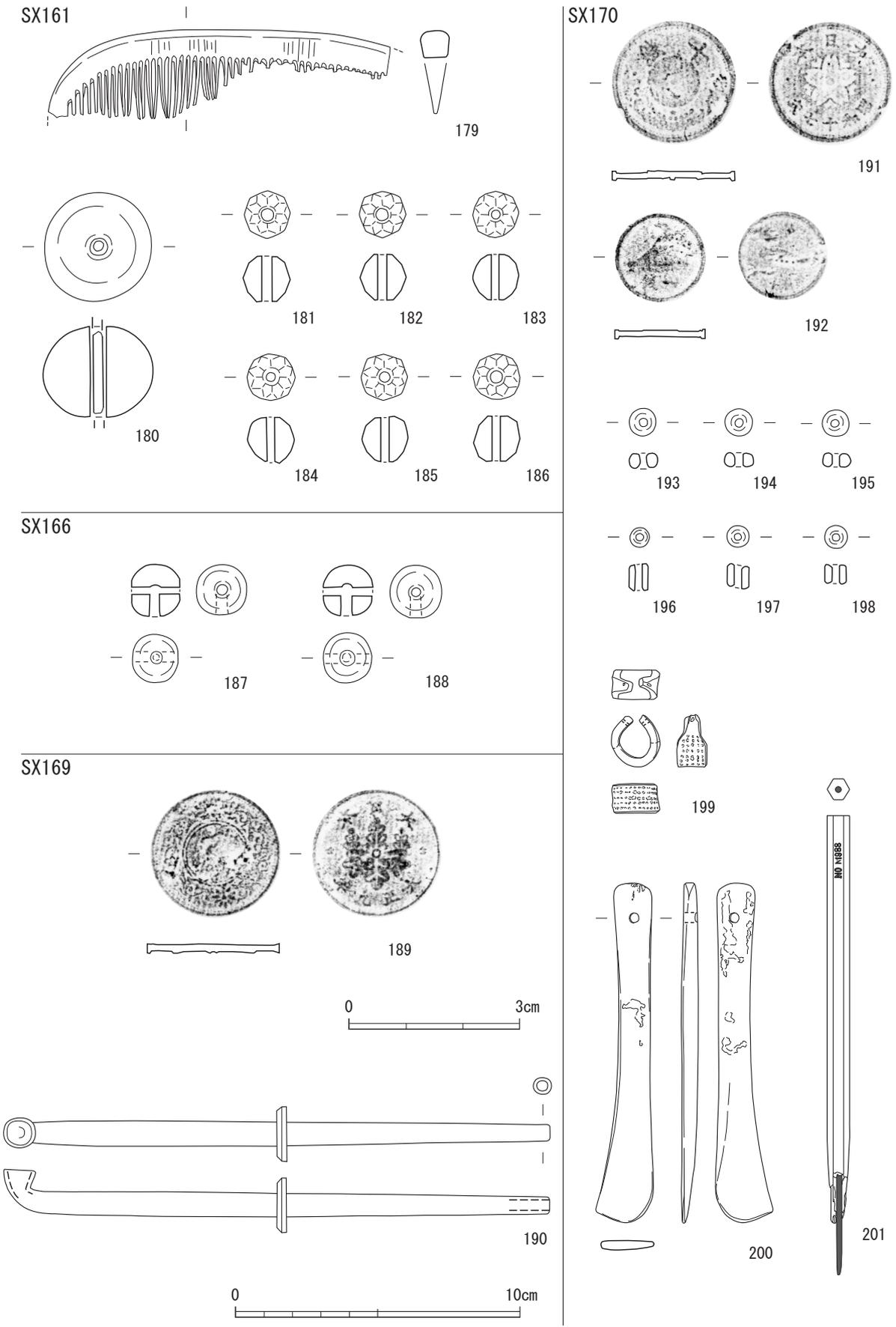
177 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し端部を玉縁状に作る。中位に 3 条の沈線を巡らせ、胴部との境は釉を剥ぎとっている。胴部内面と底部内面に格子目のタタキが残り、外面は工具を使ってヨコナデ調整される。暗赤褐色の釉を全面に施し、さらに肩部は灰黄色の釉を流し掛けしている。口縁部に目跡がある。

出土遺物 (第 74 図、図版 99)

銅製品 (208・209) 208 は銭文不明だが、直径から判断すると桐模様の一銭青銅貨か鳥模様の黄銅貨と考えられる。209 は銭文不明の銅貨。

SX175 (第 69・70 図、図版 89)

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸 0.6m、短軸 0.6m の平面円形を呈し、深さは 0.7m である。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。



第71図 SX161・166・169・170 出土遺物実測図
(179・190・199～201は1/2、他は原寸)

178 は小形の甕。口縁部は立ち上がり、端部は逆L字状に近い。調整は大甕とほぼ同じで、胴部上位に2条の沈線を巡らせ、胴部内面と底部内面に格子目のタタキが残る。底部外面を除いて、光沢の無い暗褐色の釉を施す。

SX176 (第 69 図、図版 58)

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 0.9m の平面円形を呈し、深さは 1.8m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭・布・板片が出土した。

出土遺物 (第 74 図、図版 99)

銅製品 (210) 桐模様の一銭青銅貨である。元号の部分が錆のために判読できないが大正九年か昭和九年発行のものである。

SX178 (第 72・73 図、図版 59・89)

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.9m の平面円形を呈し、深さは 1.7m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。木片・銭・足袋金具が出土した。

202 は肥前産陶器の大甕 (ハンズーガメ)。口縁部は立ち気味で、端部を玉縁状に作る。中位に2条の沈線を巡らせ、胴部との境は釉を剥ぎとっている。肩部に直径 1.5cm 弱、厚さ 0.2cm ほどのボタン状の浮文を貼り付ける。胴部内面と底部内面に格子目のタタキを行って、外面は平行タタキと思われ、内外面とも工具でヨコナデ調整を行っている。全面に暗褐色の釉を施し、さらに口縁から胴部上位は灰黄色の釉を流し掛けしている。口縁端部には目跡が残る。

出土遺物 (第 74 図、図版 99)

銅製品 (211・212) 211 は錆のために銭文は不明瞭であるが、銅銭の寛永通宝である。212 は左側で「1/2 SEN」の文字が判読できると、直径から判断して半銭青銅貨である。

SX179 (第 72・73 図、図版 59・89)

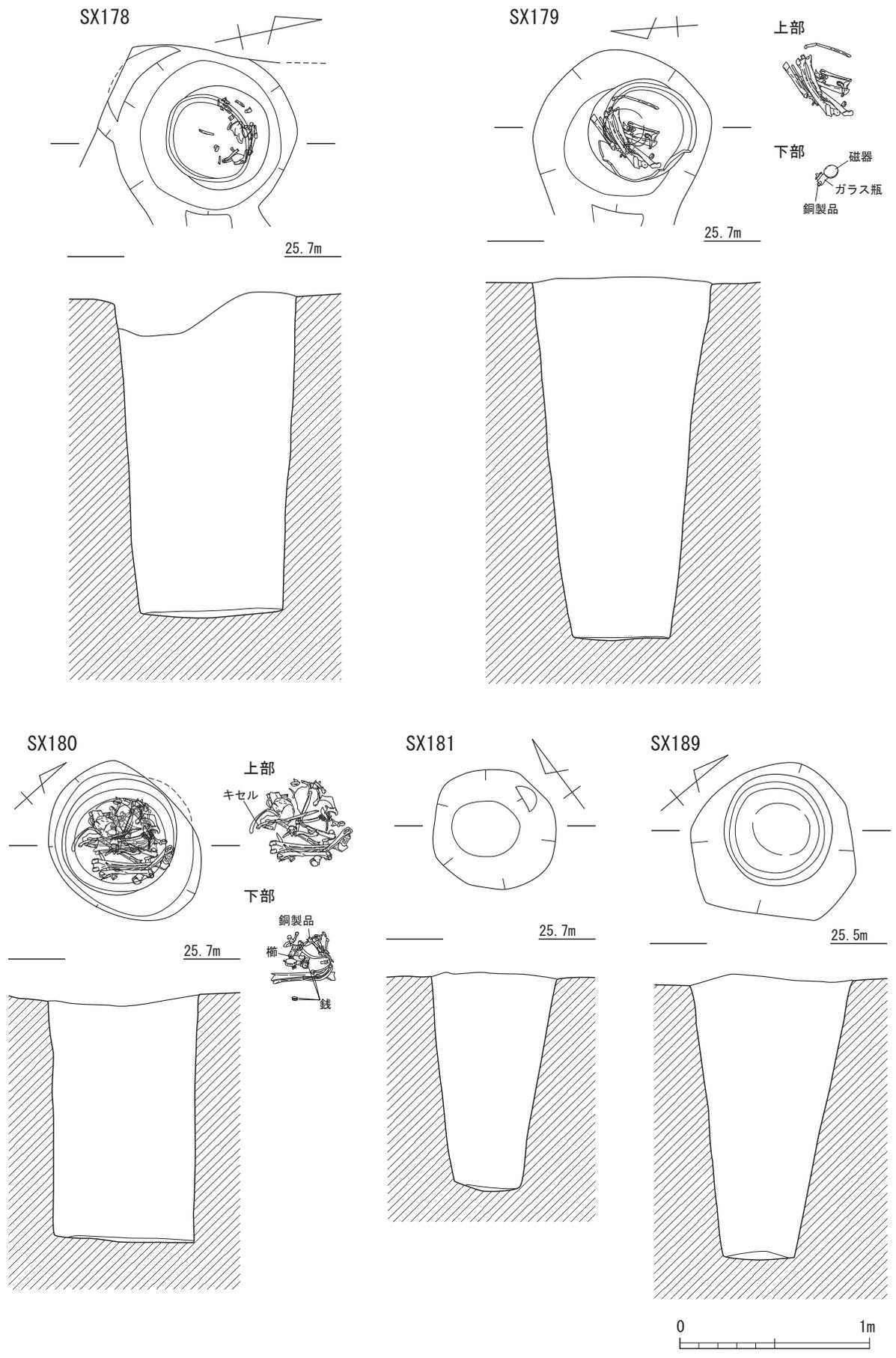
調査区北西部に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.9m の平面円形を呈し、深さは 1.9m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。磁器碗・猪口・ガラス瓶・銅製品が出土した。

203 は肥前産陶器の大甕 (ハンズーガメ)。口縁部はやや外反し、端部を玉縁状に作る。中位に3条の沈線を巡らせ、胴部との境は釉を剥ぎとっている。タタキの痕は、わずかだが胴部内面と底部に格子目の痕が観察される。全面に暗赤褐色の釉を施して、内面はハケ塗りである。口縁端部には目跡が残る。

出土遺物 (第 74 図、図版 94)

陶磁器 (213・214) 213 は染付磁器の紅皿。外面に蛸唐草風の模様と「京都」・「紅清」・「都紅」の文字を印刷絵付する。全面に施釉した後、高台豊付の釉を剥ぎとる。214 は小碗。外面に緑色と褐色の絵の具を使った風景の印刷絵付をした後、全面に透明釉を施釉し、高台豊付の釉を剥ぎとる。外面高台内には「柏山精製」の緑色の文字。

ガラス製品 (215) 蓋付瓶で化粧品の瓶と思われる。内面の器壁には白色の内容物が付着する。蓋は身に固く嵌り、取り外せない。



第72図 SX178～181・189実測図(1/30)

銅製品 (216) 指貫と思われる。端と端を重ねた円環で、重ねた部分と反対側の使用部分の方が幅広である。

SX180 (第 72・73 図、図版 59・90)

調査区中央西側に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.8m の平面楕円形を呈し、深さは 1.25m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭・銅製品・櫛・煙管が出土した。

204 は肥前産陶器の大甕 (ハンズーガメ)。口縁部は外反し、端部は内側に肥厚して玉縁状となる。中位に 2 条の沈線を巡らせ、胴部との境は釉を剥ぎとっている。胴部外面と底部内面には格子目のタタキ痕が残るが、上から工具を使ったヨコナデ調整を行っている。全面に施釉され暗褐色を呈す。内面はハケ塗りしている。口縁端部に目跡が残る。

出土遺物 (第 74 図、図版 99)

銅製品 (217～222) 217～220 は銭で、217～219 の銭文は不明である。217・219 は、直径から判断すると桐模様の一銭青銅貨か鳥模様の一銭黄銅貨である。218 は直径から判断すると小型の五銭白銅貨か五銭アルミ青銅貨と考えられる。219 は木質が付着する。220 は二銭銅貨。221 は煙管の雁首で、羅字が一部残存する。劣化はするが布でくるまれていた状態である。222 は鳥形の金具で銅に銀鍍金か錫鍍金をしている。輪郭を少し突出させ、裏側には L 字状の突起がある。突起があることから何かに嵌めて使用したものだろう。

SX181 (第 72・73 図、図版 59・90)

調査区中央西側に位置する。墓坑は長軸 0.65m、短軸 0.65m の平面円形を呈し、深さは 1.15m である。銭が出土した。

205 は肥前産陶器の中甕 (ハンズーガメ)。口縁部はやや外反し、端部を玉縁状に作る。中位に 1 条の沈線を巡らせ、胴部との境の釉は剥ぎとる。胴部の張りは小さく寸胴形である。沈線は胴部の上位に 3 条、中位に 2 条巡る。底部内面は格子目のタタキが残っているが、胴部には観察されず、工具を使ったヨコナデ調整を行っている。内外面に赤褐色の釉を施し、上から灰黄色の釉を流し掛けする。口縁部には目跡が残る。

出土遺物 (第 74 図、図版 99)

銅製品 (223) 銭文不明だが、直径から判断すると竜模様の一銭銅貨である。

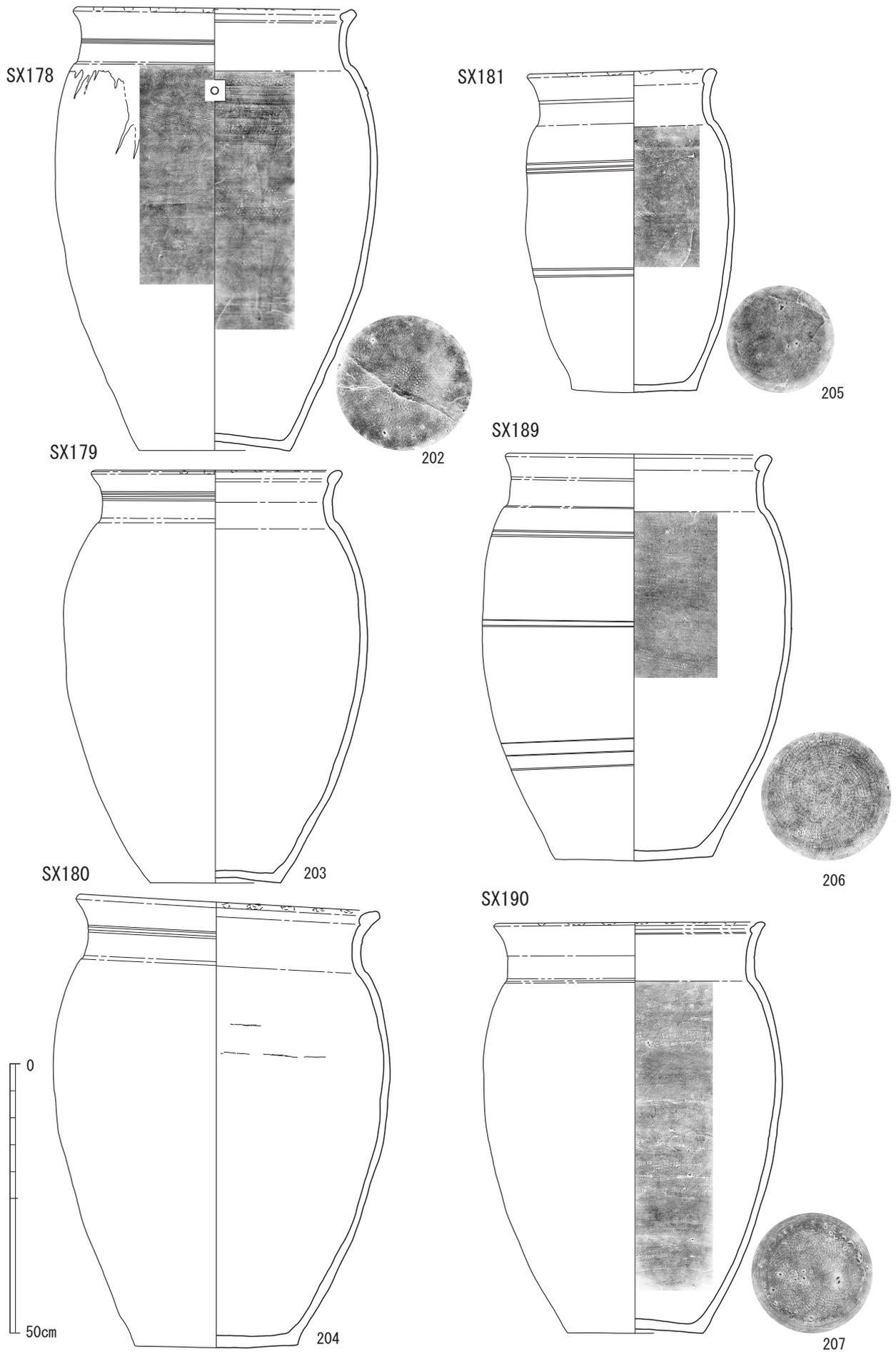
SX189 (第 72・73 図、図版 59・90)

調査区南西部に位置する。墓坑は長軸 0.85m、短軸 0.85m の平面円形を呈し、深さは 1.5m である。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

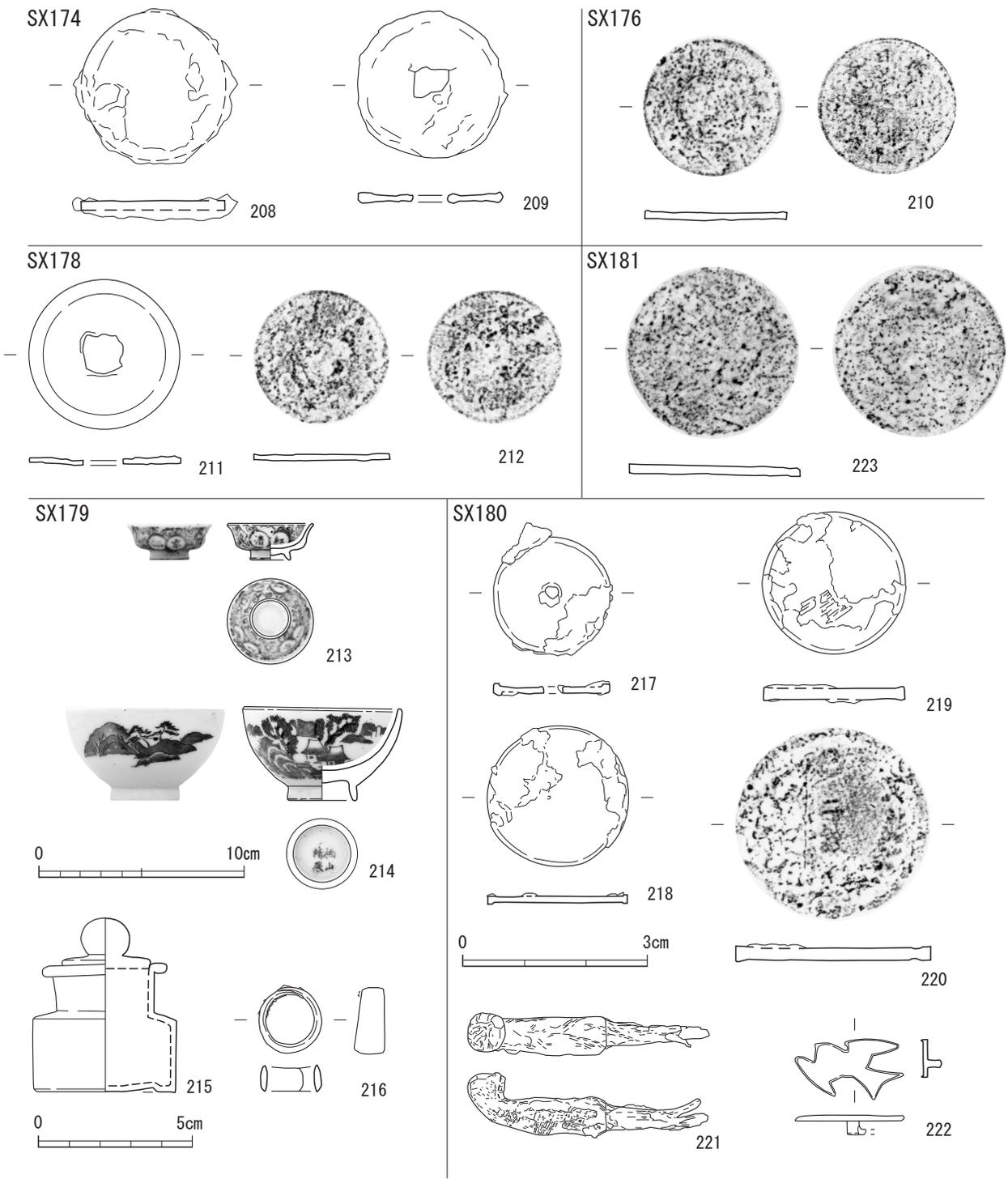
206 は肥前産陶器の大甕 (ハンズーガメ)。口縁部は立ち気味で、端部を玉縁状に作り、中位に浅い段がつく。胴部上位に 2 条、中位に 2 条、下位に 3 条の沈線を巡らす。胴部内面に格子目のタタキ痕がわずかに残り、底部内面も格子目で螺旋状に叩いている。底部外面を除いて暗褐色の釉を施し、上から灰黄色の釉を流し掛けする。口縁端部は釉が剥ぎとられ、わずかに目跡が残っている。

SX190 (第 75・73 図、図版 59・90)

調査区南西部に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.9m の平面円形を呈し、深さは 1.95m である。



第73図 SX178～181・189・190 甕棺実測図 (1/10)

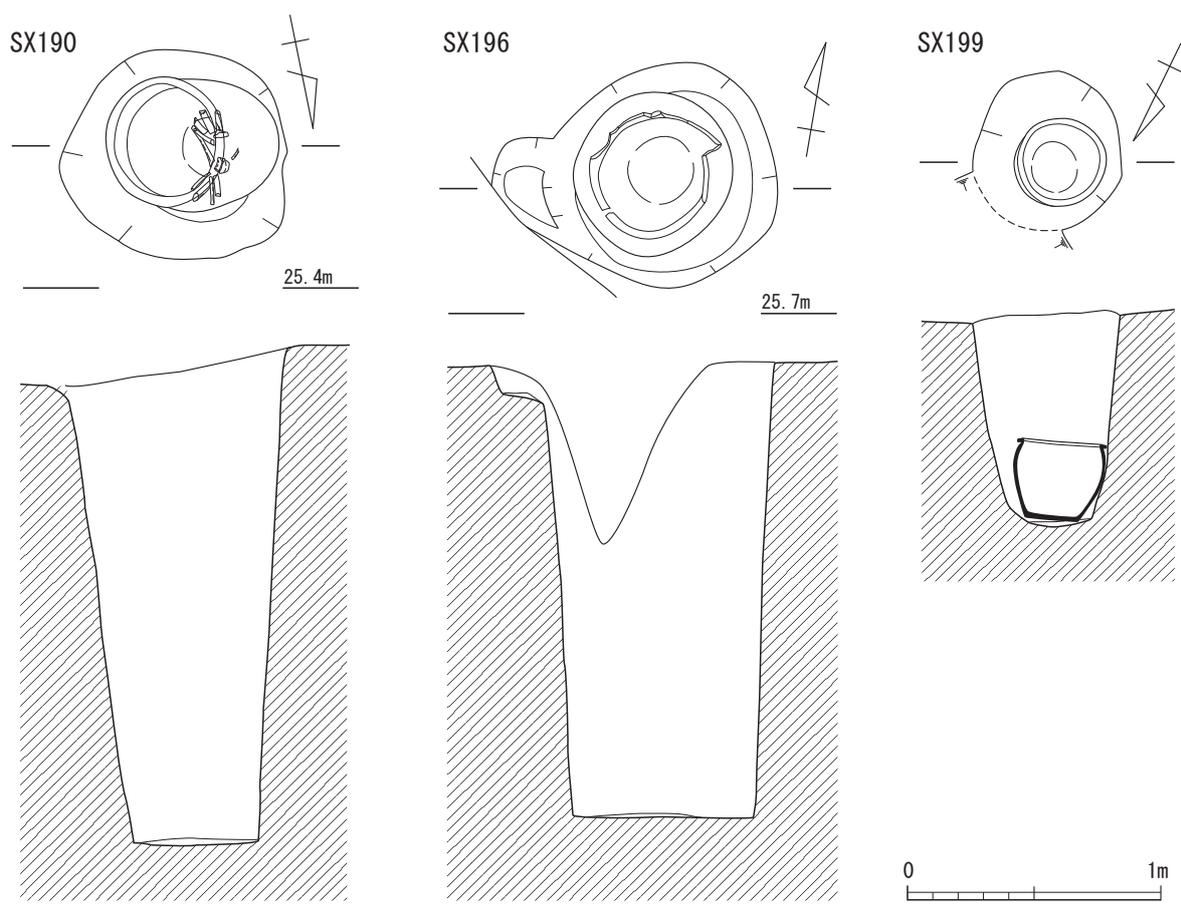


第74図 SX174・176・178～181 出土遺物実測図
(213・214は1/3、215・216・221・222は1/2、他は原寸)

墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。青磁片が出土した。

207は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、端部は小さい玉縁状となる。中位には段がつき、胴部との境の釉を剥ぎとる。胴部内面、底部内面に格子目叩きを行っている。全面に明褐色の釉を施しているが、内面は粗くハケ塗りされている。口縁端部に目跡が残る。

SX196（第75・76図、図版60・91）



第 75 図 SX190・196・199 実測図 (1/30)

調査区中央西側に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.85m の平面円形を呈し、深さは 1.8m である。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

224 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、端部は玉縁状となる。中位に 2 条の沈線を巡らせ、胴部との境の釉を剥ぎとっている。口縁部には目跡が残る。胴部内面にはわずかに格子目と思われるタタキ痕が残り、外面は工具を使ってヨコナデ調整を行っている。底部外面を除き明褐色の釉を施す。

SX199 (第 75・76 図、図版 60・91)

調査区南西部に位置する。墓坑は長軸 0.6m、短軸 0.6m の平面円形を呈し、深さは 0.85m である。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

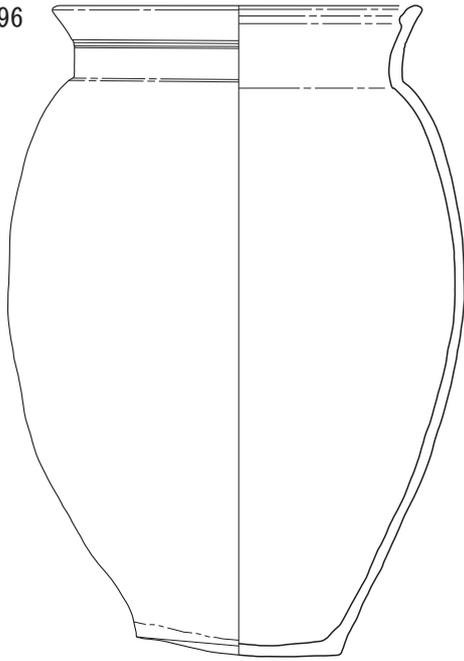
225 は小形の甕。口縁端部は外側にコの字形に作る。底部外面を除いて全面に暗赤褐色の光沢のある釉を施している。底部外面に緩くカーブした平行線の圧痕がある。

帰属不明甕棺 (第 76・77 図、図版 91～93)

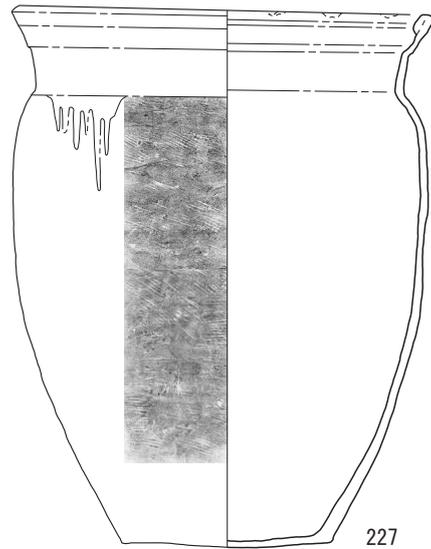
ここでは、収蔵の過程で遺構番号が不明となった近世甕棺について報告する。

226 は肥前産の中甕（ハンズーガメ）。口縁部は立ち気味で端部は玉縁状にする。胴部は内外面を格子目叩きし、工具を使ってヨコナデ調整している。外面には螺旋状に沈線が巡っている。暗褐色の釉を施すが、口縁部と底部外面は露胎で、それぞれに目跡が残る。227 は肥前産陶器の大甕

SX196

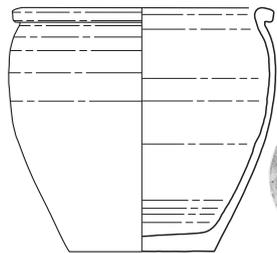


224

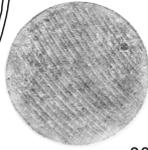


227

SX199



外底

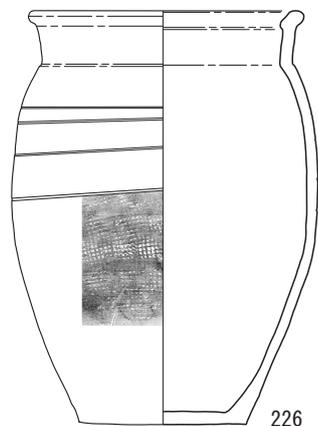
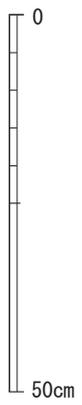


225

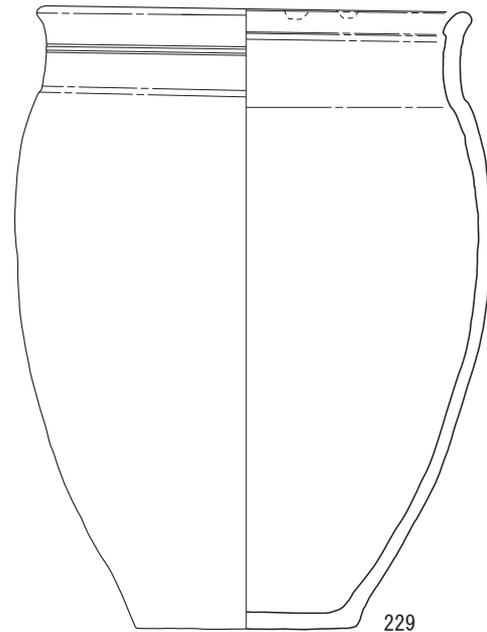


228

帰属不明



226



229

第76図 SX196・199・帰属不明甕棺実測図(1/10)

(ハンズーガメ)。口縁部は外反させ中位に段がつく。端部は内側に折り曲げて玉縁状にする。胴部外面の叩きは平行タタキに見えるが一部は格子目である。全面施釉され、上から灰黄色の釉を流し掛けする。底部内面には鉄銭と思われる痕が残っている。228 は小形の甕。口縁部は短く立ち上がり、端部を内側に折り曲げ内外に肥厚させて上面は水平である。寸胴形で、肩部に3条の沈線を巡らせ、その上の対称位置に4個の円を花文のように押圧している。内外面に黄褐色の釉を施し、さらに肩部に白釉を流し掛けする。底部外面は露胎である。229 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部は立ち上がり、端部は内側を肥厚させた玉縁状である。中位に2条の沈線が巡る。胴部に張りはほとんど無い。胴部にタタキ痕は観察されず、内外面ともヨコナデ調整を行っているが、底部内面には、わずかに格子目が残っている。底部外面を除いて全面に赤褐色の釉を施し、口縁と胴部の境の釉は剥ぎとる。口縁部と底部外面に目跡が付く。230 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部は外反し、端部は玉縁状で外側にも肥厚させる。胴部はほとんど膨らまず、胴部上位、中位にそれぞれ3条の沈線が巡る。上位沈線の下に工具の当たりのような傷が残り、中位の沈線の上に刷毛状の工具で横方向に引っ掻いた線刻が25cmほど残る。胴部には内外面ともタタキ痕は残らず、底部内面にわずかに格子目が観察される。暗褐色の釉を施すが、底部外面は露胎である。口縁部と底部外面に目跡が付いている。231 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部は立ち上がり、端部は内側に肥厚させた玉縁状で、外側は上位に段がつく。胴部内面と底部に格子目のタタキ痕があるが、外面はカキ目調整されている。胴部上位に2条、中位に2条、下位に3条の沈線が巡る。暗褐色の釉の上に黄褐色の釉を流し掛けし、底部外面は露胎、内面は刷毛塗りである。口縁部に目跡が付く。232 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部はやや外反し、端部を玉縁状にする。中位には3条の沈線が巡っている。胴部には内外面ともタタキ痕は残っていないが、底部内面に格子目タタキがわずかに観察される。底部外面を除いて、全面施釉されるが、口縁と胴部の境は釉を剥ぎとり、内面は刷毛塗りである。口縁部に目跡が残っている。233 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部はやや外反し、端部を玉縁状にする。中位には段が付いている。胴部外面にはタタキ痕は残らないが内面下位に、平行タタキの痕が見える。また底部内面には格子目のタタキが明瞭に残っている。胴部上位に2条、下位に3条沈線が巡る。明褐色の釉が内外面に施され上から黄灰色の釉を重ね掛けする。口縁部と胴部の境の釉は掻きとって、底部外面も露胎である。口縁部は釉を剥ぎとり目跡がつく。

②桶棺墓・縦棺墓

SX02 (第78図、図版60)

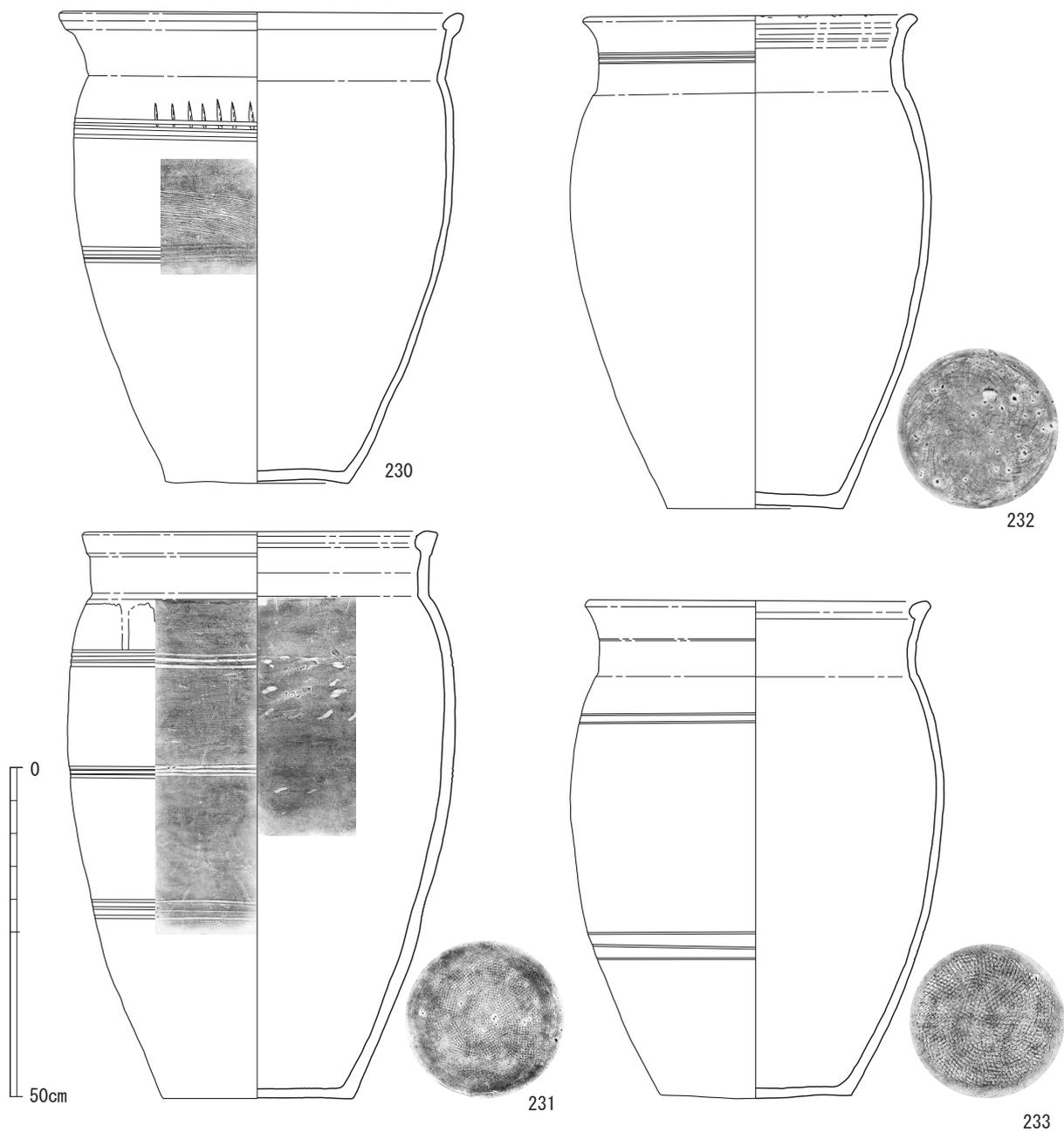
調査区南側に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸0.9mの平面楕円形を呈し、深さは0.7mである。墓坑内から銭・陶器片・釘が出土した。

出土遺物 (第83図、図版94・99)

銅製品 (234～236) 234・235 は銅銭の寛永通宝である。236 は4枚が銹のため重なって固着する銅銭で、うち1枚は寛永通宝である。

鉄製品 (237～242) いずれも丸釘で、棺材が残存する。

SX06 (第78図、図版60)



第 77 図 帰属不明甕棺実測図 (1/10)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 0.9m の平面円形を呈し、深さは 1.75m である。墓坑内から釘が出土した。

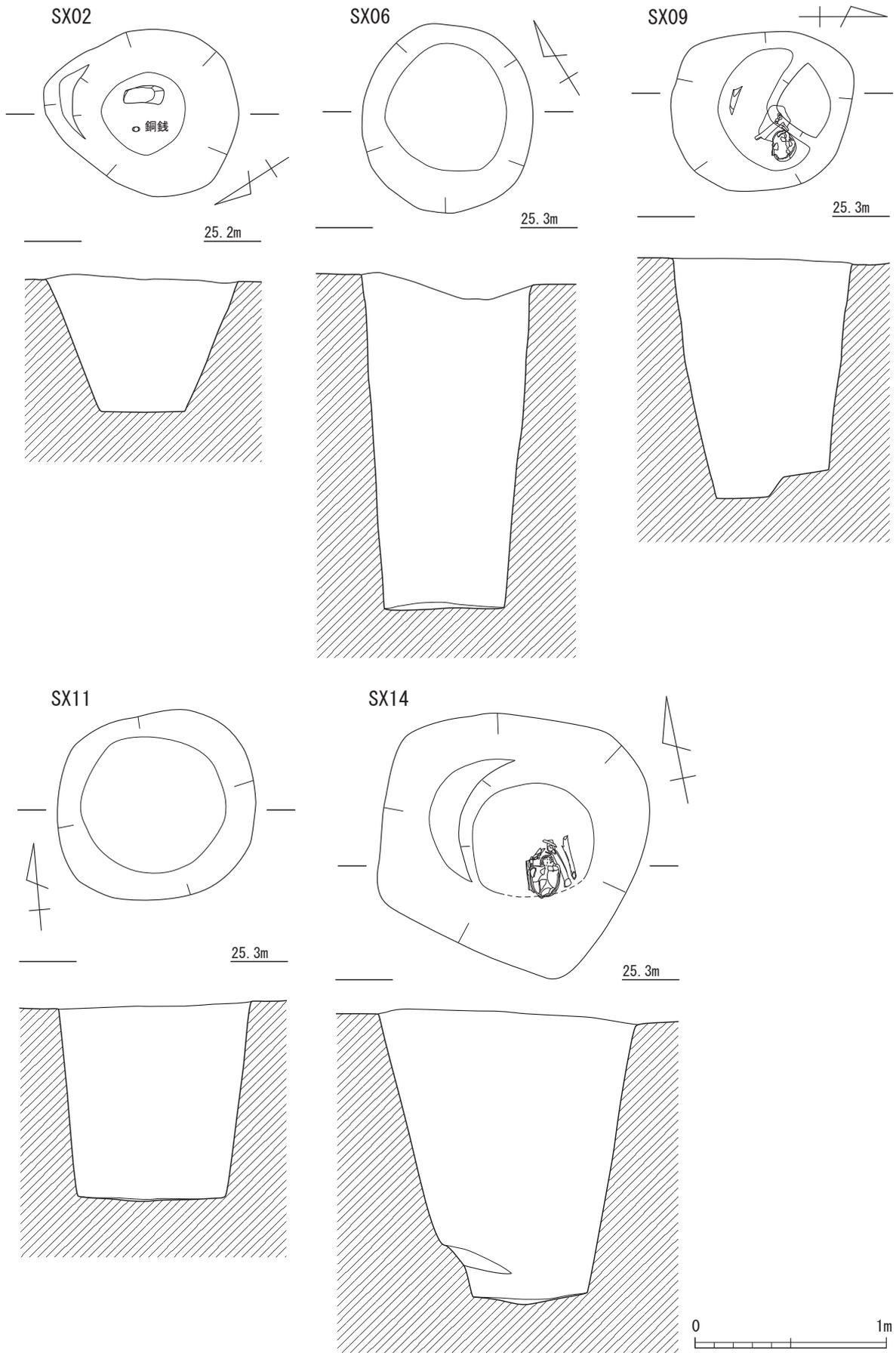
出土遺物 (第 83 図、図版 83・94)

鉄製品 (243) 角釘で、棺材が残存する。先端は折れ曲がり、頭部は欠損する。

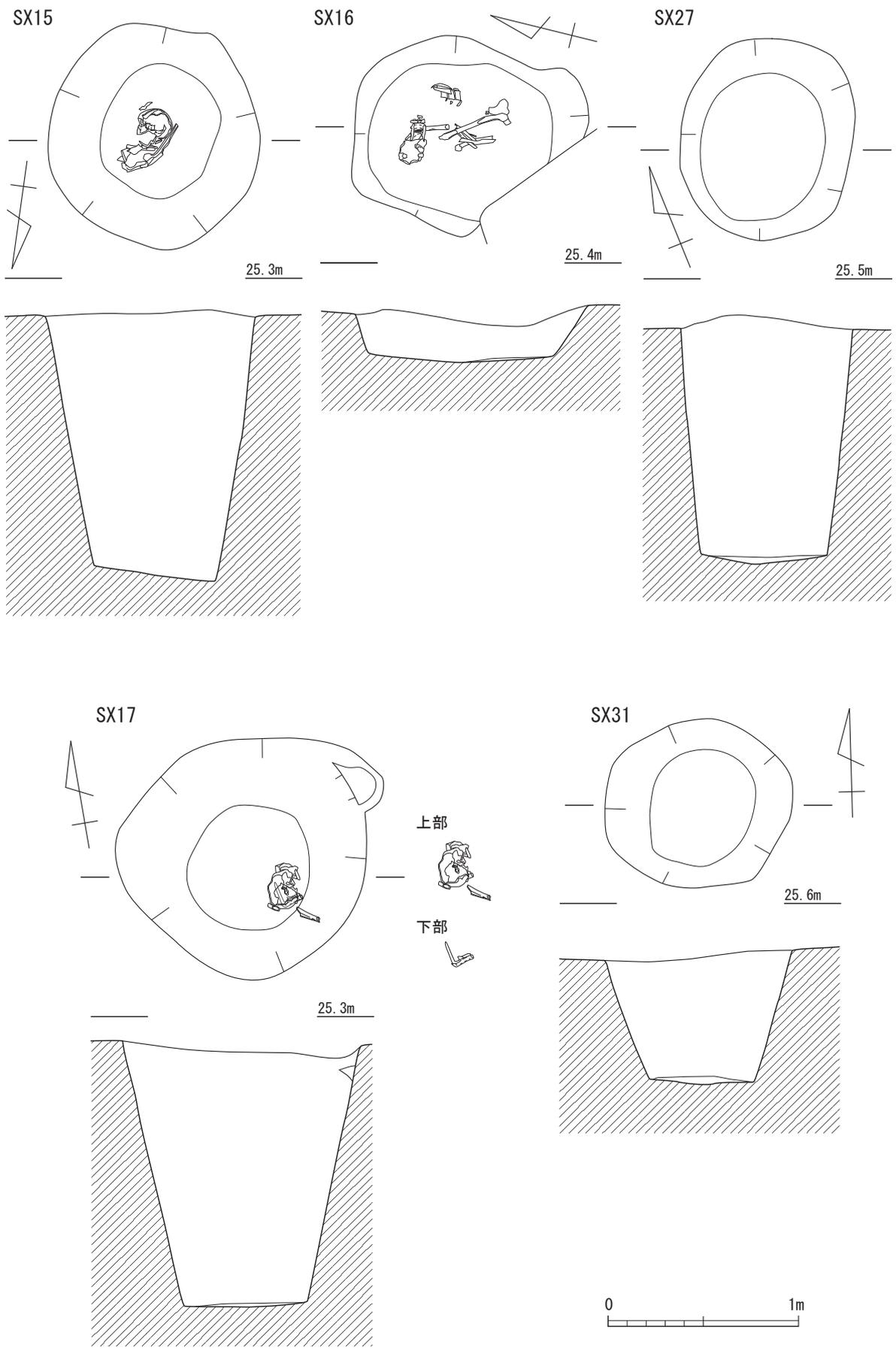
石製品 (244) 黒曜石製の石鏃で、先端を欠失する。

SX09 (第 78 図、図版 60)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 0.95m、短軸 0.85m の平面楕円形を呈し、深さは 1.25m である。人骨が残る。副葬品はない。



第 78 図 SX02・06・09・11・14 実測図 (1/30)



第 79 図 SX15 ~ 17・27・31 実測図 (1/30)

SX11 (第78図)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.05m、短軸 0.95m の平面楕円形を呈し、深さは 1.0m である。副葬品はない。

SX14 (第78図、図版60)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.4m、短軸 1.4m の平面不整な円形を呈し、深さは 1.55m である。墓坑内に人骨が残り、銭・木質・土器片が出土した。

出土遺物 (第83図、図版99)

銅製品・鉄製品 (245) 6枚が錆のため重なって固着する銅銭と鉄銭である。実測図の上から4枚が銅銭で、下2枚が鉄銭である。銭文は不明。

SX15 (第79図、図版60)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.15m、短軸 1.1m の平面円形を呈し、深さは 1.4m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX16 (第79図)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.2m、短軸 0.65m の平面隅丸長方形を呈し、深さは 0.25m である。墓坑内に人骨が残り、磁器片が出土した。

SX17 (第79図、図版61)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.3m、短軸 1.3m の平面円形を呈し、深さは 1.4m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX27 (第79図)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 0.9m の平面楕円形を呈し、深さは 1.3m である。墓坑内から土師器片が出土した。

SX31 (第79図)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 0.9m の平面楕円形を呈し、深さは 0.7m である。墓坑内から土器片が出土した。

SX38 (第80図)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 1.1m の平面円形を呈し、深さは不明である。墓坑内に人骨が残り、銭が出土した。

SX39 (第80図)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.3m、短軸 1.3m の平面不整な円形を呈し、深さは 1.75m である。墓坑内から土器片・棺材や銭が出土した。

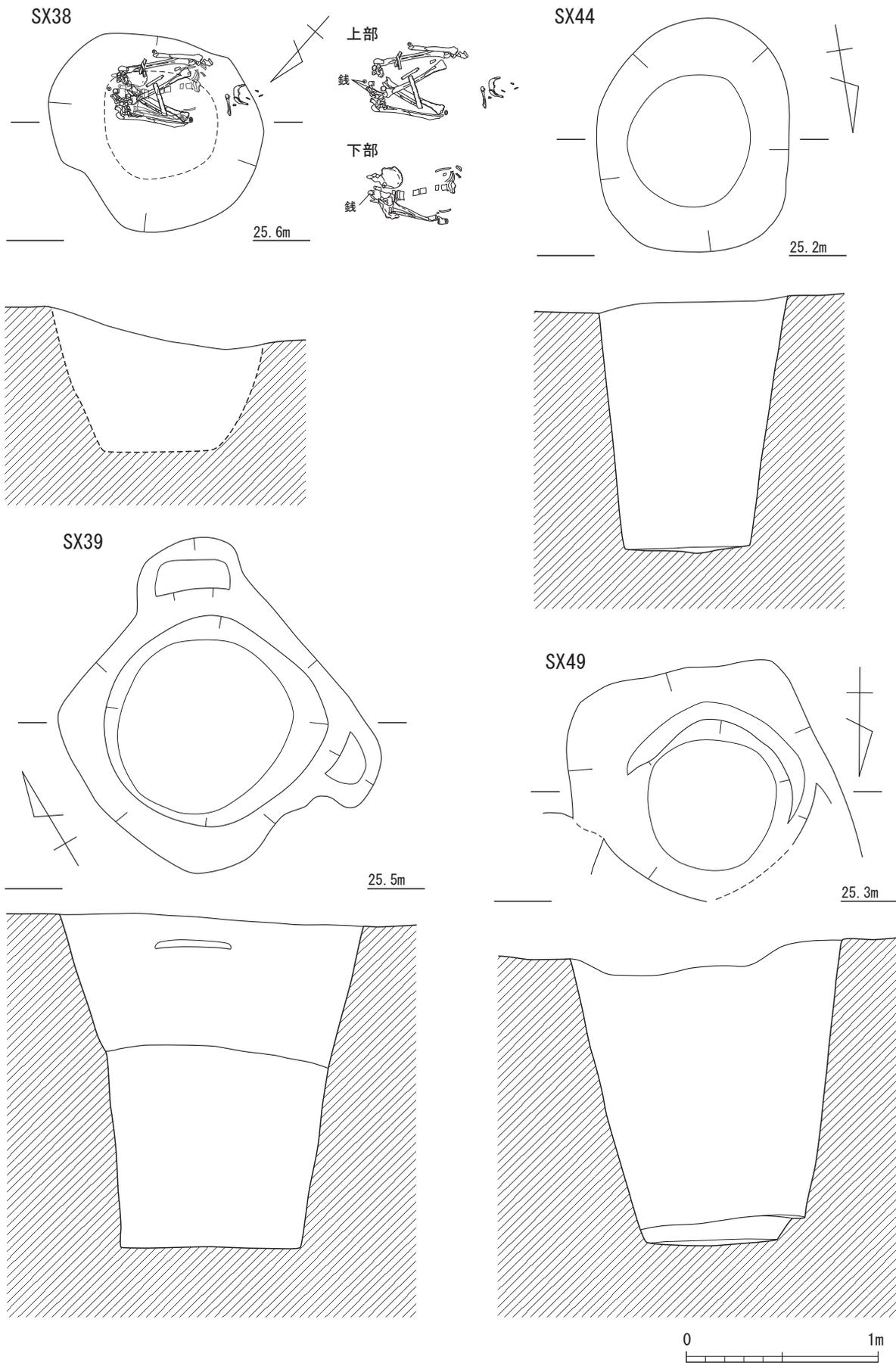
出土遺物 (第83図、図版99)

銅製品 (246～248) 246～248は銅銭の寛永通宝である。

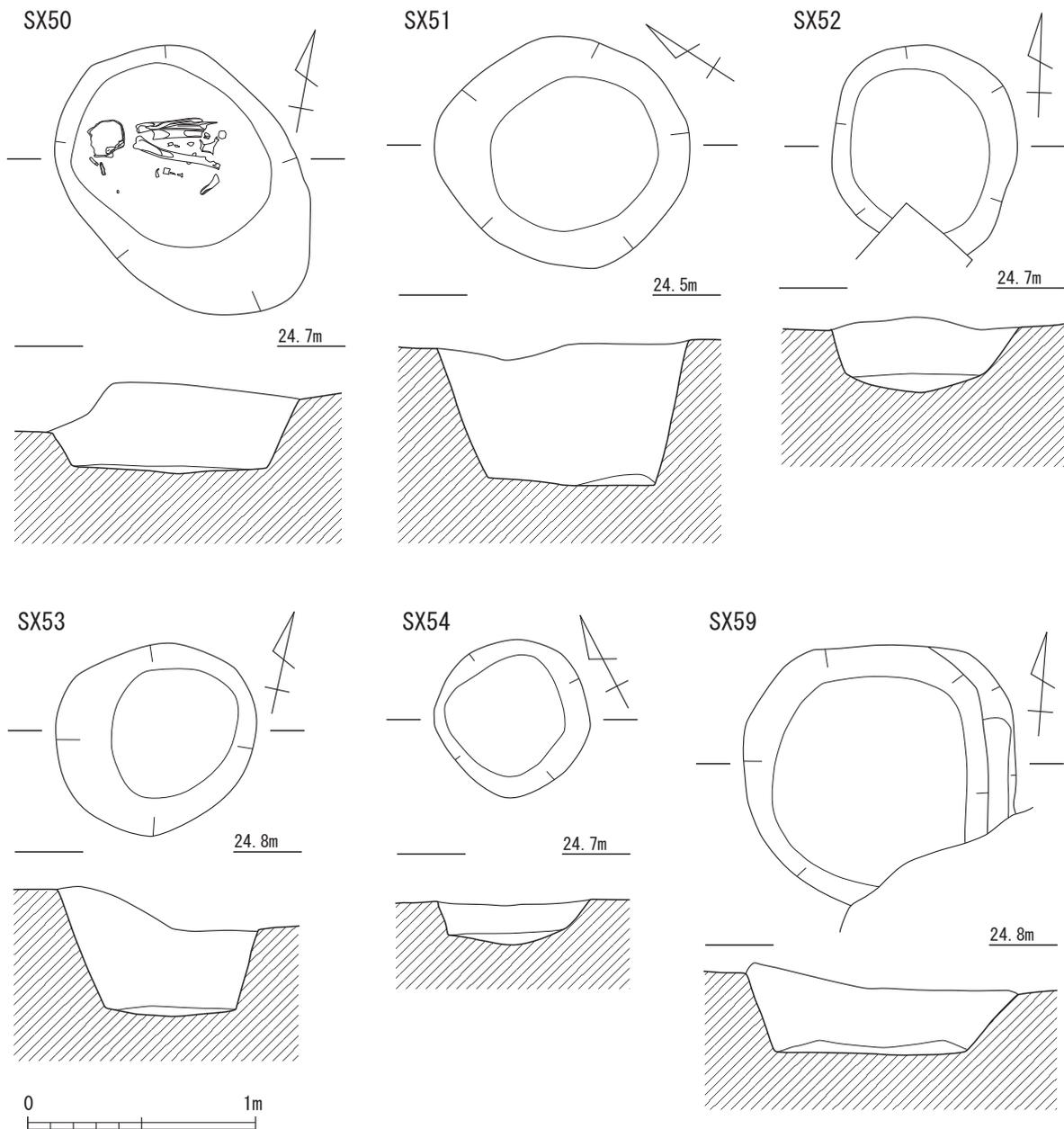
SX44 (第80図)

調査区南東部に位置する。墓坑は長軸 1.2m、短軸 1.0m の平面楕円形を呈し、深さは 1.3m である。副葬品はない。

SX49 (第80図)



第80図 SX38・39・44・49実測図(1/30)



第 81 図 SX50 ～ 54・59 実測図 (1/30)

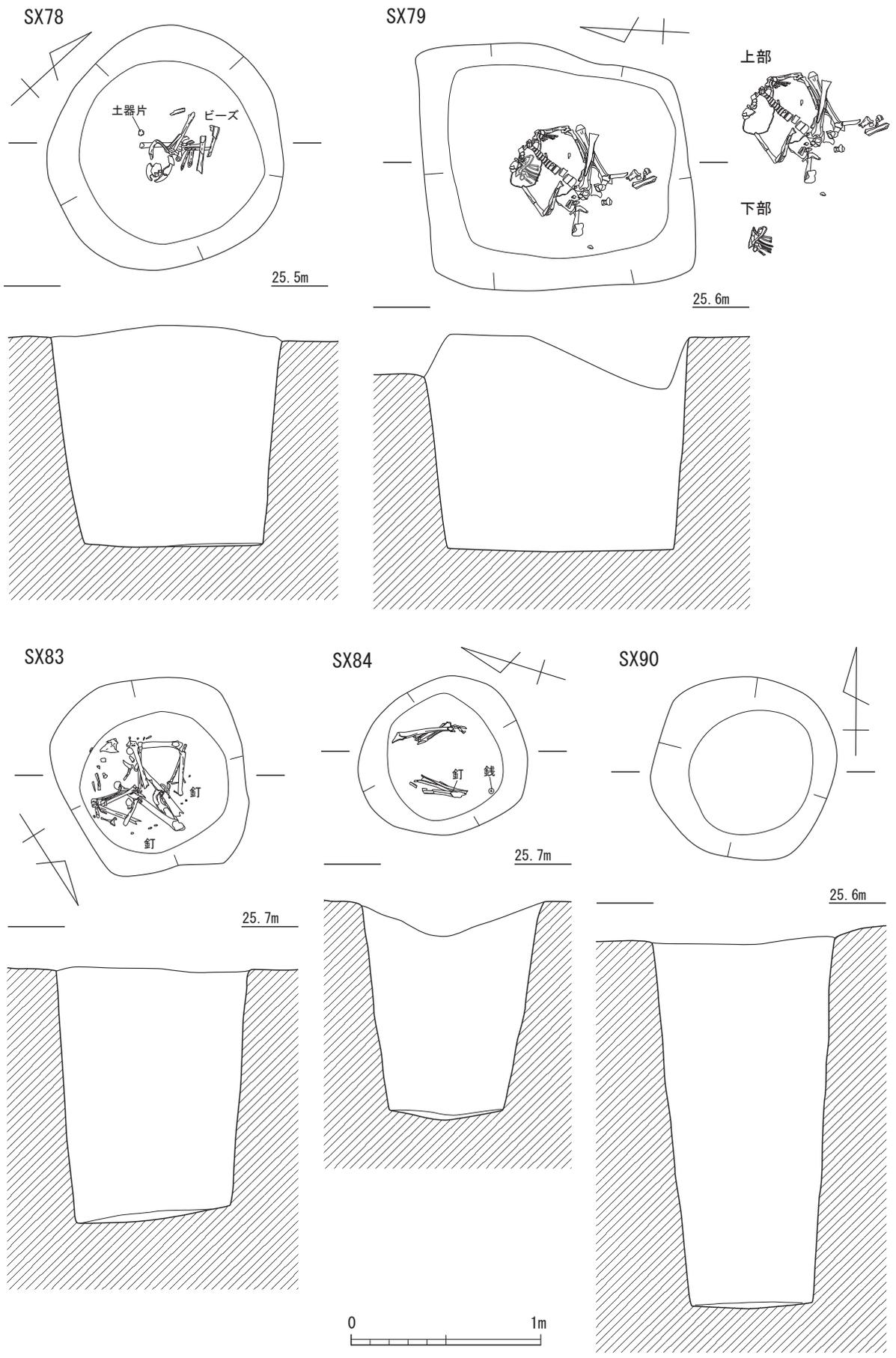
調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.3m、短軸は不明で、平面隅丸方形と考えられる。深さは 1.75m である。副葬品はない。

SX50 (第 81 図、図版 61)

調査区南東部に位置する。墓坑は長軸 1.35m、短軸 0.95m の平面楕円形を呈し、深さは 0.4m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX51 (第 81 図、図版 61)

調査区南東部に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 1.0m の平面楕円形を呈し、深さは 0.65m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。



第 82 図 SX78・79・83・84・90 実測図 (1/30)

SX52 (第81図)

調査区南東部に位置する。墓坑は長軸0.9m、短軸0.8mの平面楕円形を呈し、深さは0.35mである。磁器皿が出土した。

出土遺物 (第83図、図版95)

陶磁器 (249) 色絵磁器の皿。口縁部は輪花で、全面に施釉の後、高台畳付の釉を剥ぎ取る。内面は編み籠状の型押文をつけ、見込みに赤い海老を線描きする。

SX53 (第81図)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸0.8mの平面楕円形を呈し、深さは0.6mである。副葬品はない。

SX54 (第81図)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸0.7m、短軸0.7mの平面円形を呈し、深さは0.2mである。副葬品はない。

SX59 (第81図)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.2m、短軸1.15mの平面隅丸長方形を呈し、深さは0.4mである。副葬品はない。

SX78 (第82図、図版61)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.25m、短軸1.25mの平面円形を呈し、深さは1.2mである。墓坑内に人骨が残る。玉・土器片が出土した。

出土遺物 (第83図、図版97)

ガラス製品 (250～252) 数珠玉が3点出土した。250は明黄褐色半透明の数珠玉。251・252は白色に風化するが半透明の数珠玉。

SX79 (第82図、図版61)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.4m、短軸1.3mの平面長方形を呈し、深さは1.1mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX83 (第82図、図版61)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸1.0mの平面円形を呈し、深さは1.4mである。墓坑内に人骨が残る。釘が出土した。

SX84 (第82図、図版61)

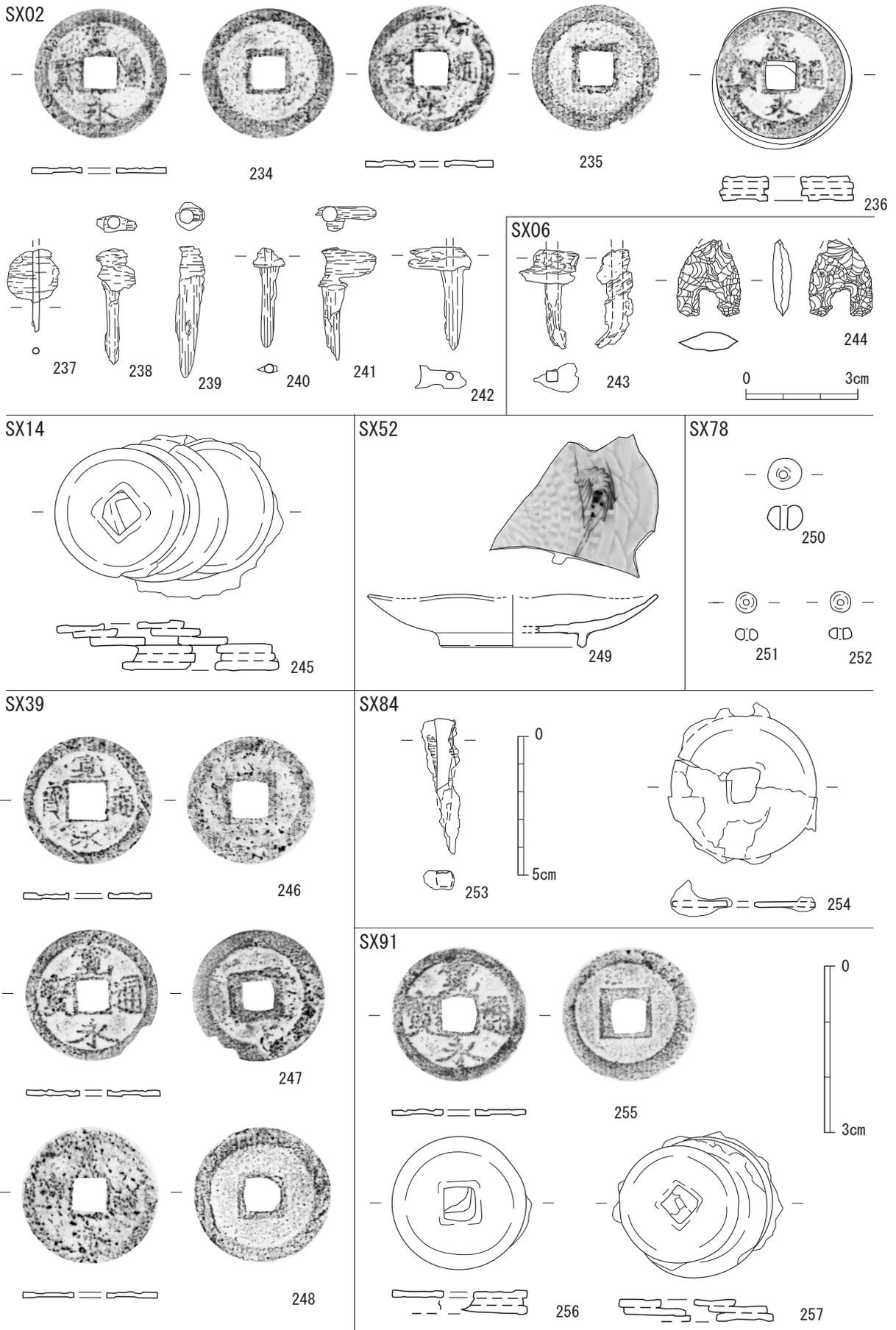
調査区北側に位置する。墓坑は長軸0.85m、短軸0.85mの平面円形を呈し、深さは1.15mである。墓坑内に人骨が残る。銭・釘が出土した。

出土遺物 (第83図、図版94・99)

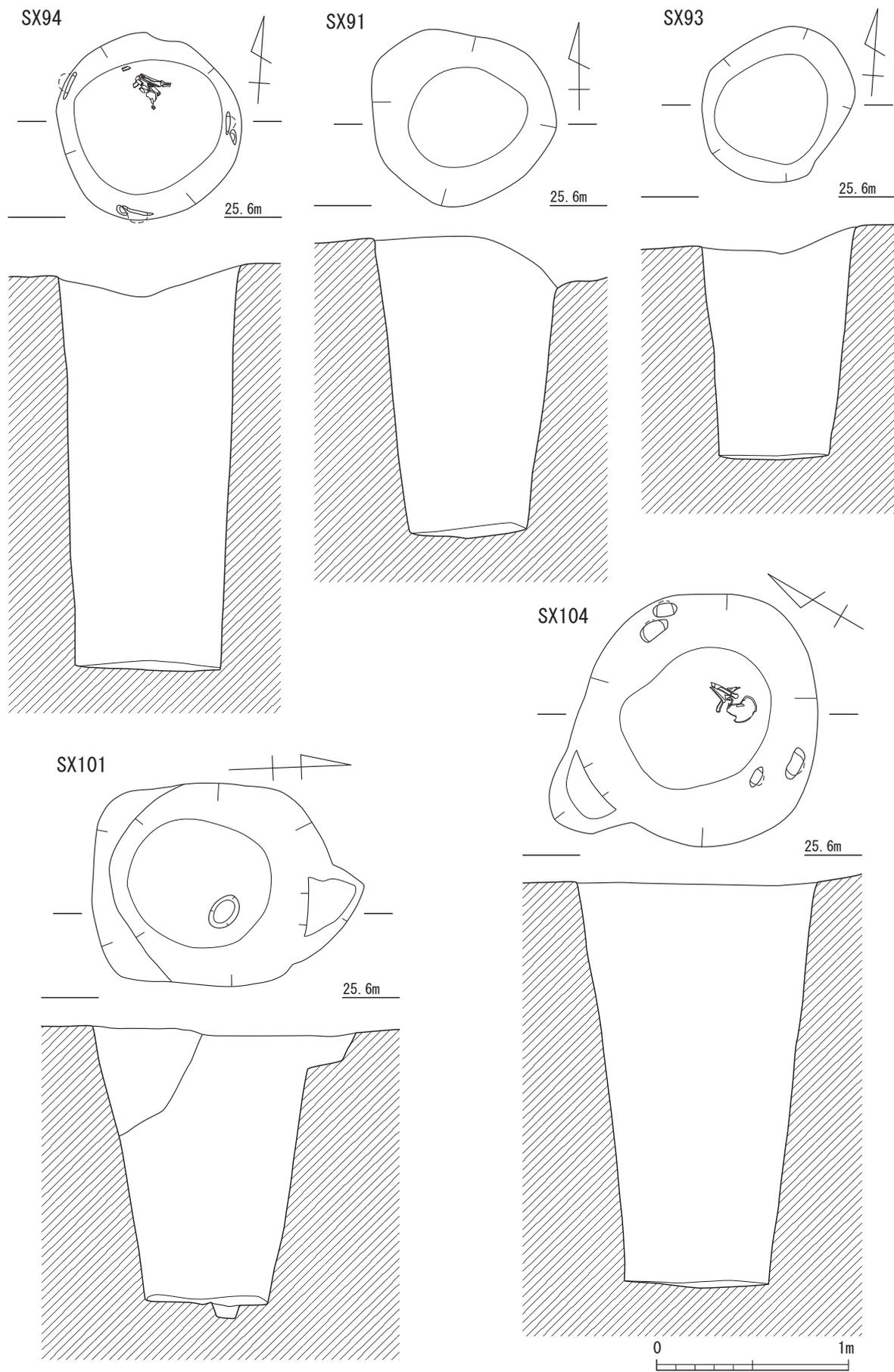
鉄製品 (253・254) 253は角釘と考えられるが、劣化著しく剥離と膨張で本来の形状を復元し難い。254は鉄銭で布状のものが付着する。

SX90 (第82図)

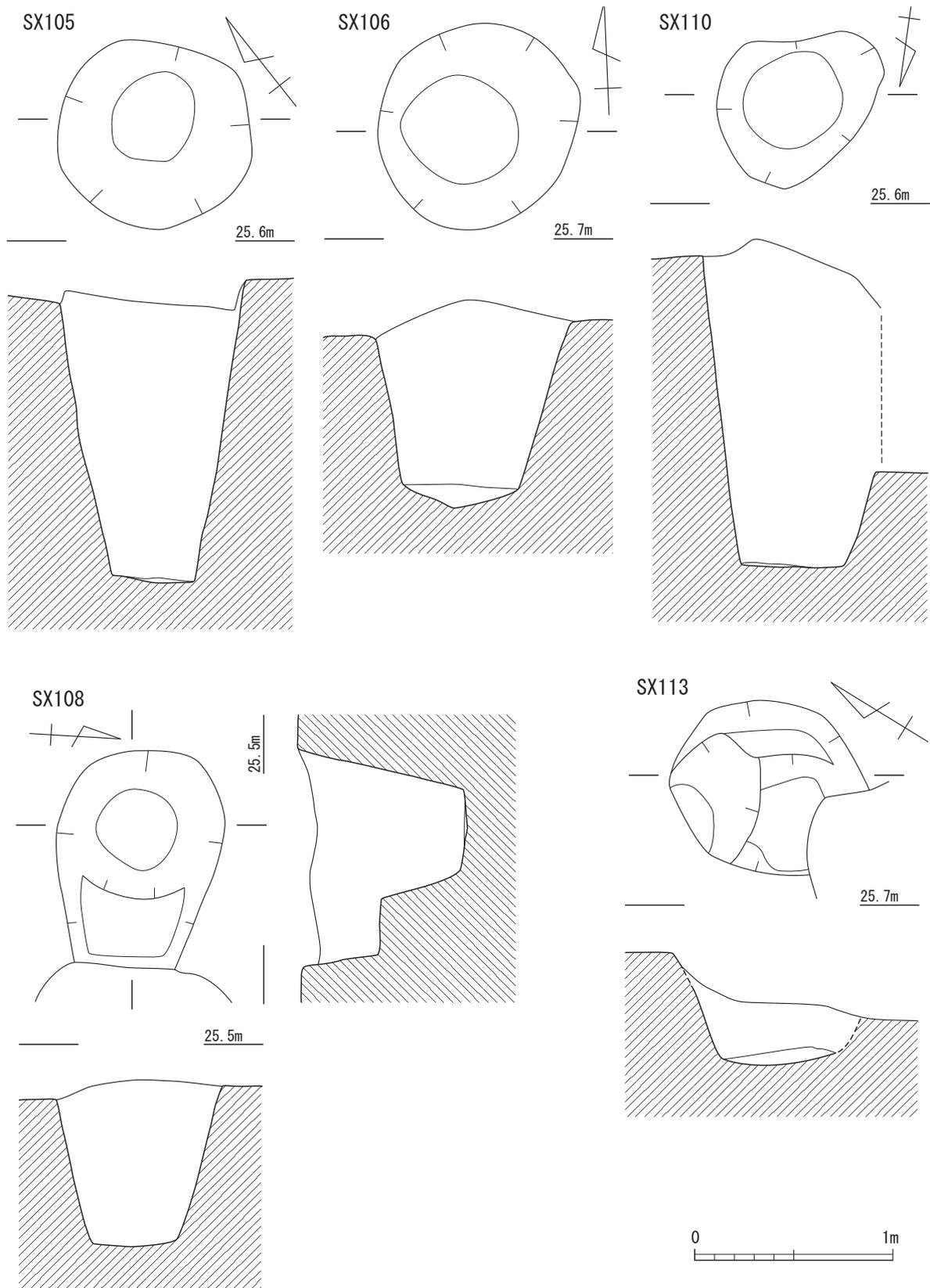
調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸1.0mの平面円形を呈し、深さは1.95mである。副葬品はない。



第83図 SX02・06・14・39・52・78・84・91 出土遺物実測図
(237～243・253は1/2、244は2/3、249は1/3、他は原寸)



第84図 SX91・93・94・101・104実測図(1/30)



第85図 SX105・106・108・110・113実測図(1/30)

SX91 (第84図、図版62)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸0.95m、短軸0.9mの平面楕円形を呈し、深さは1.6mである。銭が出土した。

出土遺物 (第83図、図版99)

銅製品・鉄製品 (255～257) 確実ではないが、SX91出土遺物として報告する。255は銅銭の寛永通宝である。256は3枚が錆のため重なって固着する。実測図の上1枚が銅銭で、下2枚が鉄銭である。銭文は不明。鉄銭は2枚とも1/4程の残存である。257は錆のため3枚が重なって固着する。実測図の上から2枚が銅銭で、下1枚が鉄銭である。銭文は不明。鉄銭は1/2程の残存である。

SX93 (第84図)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸0.85m、短軸0.7mの平面楕円形を呈し、深さは1.2mである。副葬品はない。

SX94 (第84図、図版62)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸0.95m、短軸0.95mの平面円形を呈し、深さは2.1mである。墓坑内に人骨が残るが、改葬を受けているものと考えられる。金属片・土器片が出土した。

SX101 (第84図)

調査区北東部に位置する。墓坑は長軸1.25m、短軸1.05mの平面楕円形を呈し、深さは1.45mである。副葬品はない。

SX104 (第84図、図版62)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.3m、短軸1.3mの平面円形を呈し、深さは2.1mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX105 (第85図)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸0.95m、短軸0.95mの平面円形を呈し、深さは1.5mである。副葬品はない。

SX106 (第85図)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸1.0mの平面円形を呈し、深さは1.05mである。副葬品はない。

SX108 (第85図)

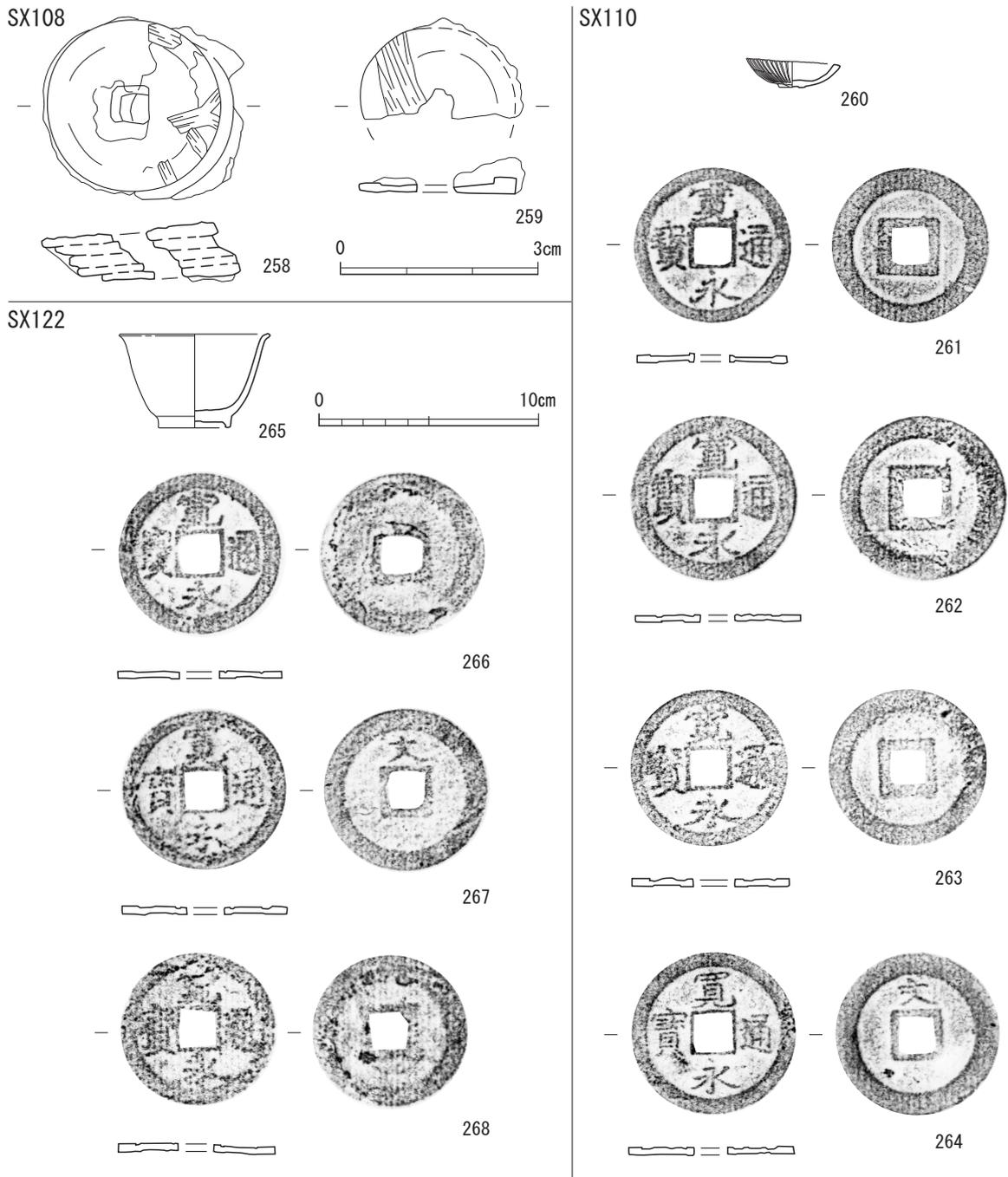
調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.1m以上、短軸0.9mの平面楕円形を呈し、深さは0.85mである。銭が出土した。

出土遺物 (第86図、図版99)

銅製品 (258・259) 258は5枚が錆のため重なって固着する銅銭で、実測図の最下位のものは1/2以上欠失する。銭文は不明で繊維状のものが付着する。259は銭文不明の銅銭で、繊維状のものが付着する。

SX110 (第85図)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸0.9m、短軸0.7mの平面不整な円形を呈し、深さは1.65mである。磁器紅皿・銭が出土した。



第 86 図 SX108・110・122 出土遺物実測図
(260・265 は 1/3、他は原寸)

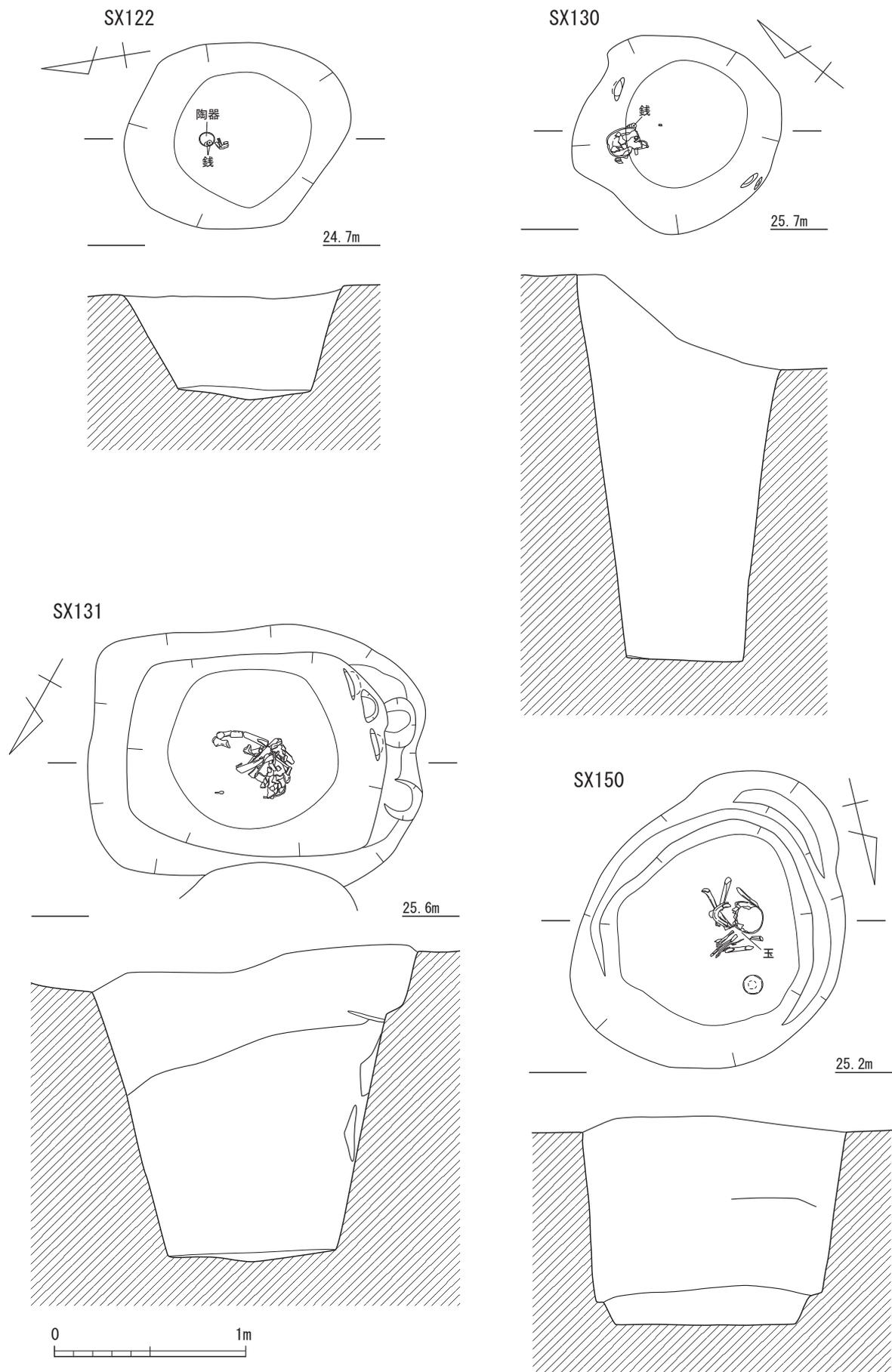
出土遺物（第 86 図、図版 95・99）

陶磁器（260）白磁の紅皿。底部外面以外は施釉する。

銅製品（261～264）いずれも銅銭の寛永通宝である。264 は背面に「文」の字を鑄出す。

SX113（第 85 図）

調査区北側に位置し、SX83 に切られる。墓坑は長軸 1.0m、短軸 0.85m の平面楕円形を呈し、深さは 0.5m である。副葬品はない。



第 87 図 SX122・130・131・150 実測図 (1/30)

SX122 (第 87 図、図版 62)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.15m、短軸 1.0m の平面楕円形を呈し、深さは 0.55m である。墓坑内に人骨が残る。陶器・銭が出土した。

出土遺物 (第 86 図、図版 95・99)

陶磁器 (265) 磁器の猪口。全面に施釉した後、高台畳付の釉を剥ぎとる。畳付には砂が付着する。釉は淡い水色味をおびた透明釉である。

銅製品 (266～268) 銅銭の寛永通宝。267 の背面には「文」の字を鋳出す。

SX130 (第 87 図、図版 62)

調査区中央部に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 1.0m の平面不整な円形を呈し、深さは 2.0m である。墓坑内に人骨が残る。磁器小椀・銭が出土した。

出土遺物 (第 87 図、図版 94・95・99)

陶磁器 (269) 染付磁器の小椀。全面に施釉した後、高台畳付の釉を拭き取る。畳付には一部に砂が付着する。

弥生土器 (270) 脚裾部を欠失する高杯で、脚部内面以外は全面丹塗りである。体部に 1 条の M 字突帯を貼り付ける。杯部は口縁部内外面と突帯がヨコナデ、体部はナデ。脚部は内外面ともにナデで、外面は面取りをする。

銅製品・鉄製品 (271～273) 271 は 2 枚が銹のため重なって固着する。実測図の上 1 枚が銅銭の寛永通宝で、下 1 枚が鉄銭。鉄銭には木質が付着する。272 は 3 枚がずれて銹のため重なって固着する銅銭である。実測図の最上位の銭文は寛永通宝である。273 は銅銭の寛永通宝。

SX131 (第 87 図、図版 62)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.9m、短軸 1.2m の平面隅丸長方形を呈し、深さは 1.6m である。墓坑内に人骨が残る。磁器椀・煙管・数珠玉が出土した。

出土遺物 (第 89 図、図版 93・97)

銅製品 (274) 煙管で、羅字が一部残存する。雁首に布が付着する。

ガラス製品 (275～279) 完形の数珠玉が 37 点と破片が出土し、5 点を図化した。275・278・279 は白色に風化した数珠玉。276・277 も白色に風化した数珠玉だが、無色半透明の部分がある。

SX150 (第 87 図、図版 69)

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.65m (床面で 1.0m)、短軸 1.35m (床面で 1.0m) の平面楕円形を呈し、深さは 1.1m である。墓坑内に人骨が残る。枕・ガラス玉・磁器椀が出土した。

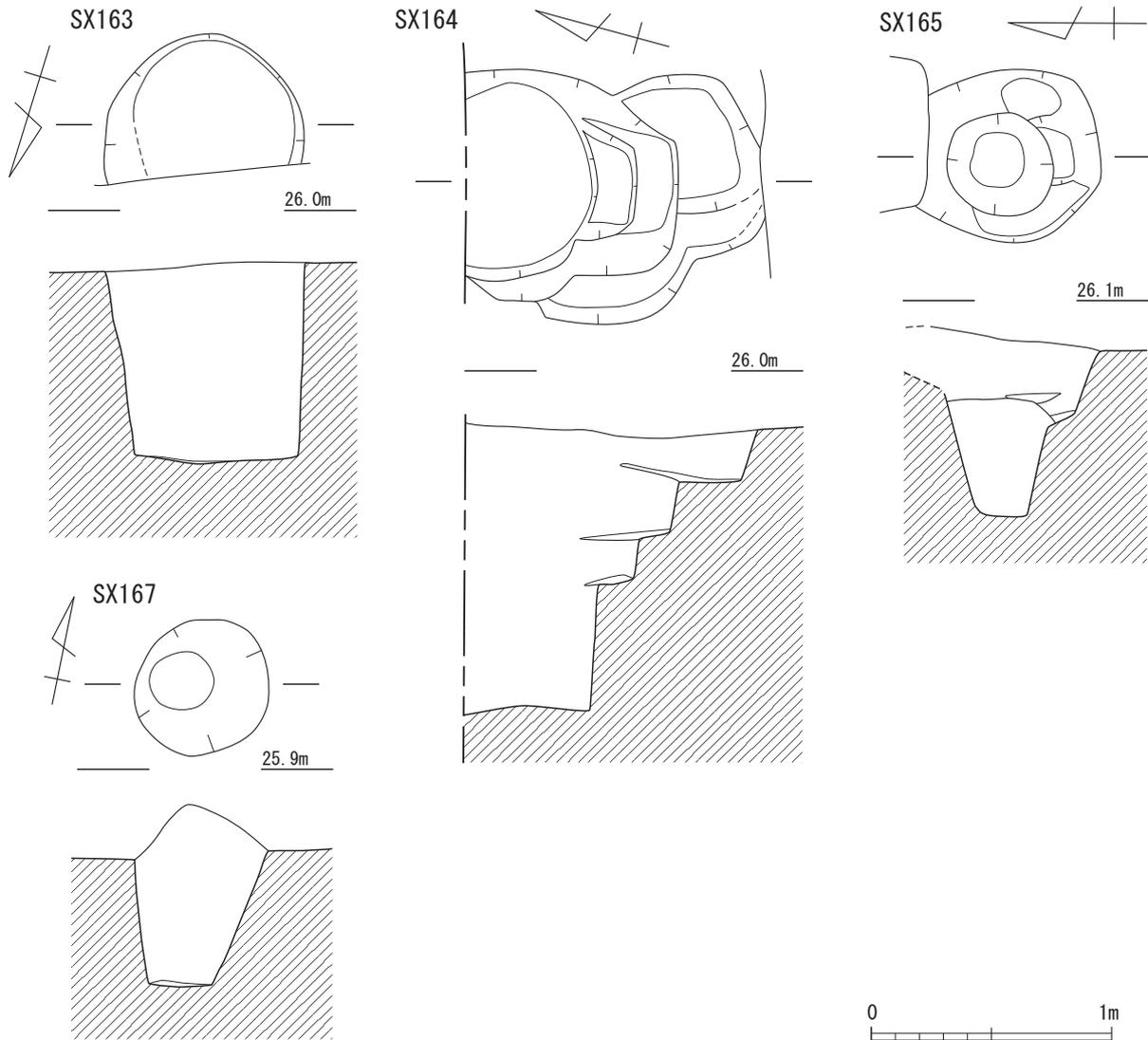
出土遺物 (第 89 図、図版 95・97)

陶磁器 (280) 染付磁器の小椀で、外面に草花文を描く。全面に施釉した後、高台畳付の釉を剥ぎとり、内面は輪状に釉を剥ぎとる。畳付には砂が付着する。

ガラス製品 (281) 青緑色で半透明の数珠玉。表面は小部分であるが極く細かい斑点状や細い筋状に白色に風化する。

SX163 (第 88 図、図版 57)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.75m、短軸 0.6m 以上の平面円形を呈し、深さは 0.8m である。



第88図 SX163～165・167実測図(1/30)

副葬品はない。

SX164 (第88図、図版62)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.0m前後、短軸1.0m前後の平面円不整形な形を呈し、深さは1.2mである。副葬品はない。

SX165 (第88図)

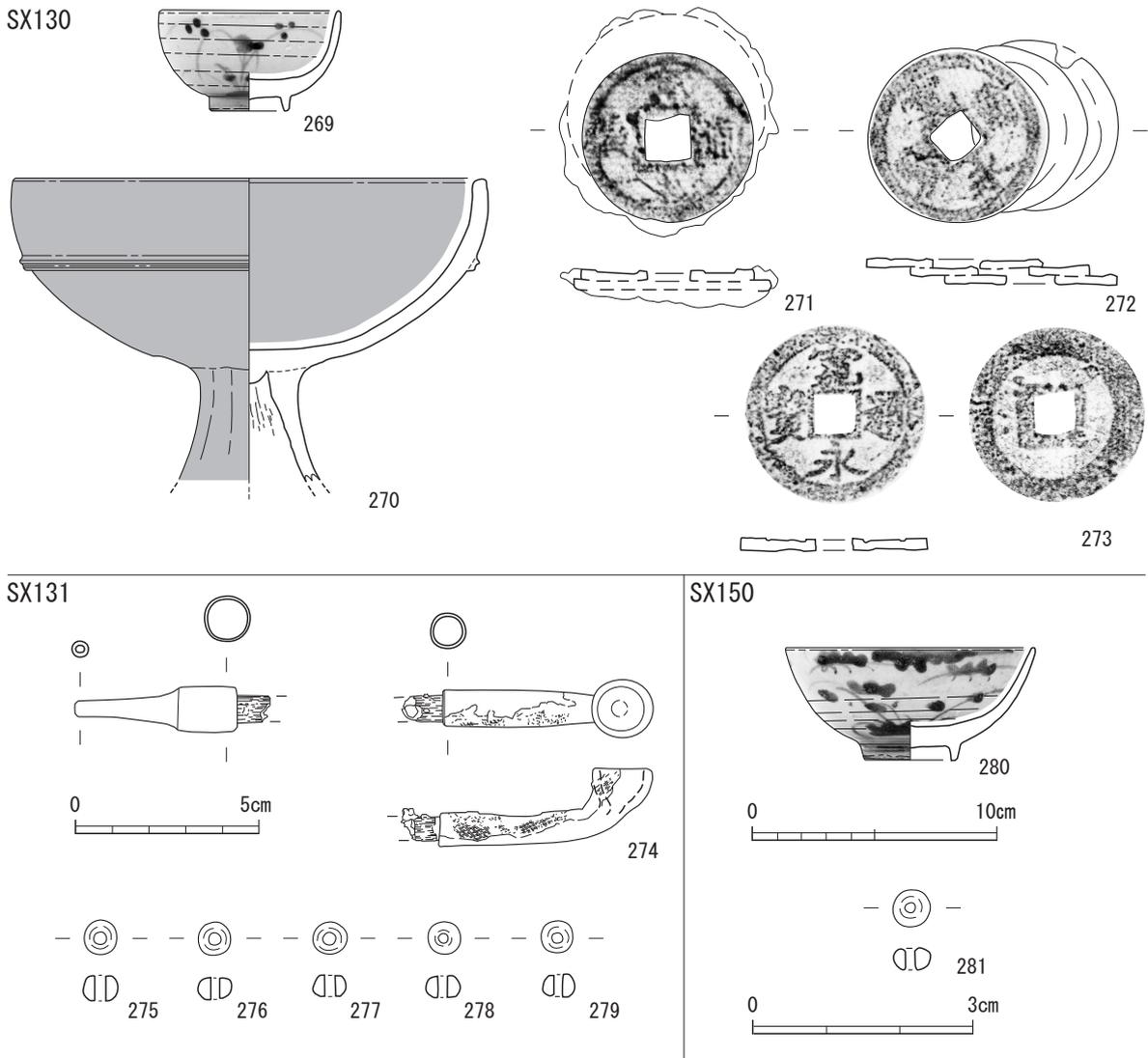
調査区北側に位置する。墓坑は長軸0.7m以上、短軸0.7mの平面楕円形を呈し、深さは0.8mである。陶器片が出土した。

SX167 (第88図)

調査区北西側に位置する。墓坑は長軸0.55m、短軸0.55mの平面円形を呈し、深さは0.75mである。副葬品はない。

③木棺墓・土坑墓

SX03 (第90図)



第 89 図 SX130・131・150 出土遺物実測図
(269・270・280 は 1/3、274 は 1/2、他は原寸)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 1.55m 以上（床面で 1.3m）、短軸不明（床面で 0.5m）の平面楕円形を呈し、深さは 0.4m である。副葬品はない。

SX18（第 90 図、図版 62）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.4m（床面で 1.2m）、短軸 1.1m（床面で 0.8m）の平面隅丸長方形を呈し、深さは 0.6m である。墓坑内に人骨が残る。土師器皿が出土した。

出土遺物（第 95 図）

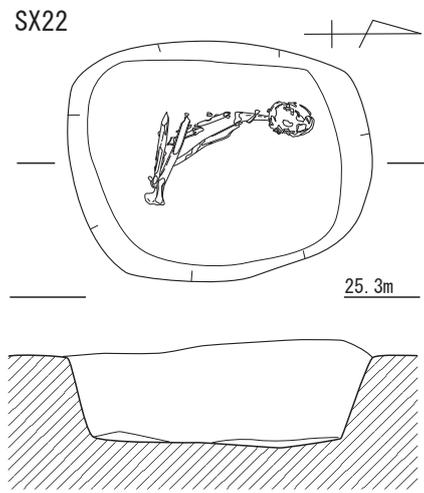
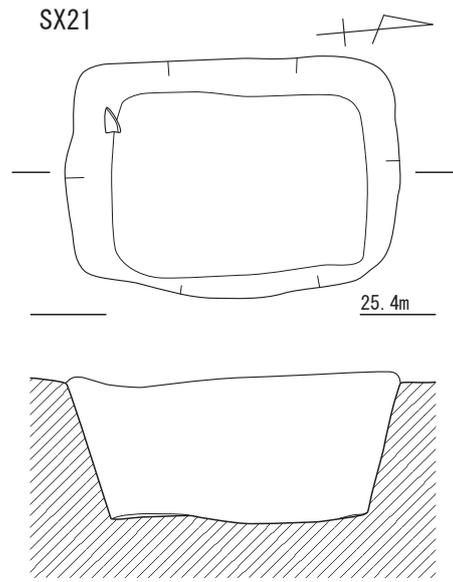
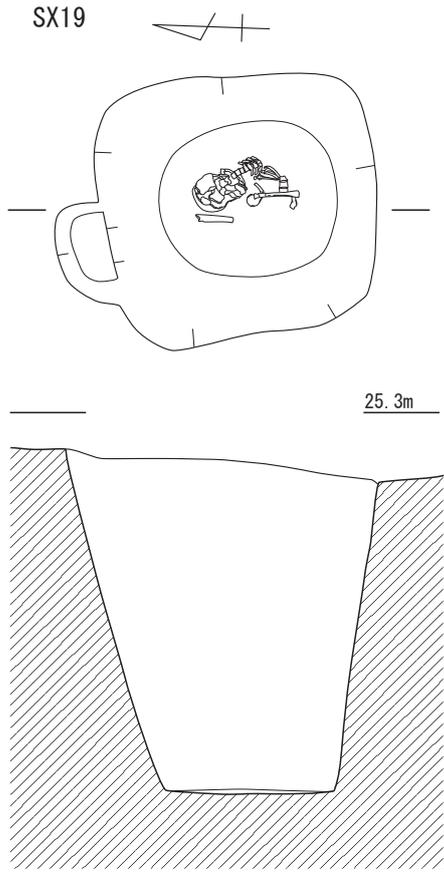
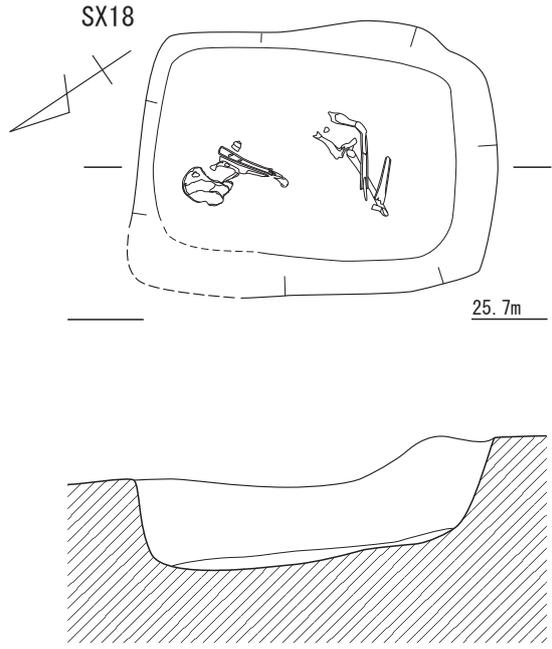
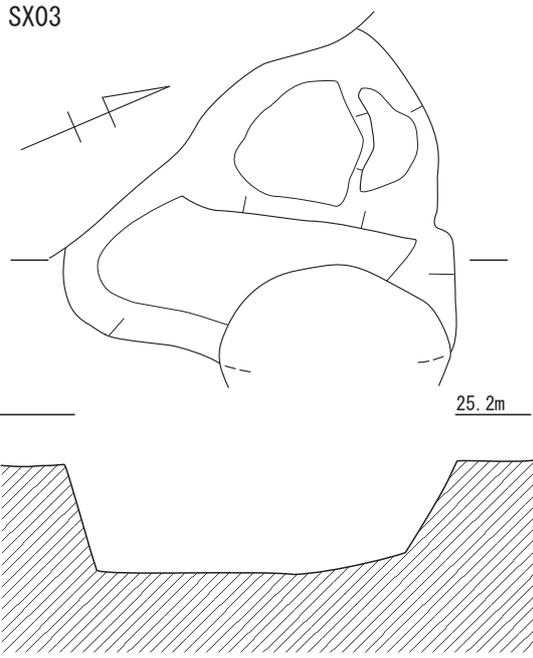
土師器（282）底部を欠損する皿の破片である。内外面ともに回転ナデで、体部内面下位は磨滅する。

SX19（第 90 図、図版 63）

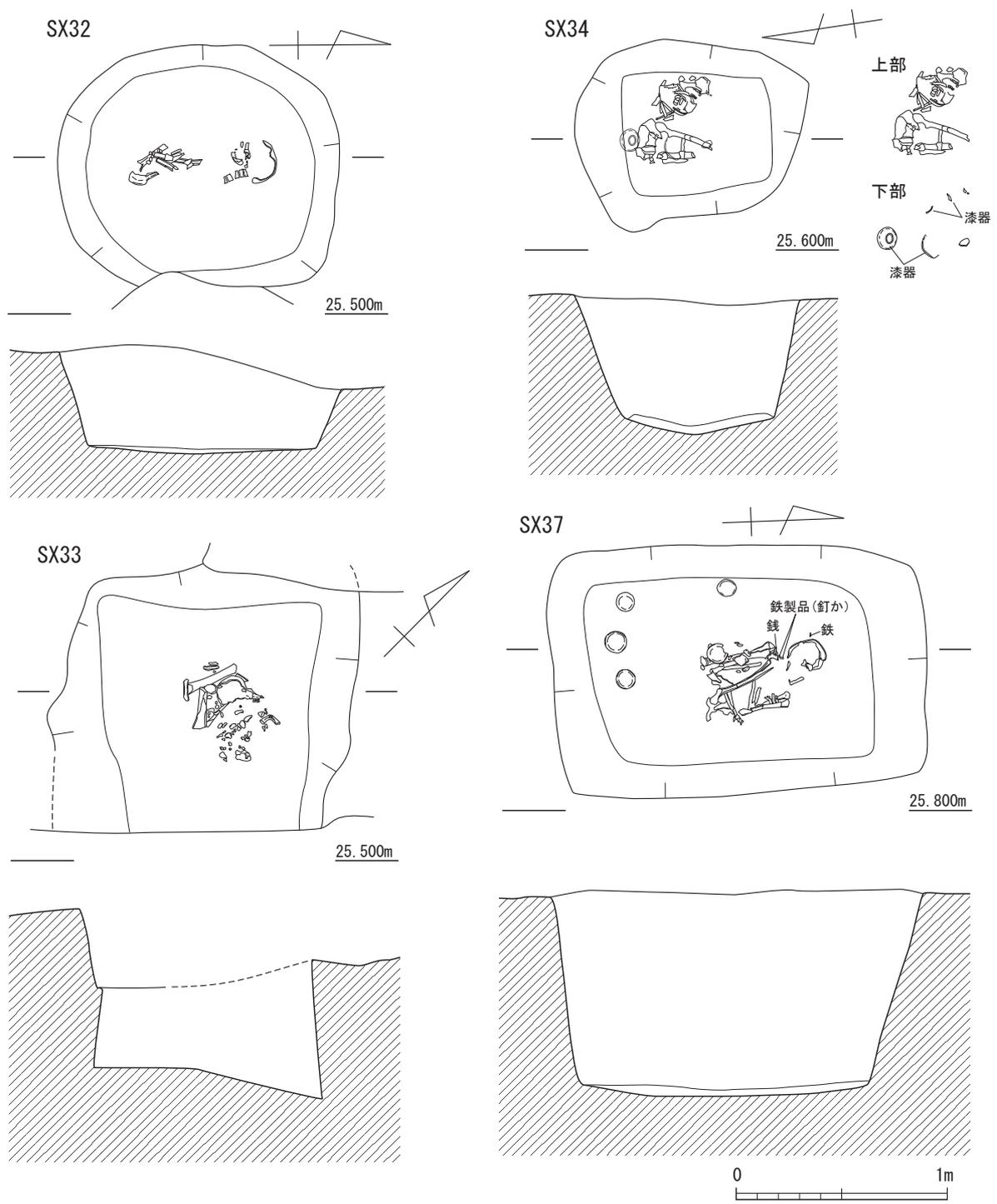
調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.1m（床面で 0.7m）、短軸 1.05m（床面で 0.6m）の平面隅丸方形を呈し、深さは 1.35m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX21（第 90 図、図版 63）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.3m（床面で 1.0m）、短軸 0.95m（床面で 0.7m）の平面



第90図 SX03・18・19・21・22 実測図 (1/30)



第91図 SX32～34・37実測図(1/30)

隅丸方形を呈し、深さは0.6mである。青磁碗・玉・金属製品が出土した。

出土遺物(第95図、図版94・97)

陶磁器(283) 同安窯系青磁の碗。体部外面には櫛目文を施す。

ガラス製品(284～286) 数珠玉が73点出土し、3点を図化している。284～286は明黄褐色で半透明の数珠玉。

銅製品(287) 確実ではないがSX21出土遺物として報告する。287は十字架のペンダントと思われる

る。銅地銀箔貼り金渡金のように見える。

SX22 (第90図、図版63)

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸1.2m(床面で1.0m)、短軸1.0m(床面で0.8m)の平面隅丸長方形を呈し、深さは0.4mである。墓坑内に人骨が残る。玉・鉄製品・瓦質土器が出土した。

出土遺物(第95図、図版97)

ガラス製品(288～290) 288・290は白色に風化した数珠玉。289は明緑色で、半透明のガラス玉。

SX32 (第91図、図版63)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.35m(床面で1.05m)、短軸1.15m(床面で0.95m)の平面不整な円形を呈し、深さは0.5mである。墓坑内に人骨が残る。土師器小皿・磁器片が出土した。

出土遺物(第95図)

土師器(291) 小皿。底部は回転糸切りである。口縁部から体部は回転ナデ、底部内面はナデ。

SX33 (第91図、図版63)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.3m以上(床面で1.0m以上)、短軸1.4m(床面で0.95m)の平面長方形を呈し、深さは0.9mである。墓坑内に人骨が残る。玉・土師器片・鉄器片が出土した。

出土遺物(第95図、図版97)

ガラス製品(292～296) 数珠玉が51点出土し、5点を図化した。292・293・295は濃青色の数珠玉だが、風化して白色部分と縞模様になる。294は濃青色の数珠玉で、296は明黄褐色で半透明の数珠玉。

SX34 (第91図、図版63)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.05m(床面で0.7m)、短軸0.85m(床面で0.6m)の平面不整な長方形を呈し、深さは0.65mである。墓坑内に人骨が残る。漆器・陶器皿・土器片・玉が出土した。

出土遺物(第95図、図版96)

陶磁器(297) 陶器の皿である。胴部が丸く外に張り、口縁部は立ち上がり端部で外反する。内面から体部上位に灰緑色味を帯びた釉を施している。底部外面には3か所の目痕がある。

SX37 (第91図、図版64)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.7m(床面で1.3m)、短軸1.2m(床面で0.9m)の平面長方形を呈し、深さは1.0mである。墓坑内に人骨が残る。土師器小皿・銭が出土した。

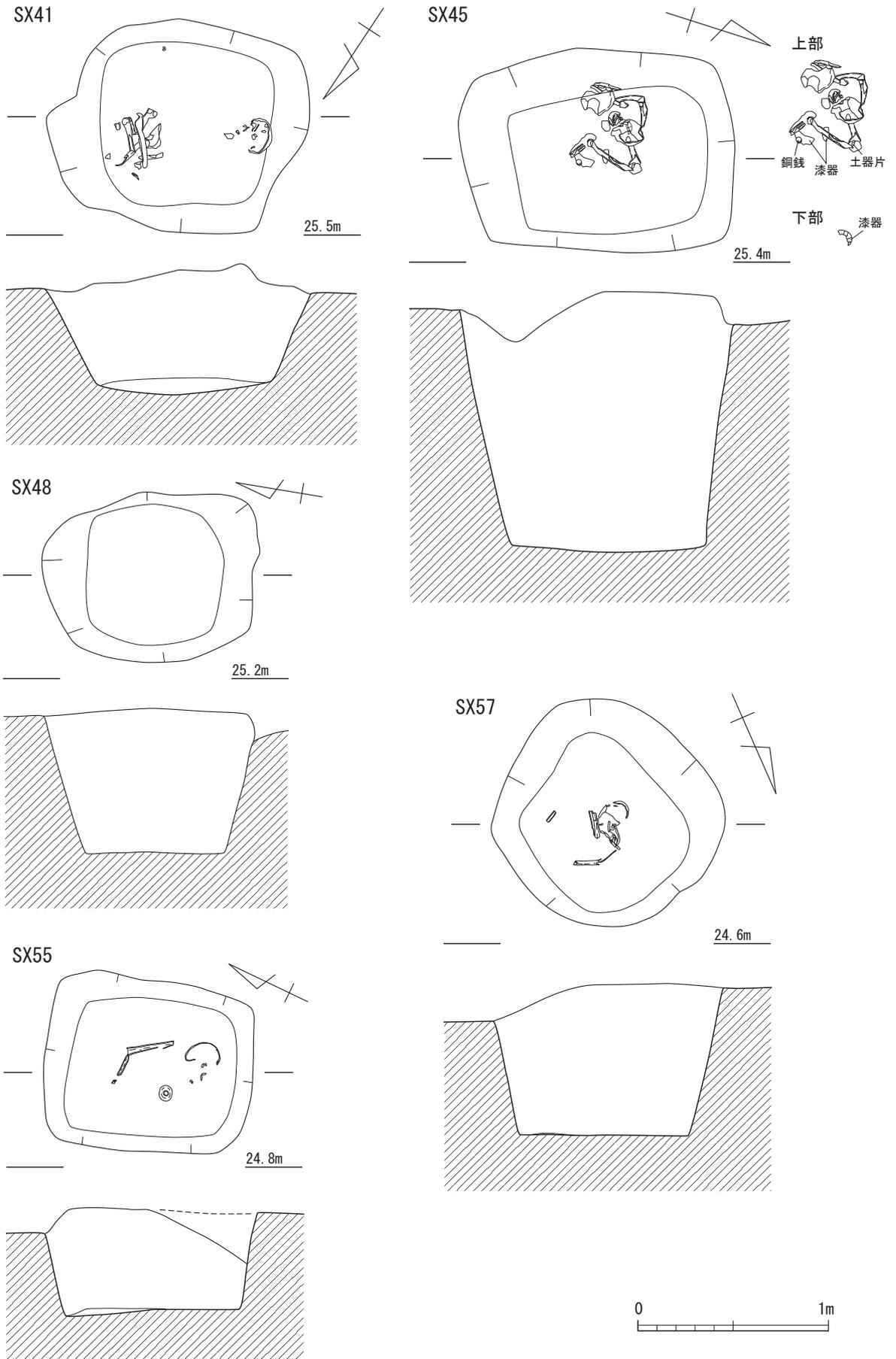
出土遺物(第95図、図版96・99)

土師器(299～304) いずれも小皿で、底部は回転糸切り。303は口径9.8cmで器高が1.8～2.2cmで、他の5点(299～302、304の口径9.2～9.4cm、器高1.35～1.7cm)と比べて法量が大きい。内外面回転ナデだが、303を除いて底部内面にナデを施す。301、304には板状圧痕、303には板状と考えられる痕跡、302には簾状の圧痕がある。

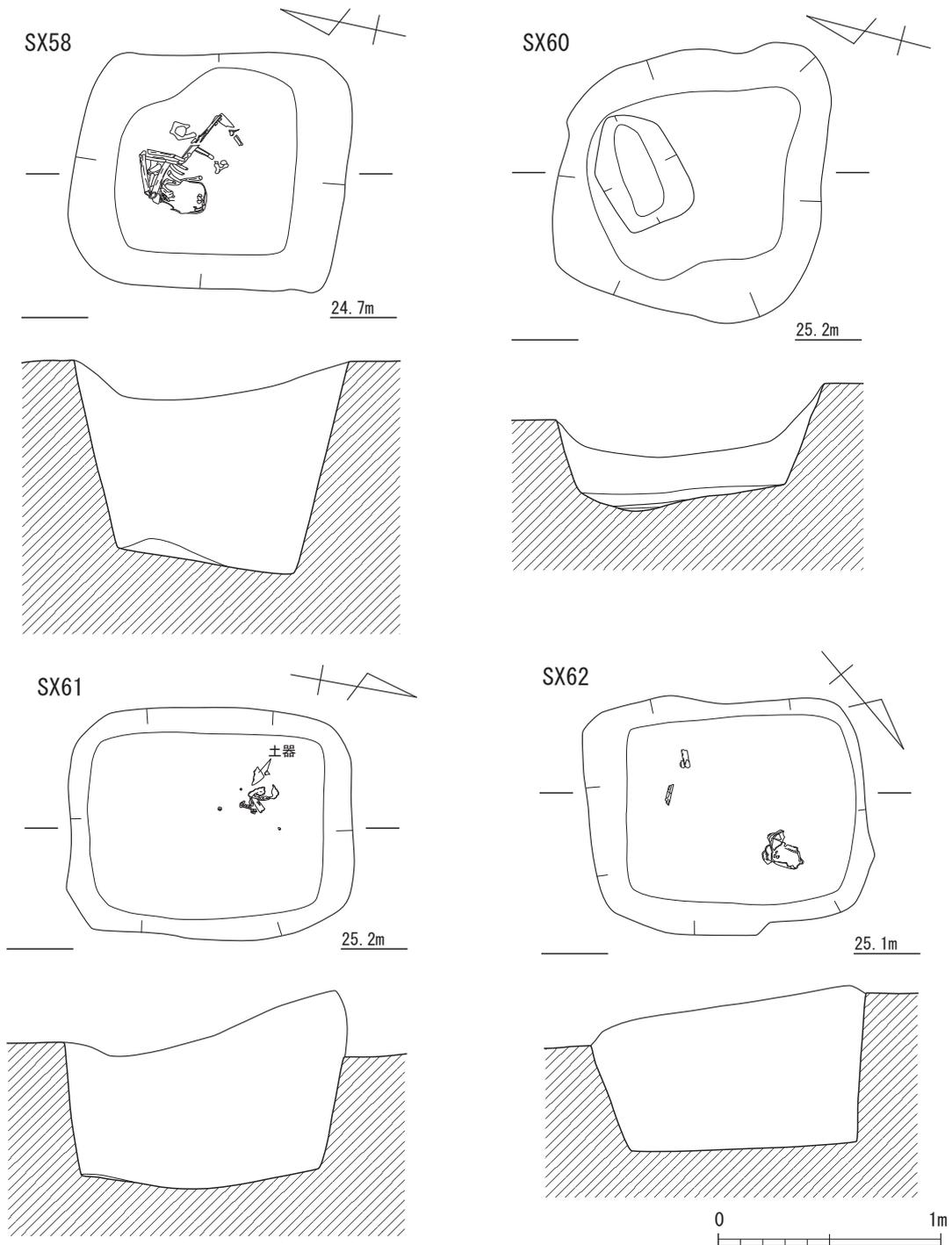
銅製品(305) 2枚が銹のため重なって固着する銅銭である。銭文は不明。

SX41 (第92図、図版64)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.2m(床面で0.9m)、短軸1.1m(床面で0.85m)の平



第 92 図 SX41・45・48・55・57 実測図 (1/30)



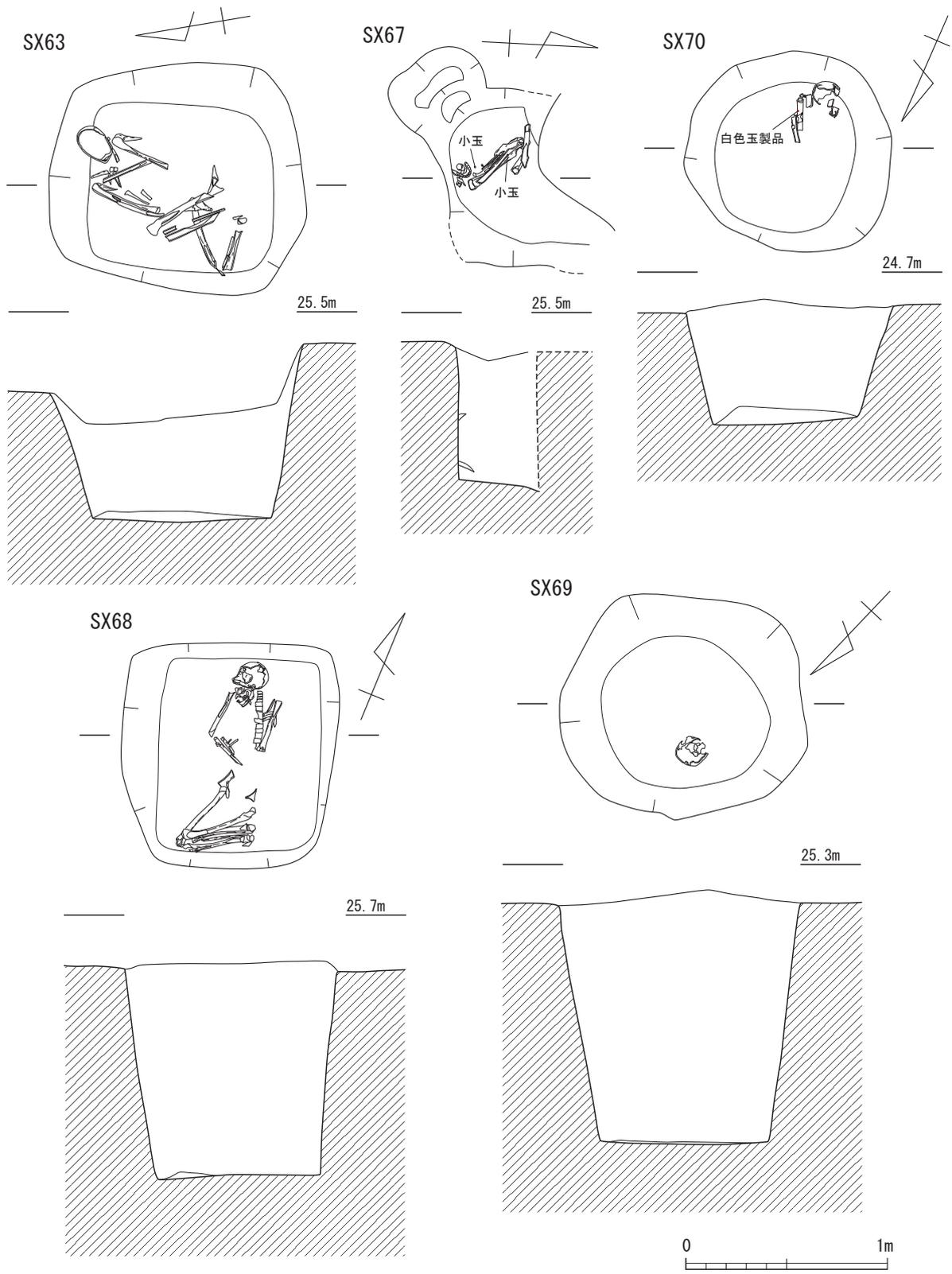
第93図 SX58・60・61・62 実測図 (1/30)

面不整な方形を呈し、深さは0.7mである。墓坑内に人骨が残る。土師器杯・皿・銭が出土した。
出土遺物 (第98図)

銅製品 (306) 半分程欠損する銅銭である。銭文は不明。

SX45 (第92図、図版64)

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸1.4m (床面で1.05m)、短軸1.1m (床面で0.75m) の平面長方形を呈し、深さは1.4mである。墓坑内に人骨が残る。漆器・磁器片・銭・顔料袋が出土した。



第94図 SX63・67～70実測図(1/30)